

上院ノ上奏及勅答

千七百八十四年二月四日會議

エツプヒンハム伯上奏案ヲ提出スルコトヲ發議セリ。而シテ此發議ハ分列表決ニ付セズ、直チニ通過セザルヲ以テ、同伯ハ左ノ上奏案ヲ陛下ニ捧呈スルノ動議ヲ提出セリ。其上奏案ニ曰ク。

陛下ノ最モ忠實ナル臣民タル上院議員ハ、其決議ヲ以テ爰ニ叡聖文武皇帝陛下ニ上奏ス。

抑モ我憲法ノ妙慧ハ重要ナル行政官ヲ選任スルノ大權ヲ擧ゲテ以テ陛下ノ掌中ニ專任スルニアリ。是レ臣等ガ最モ満足ヲ表スル所ナリ。而シテ陛下ハ慈愛ト識見トヲ以テ常ニ陛下ノ議院及公衆ノ信用ヲ受クルニ最モ値スル人々ヲ選任シ、又之ヲシテ其職ニ留任セシムルコトニ熱心ナルハ臣等ガ確信スル所ナリ。

是ヲ以テ臣等ハ常ニ陛下ガ我憲法ノ妙慧ニ基キ、我臣民ノ生命及財産ヲ保護スル唯一ノ目的ノ爲ニ、此ノ大權ヲ實行セラル、コトヲ保證スルノ微衷ヲ奉呈ス。蓋シ陛下ガ此ノ大權ヲ適當ニ且ツ終始間斷ナク實行セラル、ガ爲ニ、陛下ノ臣民ハ宇内最良ノ政府ノ下ニ存在スル幸福ヲ享有スルコトヲ得ルモノナリ。

此ノ上奏ニ對シテ陛下ハ左ノ勅答ヲ與ヘラレタリ。

諸卿。朕ハ深ク卿等ガ忠實ナル上奏ヲ嘉納ス。而シテ朕ハ大臣ヲ選任スルニ當リ、朕ガ議院及公衆ノ信用ヲ受クルニ最モ値スル人々ヲ以テ輔翼ノ任ニ當ラシムルノ外他ニ目的ナキコトヲ爰ニ明言ス。卿等夫レ其意ヲ安ンゼヨ。朕ハ我憲法ニ依リ、朕ニ委任セラレタル所ノ大權ヲ實行スルニ當リ、常ニ期スル所ハ一ニ我が國民ノ幸福ヲ保全スルニ在リ。是レ朕ガ平素考究スル所タルコトハ今爰ニ詳述スルヲ俟タザルナリ。

上奏謁見其他

- 一、英國ニテ兩院議長ハ各別ニ謁見スルヤ。
- 一、英國及其他ノ國々ニテ開院式ハ必國儀式ナルヤ。
- 六馬ノ馬車、親任官白袴ノ大禮服ノ類。
- 一、謁見ノ時ハ内閣大臣立合フヤ。
- 一、勅諭ノ奉答文ハ君主ニ差出シ君主之ヲ受取ルヤ又ハ朗讀ニ止マルヤ。
- 一、奉答文起草ノ手續ノ事。

上奏及謁見ノコトハメイノ國會慣例ニ詳ナリ。或ハ尊問ノ外ニ亘ルモノアルモ、茲ニ原文ノ儘ヲ反譯シテ尊覽ヲ煩ハス。

兩院共同シテ上奏ヲ天子ニ奉呈スルコト往々之アリ。然レドモ各院別ニ上奏スルヲ常トス。重大ノ事件アリテ共同上奏ヲ要スルトキハ、貴族院又ハ庶民院ハ上奏案ヲ作り協議會ヲ開キテ他院ノ同意ヲ求ム……選舉ノ賄賂事件審査ノ爲メニ委員ヲ設クルコトニ付、兩院ノ共同上奏ニ一致シタルガ如キ是ナリ……如是上奏ハ兩院一體トナリ（庶民議事録第八十七卷四百二十

四頁、貴族院議事録第七十二卷百六十九頁）又ハ貴族院議員二名庶民院議員四名ヲシテ之ヲ奉呈セシム。又特ニ兩院ノ各委員或ハ兩院ノ共同委員或ハ兩院議長ヲシテ之ヲ奉呈セシメタルコトアリ（一千八百八十年九月二日女王ノバルモラルニ在ルヤ、共同上奏ノ爲メニ兩院議員ノ親謁ヲ省略スルコトヲ許サレタリ……）開會ノ勅諭ニ對スル上奏文ハ、儀式上委員之ヲ立案ス。該委員ノ報告ヲ朗讀スルコト二回ニシテ之ヲ決ス。然レドモ儀式上ノ上奏案ヲ作ラズ單ニ上奏ノ決議ヲ奉呈スルコト多シ。一千八百五十四年ニ於テハ委員ニ付スルコトナク（決議ノ體裁ニ依ラズシテ）通常ノ體裁ヲ以テ上奏ヲ奉呈スベキコトヲ決議シタリ。而シテ樞密顧問官又ハ議員自ラ此ノ如キ決議ヲ奉呈スルハ百五十年來ノ慣例ナリト雖モ、全院ヲ以テ之ヲ奉呈セントスルトキハ、右述ノ體裁ヲ以テスルカ否ラザレバ委員ノ立案シタルモノナラザルベカラズ。何トナレバ議長ガ陛下ニ對シ單ニ上奏ノ決議ヲ朗讀スルト、此目的ノ爲メニ特ニ立案シタル上奏文ヲ朗讀スルトハ其結果素ヨリ同日ノ論ニアラザレバナリ。

兩院共同上奏ヲ爲サントスルトキハ、貴族院議長及貴族院、庶民院議長及庶民院、國儀式ヲ以テ定刻ニ皇居ニ向フ。庶民院議長ノ國儀馬車及庶民院議員ノ馬車ハ（特權又ハ慣例ニ依リ）セント、デームス公園ノ中道ヨリ皇居ニ進ムヲ得。蓋シ此權利ハ謁見自由ノ特權トシテ之ヲ享有スルヤ又ハ他ノ權力慣習ヨリシテ之ヲ享有スルヤ知ルニ由ナキモ、庶民ハ常ニ此道路ヲ執リ而シ

テ貴族ハ通常ノ馬車道ヲ執ル。

皇居ニ達スルヤ兩院ハ玉座ノ隣室ニ會ス。陛下謁ヲ賜フノ準備成ルトキハ諸戸ヲ開キ兩院議長相竝ビテ進ミ、兩院議員各其後ニ從フ、大王ワウドチエムボレン殿官之ヲ導キテ玉座ノ前ニ到ル。貴族院議長上奏ヲ朗讀シ、跪キテ之ヲ陛下ニ奉ル、陛下勅答アリ、兩院御前ヲ退ク。

各院別ニ上奏ヲ奉呈スルトキハ其儀式凡テ右述ニ異ナラズ。只庶民院ノ場合ニ於テ上奏ヲ朗讀スルハ貴族院議長ニアラズシテ庶民院議長ナリ。……上奏ヲ奉呈スルニ際シ上奏ノ發議者ハ（貴族院ニ於テハ）議長ノ右ニ在リ、贊次者ハ其左ニ在リ、庶民院ニ於テハ發議者及贊次者共ニ議長ノ左ニ在リ、議長上奏ヲ朗讀シタルトキハ跪キテ之ヲ陛下ニ奉呈ス。

貴族院議員ニシテ陛下ニ謁見スルトキハ皆ナ朝服レキーズレスヲ着スルヲ例トス。然レドモ庶民院議員ノ多數ハ通常服ヲ着シテ議長ニ隨伴シ、玉座ニ咫尺スルノ特權アリト主張ス。

全院上奏ヲ奉呈シタルトキハ貴族院ニ於テハ大法官、庶民院ニ於テハ議長陛下ノ勅答ヲ報告ス。然レドモ貴族院議員又ハ樞密顧問官之ヲ奉呈シタルトキハ謁見ノ榮ヲ得タル議員之ヲ報告ス。就中貴族院ニ於テハ大主殿官（朝服ヲ着シテ出席シ）之ヲ報告シ、庶民院ニ於テハ宮内官、延前ニ到リ議長ノ指揮ヲ待チテ陛下ノ勅答ヲ朗讀スルヲ例トス。若シ宮内官制服ヲ着スルトキハ其勅答ヲ受理スルマデ議院ノ事務ヲ中止ス。

以上ハメイノ五百十三頁ヨリ五百十七頁迄ノ間ニ掲グル處ナリ。是ヨリ特ニ開院ノ勅語ノ奉答ニ關スルコトヲ譯出スベシ。

勅語ノ朗讀アリタルトキハ、兩院ニ於テ之ニ對スル奉答ノ動議アリ。政府ハ兩員ヲ選ミテ上奏ヲ發議シ及贊次セシム。此兩員ハ爲メニ朝服ヲ着シテ其席ニ就ク。上奏ハ即チ陛下ノ勅語每項ノ答義ナリ。此上奏案ノ各項ニ對シテ修正ノ動議ヲ爲シ得可キコト他ノ問題ニ於ケルガ如シ。而シテ上奏ノ問題（其修正セラレタルト否トヲ問ハズ）一致シタルトキハ、委員ヲ任命シテ上奏文ヲ立案セシム。委員上奏文ヲ報告シタルトキハ、議長ノ命令ニ依リ之ヲ提出シ、之ヲ略讀セシメ、議院ノ同意ヲ經テ更ニ詳讀セシム。書記ノ各項ヲ朗讀スルトキハ又ハ全文朗讀ノ後之ニ對シテ修正ノ動議ヲ發スルコトヲ得。然レドモ議長ヨリ此委員ノ案ニ同意スベキヤノ問ヲ發シタル後ハ一切修正ヲ發議スルコトヲ得ズ。上奏案全ク議了シタルトキハ之ヲ陛下ニ奉呈スベキコトヲ命ズ。女王自ラ勅語ヲ發セラレ、且市中ニ在ストキハ全院上奏ヲ奉呈ス。勅命委員勅諭ヲ朗讀シタルトキ、又ハ陛下市中ニ在サルトキハ上院ノ上奏ハ貴族白杖ヲ携ヘテ之ヲ奉呈シ、下院ノ上奏ハ樞密顧問官之ヲ奉呈ス。全院上奏ヲ奉呈セントスルトキハ上院ニ於テハ貴族白杖ヲ携ヘテ、下院ニ於テハ樞密顧問官ヲシテ恭シク上奏シテ何レノ時ニ全院ニ謁見ヲ賜フベキヤヲ告知セラレントコトヲ乞フ。此儀式ヲ舉行セントスルトキハ各院集會ス。陛下ノ謁見ヲ賜フノ

時告知セラル、トキハ別途ヨリ皇居ニ赴ク……若シ全院上奏ヲ奉呈スルニ先チ、陛下ノ全院ニ謁見ヲ賜フニ便ナラザル事件生ジタルコトヲ告知セラル、トキハ、貴族白杖ヲ携ヘ又ハ樞密顧問官上奏ヲ奉呈ス……女王ノ勅諭ニ對スル奉答案ノ討議終了セズシテ之ヲ他日ニ延期シタルトキハ、豫告アリタル議案ヲ提出スルコトヲ得。一千八百八十年、一千八百八十一年、一千八百八十二年、一千八百八十三年ニ於テモ上奏ノ討論延期セラレ、豫告アリタル議案提出セラシタルコト恰モ上奏ノコトノ議決シタル時ニ異ナラズ。

右ハ尙ホ盡サマル處アルベキモ御取急ギノ趣ニ付今日調査出來ノ分先ヅ差出置候。敬具

十一月十四日

林田龜太郎

井上法制局長官殿

先刻呈上仕候答案中最後ノ例ハ、メイノ國會慣例二百二十三頁及二百二十四頁ニ之レアリ候、其節盡サマル處ハ英國及其他ノ國々ニテ開院式ハ必ズ國儀式ナルヤノ尊問ニアリ。メイ國會慣例二百

二十頁ニ曰ク。

女王親ラ國會ニ臨ムトキハ、陛下ハ國儀式ヲ以テ貴族院ニ進ミ、^{クラウン}王冠及^{リガルオルケメント}王儀ヲ以テ修飾シタル玉座ニ即ク。^{オフトイス、オフトステート}國務官之ニ隨フ。公太子（大禮服ヲ着シテ）陛下ノ右傍ニ座ス（貴族ハ皆ナ大禮服ヲ着ス、而シテ陛下ノ命アルマデ起立ス）……

他國ノ例ハ小生ノ敢テ知ル處ニアラザルヲ以テ他ニ調査ヲ命ゼラレンコトヲ乞フ。

佛國下院ニ於テ「ポール、デルレー」ノ絶叫

千八百九十二年十二月二十三日佛國下院ノ議場ニ於テ、舊愛國同盟黨ノ首領タリシポール、デルレー絶叫シテ曰ク代議政府ハ撤去スベシト。

同年十二月二十五日發兌ノイタリ新聞紙ハ右ノ事實ヲ掲ゲテ代議政體ヲ論ズルコト左ノ如シ。デルレー氏ノ議場ニ於テ吐露セシ希望ト絶叫セシ状態ハ、獨リ奇異放逸ナル本人一個人ノ言行トスル能ハズ。右ハ佛國ハ勿論歐洲全土ノ衆望ヲ表彰スルモノト視テ可ナリ。獨逸ノ碩學グナイスト氏其英國代議政體ニ關スル著述中ニ、英國ニ於テスラ今猶其嘗テ政權ノ一君主ニ屬セシ舊時ヲ追慕スルコトアルヲ證明セシガ、實ニ現時ノ代議院ハ小黨派ニ分裂シ、復タ往時國民ノ自由ヲ保護スル機關ニアラザルナリ。之ヲ要スルニ代議院ハ政權ヲ攫取センガ爲メ、各黨代議士此ニ相集テ互ニ搏爭スル角力場トナリ、而シテ此演劇ヲ目撃スルノ公衆ハ其個人的ノ情態ヲ成育スル政體タルヲ感^ジ、之ニ對シテ漸ク嫌厭ノ情アリ。他ノ歐洲諸國ニ至テハ其弊最モ甚シ。故ニ目下到處同様ノ感發シ、

各國ノ言辭ニテデルレードノ絶叫セシ「ア、ババルラメンタリズム」ノ語ヲ復セザルハナシ。

現時ノ實情既ニ此ノ如シ。今之ヲ非難スルモ益ナシ。凡ソ輿論ノ過半ハ勿論、殊ニ深く自ラ信ズル民權者中ニ於テスラ、猶代議政體ヲ以テ危險ナルモノト識認スルニ至レリ。如何トナレバ此政體タル單ニ私利ヲ營ム或ル一部分ノ人ニ奸計ヲ運ラシ、自己立身ノ地位ヲ造クルノ用ニ供スル者タルバナリ。他ノ政體ニ在テハ是等ノ人々固ヨリ其意ヲ達スルヲ得ザルベシ。又獨ニ佛國ニ於ケルノミナラズ、歐洲全土ニ於ケル代議士ハ往時ト其性質ヲ異ニスル一種特別ナル人物ニ化シ、今ヤ代議士中眞ニ國家ノ公益ヲ謀リ、自己ノ時間ト才能ヲ國家ノ犠牲ニ供シテ顧ミザル者甚ダ稀レニシテ、多クハ代議士タル地位ヲ濫用シ、自己青雲ノ途ヲ拓カントスル大企望者ニシテ、其實自己ノ私欲ヲ滿スニ過ギズ。

總選舉ノ時ニ當リ、候補者ノ多數ハ其選舉者ニ向テ大ニ彼等ノ爲メニ盡ス所アルヲ約スルヲ以テ常トス。故ニ選舉者ノ所望ハ如何ニ滅法ノ無體ナルモ、候補者ハ之ヲ甘諾シ、自己當選ノ目的ヲ達センニハ術トシテ施サルハナシ。時トシテハ巨額ノ金ヲ使フコトアリ、此ノ如クニシテ國民ノ大半ニ於テ代議政體ナルモノハ國家ノ公益ヲ謀ル者ニアラズシテ、單ニ代議士ノ營利ヲ助クル者ナルコトヲ認ムルニ至ルモ驚クベキコトニ非ズ。

又大槩輓近ノ代議院ハ過敏ニ赴キ、激昂ノ傾向アリ。議場ノ狀人ヲシテ古代羅馬ニ於テ流血淋漓

観客ニ快ヲ與ヘタル比武者ノ格闘ト同ジキ思フ爲サシム。是或ハ好事家ノ爲メニハ一種ノ快樂ナラシム。又議院ノ遊觀ヲ以テ衆演劇ノ上ニ置ク者モアラン。然レドモ流汗額ヲ浸シ、糊口ニ汲々トシテ稼穡ニ辛苦スル平和ノ良民ヲシテ此演劇ヲ觀セシメバ、之ヲ何トカ謂ハン。彼等此演劇ニ對シテ租稅ヲ拂フ者トセバ、其到底國家ノ損失ニ歸スルノ制タルヲ覺ルハ難カラズ。故ニ若シ代議政治ヲシテ今日ノ儘ニ存在セシメバ、數年ヲ出デズシテ復タ專制政治ノ勝ヲ制スルヲ見ルニ至ラン。

政黨ハ君主國共和國ノ區別ニ因リ 其利害ヲ異ニスベキヤ否ヤヲ論ズ

米佛二國ハ共和政治ニシテ即民主政治ノ國ナリ。故ニ政治上ノ諸機關ハ人民ノ用ヲナスヲ以テ本意ト云ハザルベカラザルニ、官職ハ政黨之ヲ選ビ、其機關ハ政黨ノ用ヲ爲スニ至レリ。是名ハ民主政治ニシテ、其實ハ政黨政治トナレルナリ。而シテ國民ハ悉ク黨派ニ加リテ其以外ニ立ツモノナキヤト云フニ、然ラズ、是ヲ以テ見レバ黨派政治ノ國ニ於テハ黨派以外ノ人民ハ民主政治ノ實利ヲ受ルコト能ハザルノミナラズ、却テ黨派ノ弊害ヲ受ルモノナリト云フベシ。然レバ黨派政治ハ即黨派壓制ニシテ、多數ナル黨派ノ爲ニ小數ナル黨派ハ常ニ屈服セザルヲ得ズ。多數ナル黨派ノ希望ハ其實國民福ニ背キタルコトモ、其黨派ニ利アルハ常ニ實行シ、小數ナル黨派ノ希望ハ如何ニ善良ナルモ之ヲ實行スルコト能ハザルノ憾アリ。多數黨派ノ希望ニシテ常ニ善良ナルトキハ可ナレドモ、時アリテ小數黨派ノ意見ニシテ彼ニ優ルコトナシトセズ。然レバ黨派政治ハ民主國ニ於テモ一般人民ノ幸福自由ヲ保ツコト能ハザルハ明カナリ。況ンヤ君主國ニ於テヤ。英國ハ君民共治ノ政體ニシ

テ其名甚ダ美ナレドモ、其實ハ黨派政治ニシテ、上君主ノ實權ハ黨派ニ移リ、下人民ノ實利ハ黨派ノ左右スル所トナレリ。故ニ政府ノ樞機ヲ掌ルハ黨派ノ首領ニシテ、之ヲ使用スルハ君主ノ權ナルガ如クナレドモ、黨派ノ勢力ハ常ニ君主ヲシテ黨派ノ首領ヲ任用セシムルニ至ル。是君主ハ世襲ニシテ大統領ノ交代スルガ如クナラザルノミニシテ、其黨派政治ノ實ニ於テハ共和國ト異ナルコト無ク、君主ハ唯其名ト其位トヲ保チテ、其王位ニ附着シタル實權ハ黨派ノ手裡ニ歸シタルナリ。幸ニ英國ハ臣民ノ尊敬ノ心厚クシテ、王位ヲ奉載スレドモ、實權下ニ移リタル以上ハ名義上ノ君主國ニシテ、共和國ト五十歩百歩ノ差アルノミ。我國中古以來政權下ニ移リタルコトナレドモ、國家ノ大事ニ於テハ幕府モ恣ニスルコト能ハズ、必ズヤ上奏ノ後施行スルコトナリキ。元寇來侵ノ時北條時宗ハ上奏ノ後之ヲ處分シ、又貞永式目ヲ施サントスルニ當リテハ奏問ヲ經タル等、其他武門ノ官名ハ私ニ唱ヘタレドモ、位階ニ於テハ一人ノ私用セシコトナク、大江元就ノ如キハ敵ト戰フニ當リテハ勅許ヲ得タル後ニ於テセリ。是ハ朝威ヲ借テ戰ハザル以前ニ人心ヲ屈服セシメントスル政畧ニ出タルヤハ知ラザレドモ、名分ヲ正シクスルニ非ザレバ國ノ秩序安寧ヲ保持スルコト能ハザルノミナラズ、他ノ尊敬ヲ受ケントスレバ、己先ツ朝廷ヲ尊奉セザレバ國人ノ許サハルニ因ル所ナリ。然レバ政權ノ下ニ移リタルハ國體ノ許サハル所ナルヲ以テ、勤王ノ士四方ニ起リテ政權ノ恢復ヲ唱道シ、遂ニ德川氏政權ヲ返上スルニ至リ、維新ノ盛業ヲナセリ。是ニ於テ政權ハ朝廷ニ歸ヘシ、

之ヲ分任スルモノナキニ至レリ。而シテ客年憲法ヲ發布シ、臣民ニ許スニ參政權ヲ以テセラル。然ルニ政黨ノ組織ヲナスモノ二三ニ止マラズ。其軋轢スルノ弊モ亦漸ク大ナラントス。此ノ軋轢ヲシテ益甚シカラシメンカ、何ヲ以テ國家ノ秩序安寧ヲ保持スルヲ得シ。幸ニ各黨戒慎シテ和衷協同セシカ、軋轢ニ因テ受ル弊害ハ除去スルコトヲ得ベシ。然レドモ黨派政治ノ君權ヲ傷ル國體ヲ害スル點ニ於テハ、黨派アル以上ハ除去スルコト能ハザルベシ。何トナレバ各黨ノ主トスル所ハ政黨内閣ヲ作ルニアレバナリ。内閣ニシテ政黨ノ左右スル處トナリテ、英國ノ實況ヲ我國ニ見ルニ至ルベシ。英國ノ王家ハ貴族又ハ人民ノ爲ニ迫マラレテ政治權下ニ移リタルニ拘ラズ、王家ヲ以テ國ノ安寧秩序ヲ保ツニ必要ナリトシテ其形ヲ存スルニ止マルト云テ可ナラン。然ルニ我國ハ皇族ト共ニ成立シ、皇統ハ此國ト共ニ始終スル國ナルガ故ニ、皇祖勅シテ我子ノ代々治ムベキ國ナリト宣ハセ玉ヒ、統治權ハ皇家ニ歸スベキコト勿論ニシテ、憲法ニ於テモ臣民ハ統治權ニ協贊スルヲ許サレタルモノナレバ、皇家ハ政治上ノ本源ニシテ即主ナリ、臣民ハ政治上ノ末流ニシテ即客ナリ、本末主客ノ分正シクスルハ徒ニ名義上ノコトニ非ズ。其實權全カラザレバ何ヲ以テ國ノ安寧秩序ヲ保持スルヲ得シ。皇家ノ政黨ニ關係シタマフベカラザルハ言ヲ俟タザレドモ、政治上ノコトハ黨派ノ勝敗ニ放任シテ交代管掌セシメ、僅ニ統治ノ名ヲ存スルガ如キハ皇祖ノ勅ニ悖リ、國體ノ許サハル處ナリ。然レバ我國ニ於テ黨派政治ノ行ハル、ニ至ルトキハ、萬世一系タルコト變動ナク、皇家ヲ尊奉スル人心

モ亦變更セザルモ、政權ノ皇家ヲ離ル、ノ事實ハ維新前ト何ノ異ナル所カアラン。故ニ臣民ニ參政權ヲ與ヘラレタルヨリ、歐洲立憲國ノ實例ヲ引キテ吾國ニ於テモ如此クナラザルベカラズトシ、以テ黨派政治ヲ行フニアラザレバ、立憲政體ヲ立ル効用ナシト誤ルコトアラバ、憲法ヲ發布シ國會ヲ開設スルハ政權ヲ朝廷ニ恢復シタル維新ノ盛業ヲ破ルモノニシテ、憲法發布ハ皇家ノ實權再ビ下ニ移ルノ端緒ヲナスモノト云ハザルベカラザルナリ。誠ニ慨歎ニ堪ヘザルナリ。昔者政權ノ武家ニ移リタリシコトハ識者之ヲ非難シ、而シテ向來黨派ノ政權ヲ弄セントスルヲ憂ヘザルノミナラズ、却テ之ヲ立憲政治ノ効用ヲナスモノト云フハ實ニ怪訝ノコトナリ。一種族ノ政權ヲ掌ルモ、黨派ノ政治ヲナスモ、其政權ノ皇家ヲ離レテ下ニ移ルハ一ナリ。豈深ク思ハザルベケンヤ。論者或ハ云ハン、皇家ノ永昌ヲ計ルニハ、君權ヲシテ直接ニ政治上ニ關係ヲ有セシム可ラズ、君主ヲシテ直接ニ政治上ノ衝ニ當ラシムルハ、恐クハ國民ノ尊敬心ヲ減殺スルノ發端トナラント、眞ニ然リ。然レドモ皇家上ニ嚴然ト屹立シ、以テ國ノ安寧秩序ヲ保ツハ臣民ノ侵スベカラザル名實ノ全キモノアリテ然ルベケレバ、若シ實權鞏固ナラザルトキハ、皇家ハ薄弱ナル地位ニ立タセタマフモノニシテ、尊嚴ヲ保持スルノ基固カラザルナリ。佛國人ノ言ニ、王ハ民ノ欲スル所ヲ行フト云ヘリ。此言ノ如クナレバ、民ノ欲スル處ハ何事モナシ得ラレザルコトナシトスルナリ。豈然ル理アラシヤ。佛國ノ遂ニ王政ヲ廢シテ共和政治ニナシタルハ、如此誤謬ヲ唱フルモノアルニ因ル所ナラン。果シテ然ラバ皇家ハ國

ノ安寧秩序ヲ保ツニ必要ナルガ故ニ、永久ヲ計ラザル可ラズトノ論モ亦甚危險ナル意味ヲ含ムモノニシテ、皇家ニシテ安寧秩序ヲ保ツニ必要ナル効用ヲ缺クトキハ、之ヲ無用視スルモ不可ナシト云ハンカ、決シテ然ルベカラザルナリ。皇家ノ永昌ヲ計リ、君權ノ鞏固ヲ希フモノハ、安寧秩序ヲ保ツニ必要ナル効用アルガ爲ノミニアラズ、國ノ因テ立ツ基礎ナルニ在リ是皇家ノ國家ニ於ケルハ歐洲君主國ノ君主ト國家トノ關係ト同視スベカラザル所ナリ。故ニ我國ノ成立シタル基礎ナルモノハ、皇家ニシテ皇家ノ盛衰ハ即家ノ盛衰ト相伴ヒテ離レザルコト古今歴史ノ證明スル所ナリ。是ヲ以テ吾國ニ於テハ黨派政治ノ國家ニ害アルコト他國ノ類ニアラズ、若シ向來黨派政治ノ行ハル、コトアラバ立憲政治ハ臣民ノ自由ヲ許シタルニアラズシテ、黨派壓制ノ端緒ヲナシタリト云フベク、又臣民ニ參政權ヲ與ヘタルハ、君權ヲ侵スノ利器ヲ與ヘタリト云ハザルヲ得ザルナリ。苟モ着實忠貞ノ士ハ、深ク慮リテ黨派ノ盛ナラザルニ際シ國害ヲ惹起セザル豫防ノ策ヲ講ジ鞠躬盡力其實功ヲ奏セザルベカラズ。以上論ズル如ク黨派ノ君主國ニ害ヲナスハ共和國ニ於ケルト同日ノ論ニアラズ。況ンヤ萬世一系政權ノ歸一スル所鞏固ニシテ臣民ノ干涉スベカラザル我國體ニ於テヤ。

首相ビスマルク伯演說參照提出書類

(第一號)

一千八百七十年七月十六日聯邦參議院議事筆記中議長演述

歐洲ノ平和ノ夢ヲ破リ、一大戰爭ヲ惹起スニ至リタル今回ノ事件タル、其ノ由來悉ク人ノ知ル所ナルヲ以テ、今日ノ形勢ノ由テ生ゼシ所以ヲ陳述スルハ顯著ナル事實ヲ轉合スルニ外ナラズ。

吾人ハ去月十一日西班牙國內閣總理大臣ガ立法議會ニ於テ爲セル報告、本月七日西班牙國外務大臣ガ公ニセシ回狀、及ビ「サラザル、マザレド」君ガ本月八日「マドリツト」ニ於テ印刷セシ説明書ニ依リ、西班牙國政府ハ一ヶ月以前ヨリ皇子「レオボルト」殿下ニ西國王位繼承ノ事ヲ議リシコト、及ビ「サラザル」君ニ委任セラレタル此ノ談判ハ何國ヲモ參加スルコトナク、又何國ノ立會ヲモ經ズシテ殿下及ビ殿下ノ父君ト直接ニ遂ゲラレタルコト、及ビ殿下ハ遂ニ王位ヲ繼承スルコトヲ諾セラレタルコトヲ知レリ。普國々王陛下ハ此ノ事ニ付キ通知ヲ受ケラレタリ。然レドモ成年ノ侯ガ充分ノ思慮ト父君トノ一致トヲ以テ決意セラレタル決心ニ反對セザル可カラザルコトハ陛下ノ期

セラレザル所ナリキ。

北獨逸聯邦ノ外務省竝ニ普國政府ハ全ク此事件ヲ知ラズ。其ノ之ヲ知リタルハ本月三日夕巴里發ノ「ハワス」ノ電報ニテ、西國內閣ハ皇子ニ王位ヲ捧呈セルコトヲ知レルノ時ニアリ。

本月四日佛國大使ハ外務省ニ來タレリ。而シテ本國政府ノ委任ニ依リ、皇子ガ王位ヲ繼承セルコトヲ執知セシ「マルシャル、ブライム」氏ノ報知ハ巴里ニ於テ不滿ノ感情ヲ惹キ起セルコトヲ告ゲ、且ツ問フニ普國政府ハ此事ニ關セルヤ否ヤヲ以テス。我が大臣ハ之ニ對シ、該事件ハ毫モ普國ニ關係アルナキヲ答ヘ、且ツ普國ハ西國內閣ガ皇子ト談判セシ等ノ事ニ付キ説明スルノ地位ニ在ラザル旨ヲ答タリ。

此ノ日巴里駐節聯邦大使ヘ右ト同一ノ事項ニ付キ「グラモン」公ト談判セリ。此ノ際「オリヒール」大臣モ列席セリ。佛國大臣ハ等シク不滿ノ感情ヲ惹キ起セル旨ヲ述ベテ曰ク、普國ハ此ノ談判ニ加ハラザリシヤ否ヤヲ疑フナリ。且ツ輿論ハ該談判ニ關スル祕密ニ依リ、西國ノ友誼ニ背ケルヲ認ムルノミナラズ、普國モ友誼ニ背ケルヲ認ムベシ。而シテ此ノ事件タル若シ實際ニ行ハル、モノナランニハ、到頭平和ノ持續ヲ破ルニ至ル可シ。切ニ望ム貴國々王陛下ノ聰明ナル、必ズ此ノ如キ合盟ニ賛成セラレザランコトヲト、而シテ佛國大臣ハ我が大使ガ「エムス」ニ於テ我國王陛下ニ拜謁スルノ許可ヲ得テ佛京ヲ去ルヲ以テ好機會トナシ、巴里ニ於ケル感情ヲ陛下ニ奏上センコトヲ請

求シ、之ニ對スル報告ハ電報ヲ以テ通知センコトヲ依頼セリ。

我が大使ハ此ノ申出ニ對シ、大使ハ此事件ニ付キ何等ノ事ヲモ知ラザル旨ヲ答へ、其ノ陛下ニ奏上ス可キ請求ヲ諾シタリ。大使ハ速カニ奏上シテ返信センガ爲メ五日佛京ヲ出發シテ歸國ノ途ニ上レリ。

此ノ日「コシエリー」君ハ議會ニ於テ西班牙問題ニ付キ質問書ヲ呈出セリ。然ルニ其ノ翌日我が大使ノ返信ノ到着スルヲ得ザル以前ニ於テ「グラモン」公ハ之レガ答辯ヲ爲セリ。其ノ答辯ヲ見ルニ假シ西班牙ニ於ケル談判ノ細目ヲ知ラザリシガ爲メトハ云へ、其要領ハ佛國政府ハ隣國ノ權利ヲ重ンズルニ急ナルモ、之レガ爲メ一外國ガ其ノ皇子ノ一人ヲシテ「カール」第五世ノ位ヲ繼ガシメ、以テ佛國ノ不利ヲ顧ミズシテ歐洲ニ於ケル權力平均ヲ妨害シ、佛國ノ利益及ビ榮譽ヲ損ズルヲ許スノ義務アリト信ズルヲ得ズト云フニアリ。

此ノ如キ説明アリシ後ニ於テハ、我大使ハ巴里ニ返信スルノ地位ニ在ルコトナシ。本月九日巴里駐箭ノ大使代理者ハ、本月四日當府ニ於テ佛國大使ニ與ヘタル返答ノ委曲ヲ知レリ。即チ西國王位繼承ノ事タル、毫毛獨逸及ビ普國ニ關セズ、關スル所ハ唯兩國ト其王位繼承者アルノミ。其ノ談判ハ普國會テ之ニ與カラズ、總督「ブライム」直接ニ遂ゲタリ。普國々王ハ西班牙國及ビ皇子ノ意思ヲ尊敬シ、此談判ニ容喙スルヲ欲セズ、又實ニ容喙セザリキ。故ニ此ノ事項ヲ獎勵セシコトナシト

云フニアリ。

之ヨリ先キ佛國政府ハ獨乙駐箭ノ大使ニ對シ「エムス」ニ赴クベキコトヲ命ゼリ。陛下ハ溫泉場ニ御滯在中ト謂ヒ、且ツハ各大臣同處ニ在ラザルヲ以テ、陛下ニ對スル公務上ノ談話ハ拒絶セラル、ノ至當ナル觀アリシモ、七月九日陛下ハ「ベネデッチ」伯ニ拜謁ヲ賜ハリタリ。大使ノ言上スル所ハ「グラモン」公ガ「ウエルテル」大使ニ申出シコトニ等シ。即チ皇子ニ對シ王位ヲ繼承スルコトヲ禁ジ、之ニ依リテ歐洲ノ平和ヲ維持セラレンコトヲ陛下ノ聰明ニ訴ヘタリ。之ニ對スル陛下答ハ歐洲ニ於ケル不穩ノ形勢ハ普國ノ行動ニ基因スルニアラズシテ、佛國政府ガ議會ニ於テ爲シタル答辯ニ因ル、陛下ガ家族ノ首長トシテ此ノ問題ニ關係アルノ地位ハ國務以外ノモノタリ。而シテ「ホーヘンツォルレルン」侯及ビ其皇子ニ干涉スルハ其ノ正當ナル自由意思ヲ害スルモノナルヲ以テ一切之レヲ避ケタリト云フニ在リ。

然ルニ本月十二日太子ハ自由意思ノ行動ニ基キ、其ノ今日ノ形勢ヲ致セル所以ハ、自己ガ王位ヲ保持スルニ因ルト思惟シ、責任ヲ重ンジ王位ヲ辭シ西國人民ニ發議ノ自由ヲ返與セラレタリ。

普國政府ハ此ノ事ニ關シ巴里ヨリ第一着ノ報知ヲ得タリ。即チ佛國駐箭ノ西國公使ハ公ケノ電報ヲ「グラモン」公ニ示セリ。是レ恰モウエルテル大使ガ「グラモン」公ニ面接中ナリキ。

大使ハ本月十一日エムスヲ發シ、十二日巴里ニ着セリ。此ノ日「グラモン」公ハ大使ト對話中、

佛國ハ飽クマデ王位繼承ノ事ヲ承認セザルヲ以テ、皇子ガ王位ヲ辭セシ事件ハ唯一些事ニ過ギザル旨ヲ云ヘリ。而シテ普國々王陛下ハ豫メ佛國ニ照會スルコトヲ爲サズシテ皇子ニ王位繼承ヲ許可セルガ如ク云ヒ做シ、之ヲ以テ佛國ノ權利ヲ侵害セルモノト爲セリ。又此ノ權利侵害ヲ償フ方法トシテ陛下ヨリ佛國皇帝ニ一書ヲ送クラルベキコト、及ビ其ノ書面ハ陛下ハ曩キニ王位繼承ノ允許ヲ與フルニ當リ、之ニ因リテ佛國ノ利益ト威嚴トヲ冒サントハ信ゼザリシ旨、及ビ皇子ノ位ヲ去ルニ同意スル旨ヲ認ム可キコトヲ申出デタリ。

此ノ日「ベネデツチ」伯ハ「エムス」ニ於テ陛下ニ拜謁シ、陛下ニ對シ皇子ノ王位ヲ去ルコトヲ承認シ、且ツ將來再タビ皇子ヲ以テ西國王位ヲ繼承セシムルヲ爲サル確保ヲ請求セリ。伯ハ之ヨリ後陛下ニ拜謁ヲ許サレズ、「グラモン」公ハ我大使ニ對シテハ上述ノ請求ノ外尙佛帝ニ對スル陛下ノ謝狀ヲ添フ可キ旨ヲ請求セリ。

上述ノ事實ノ陳述ニ付キ尙一言注意ノ附ス可キモノアリ。豫メ陛下ガ西國ト皇子トノ間ニ開カレタル談判ニ關シテ、職務外ニ之ヲ知ラレシトキ、事ヲ祕スルノ條件ヲ以テ知ラレタリ。而シテ陛下ハ普國ニモ聯邦ニモ關係ナキ他國ノ祕密ニ付キ祕密ヲ守ルコトヲ謝絶スルノ理由ナキヲ以テ、陛下ノ政府ニ對シテハ一家事ニ過ギザル此ノ事件ヲ告ゲラレザリキ。又此ノ談判ニ付キ他國政府ニ照會セザルベカラガルコトアリトセバ、夫ハ西國及ビ其ノ國王位繼承者ノ爲ス所ナルベキヲ信ゼラレタ

リ。西班牙國ト隣邦佛國トノ關係及ビホーヘンツオルレル一家ト佛國皇帝陛下トノ間ニ從來存スル簡人的關係ハ、此事件ニ關シ事件ノ當事者ヨリ佛國ニ對シテ直接ノ照會ヲ爲スノ便宜ヲ得セシムルモノナリキ。

余ハ佛國ガ西班牙問題ニ利害ヲ有スルハ單ニオルレアン家黨及ビ共和黨ノ發生ヲ恐ル、ニ止マルベキニ、尙佛國政府ハホーヘンツオルレル家ノ太子ガ王位ヲ繼承スルヲ以テ佛國ニ禍害ヲ及ボスモノナリト主張スルハ何ノ謂レナルヤヲ知ルニ苦ムナリ。佛國政府ノ希望ハ皇子ヲシテ王位ヲ去ラシムルガ爲メ、普國ニ好意ノ周旋ヲ委任スルニアリトセバ、佛國政府ハ普國政府ヲ信ゼル照會ヲ以テ之ヲ爲スノ適當ナル方法ヲ探ルベキニ、グラモン公ガ佛國ノ議會ニ於テ爲シタル演述ノ趣旨ハ正ニ之ニ反シ、此ノ如キ方法ヲ探ルノ希望ヲ滅了セリ。議會ニ於ケル此ノ演説ノ稱揚及ビ爾來佛國政府ノ採リシ處置、及ビ我國ニ對スル不法ノ請求ニ徵スルニ、佛國ハ吾人ニ屈辱若クハ戰爭ノ一ヲ選バシメンガ爲メ、豫メ謀リタルモノナルコト毫モ疑ヲ容レズ。屈辱ヲ忍ブハ到底不能ノ事タリ。獨逸國ト佛國トガ歐洲ノ中心ニ於テ相戰フニ因リテ生ズベキ災害ハ、佛國ガ我國ニ對シテ爲セル開戰ノ強制ハ即チ人類ノ利益ニ對スル重大ノ侮辱ナルコトヲ明カニス。我國ノ輿論ハ能ク之ヲ知レリ。獨逸國民思想ノ激昂ハ實ニ之レガ證據タルモノナリ。今ノ時ニ於テ取ルベキノ途ハ戰爭若シクハ佛國ヲシテ歐洲ノ平和安寧ヲ危クスルノ行動ヲ再タビセザルヲ盟ハシムルノ二者其ノ一ヲ撰ムアルノ

アリーゼン演述

他聯邦諸政府ニ一致ヲ表スル撒尼王國ノ名ニ於テ、余ハ茲ニ聯邦首相ノ從來ノ處置及ビ普國政府ヨリ報告セラレタル時勢ノ觀察ニ賛成ヲ表ス。佛國ハ戰鬪ヲ望メリ。願ハクハ迅速ニ有力ニ戰ハ

他政府ノ全權委員悉ク之ニ賛成ス。

(第一號)

「ベネデツチ」伯ハ本月九日「エムス」ニ於テ陛下ニ拜謁ヲ奏請シ、直チニ許可ヲ得タリ。此ノ際伯ハ陛下ニ於テ皇子ニ向ヒ西班牙國王位繼承ノ承諾ヲ取消ス可キコトヲ命ゼラレンコトヲ請ヘリ。陛下ハ之ニ對シ此ノ事件ニ付キテハ徹頭徹尾家族ノ首長トシテ事ニ與カリシノミニテ、普國國王トシテ關係セシニアラズ。從テ受諾ス可キ命ヲ發シタルコトナキヲ以テ、之レガ取消ノ命ヲ發スルヲ得ズトノ御下答アリ。十一日伯ハ再度ノ拜謁ヲ請ヒ、皇子ニ王位ヲ去ル可キヲ命ゼラレンコトヲ強請セリ。陛下ハ皇子ハ其ノ決意ニ關シ全ク自由不羈ナルベキノ旨ヲ下答セラレ、且ツ皇子ハアルプス旅行ノ計畫ヲ爲セル故、現時皇子ノ何處ニ在ルヤヲモ知ラズト下答セラレタリ。十三日午前陛下

御散歩ノ際、陛下ハ大使ニ皇子ガ王位ヲ拋棄セラレタルコトニ付キ「シグマリンドン」ヨリ發セシ一私報ヲ載セタルケルン新聞ノ號外ヲ示サレ、且ツ朕ハ未ダ此ノ如キ報知ニ接セズト雖モ、本日中午ハ恐ラク之ヲ得ルナラント仰セラレタリ。「ベネデツチ」伯ハ昨夜既ニ巴里ヨリ此ノ報知ヲ得タリト言ヘリ。陛下ハ之ヲ以テ事件ノ落着セルモノト見做サレタルニ、豈ニ計ランヤ伯ハ陛下ニ對シ、皇子ガ再タビ王位ヲ繼承セントスルニ當リテハ斷ジテ是ガ許可ヲ與ヘズトノ確保ヲ得ンコトヲ請求セリ。陛下ハ斷然此ノ如キ無禮ヲ斥ケ、伯ハ再三之ヲ反覆スルモ固ク執テ動カレズ、二三時ノ後伯ハ第三回ノ拜謁ヲ請ヘリ。陛下ハ其ノ用談ノ何タルヲ下問セシメラレ、伯ハ之ニ對シ本朝言上セシ事項ヲ尙一回言上セント答ヘシヲ以テ、陛下ハ曩キニ御下答アリシ旨ノ他更ニ言フ可キノ語ナキヲ以テ拜謁ヲ許サレズ。且ツ爾後ハ大臣ト談判スベキ旨ヲ傳ヘシメラレタリ。伯ガ「エムス」ヲ去ルニ當リ御暇乞ヲ申上ゲ度キ旨ノ奏請ハ十四日「コブレンツ」行ノ列車ノ經過スルニ當リ、停車場ニ於テ許可セラレタリ。即チ大使ハ前後三回ノ拜謁ヲ得タルナリ。伯ハ常ニ全權委員若シクハ談判委員トシテ拜謁セシニアラザルヲ以テ、何レモ等シク一私話タルニ過ギザルナリ。

(第三號)

七月十三日陛下ガ御散歩ノ際「ベネデツチ」伯ト對話セラレシ結果トシテ余ハ同日午後二時勅命ヲ帶ビテ伯ノ許ニ赴ケリ。

余ハ我陛下ハ一時間前「シグマリンドン」ノ「ホーヘンツォルレルン」侯ヨリ書狀ヲ得ラレ、今朝伯ガ陛下ニ對シ「レオボルト」皇子ハ西國ノ王位ヲ辭セルコトヲ巴里ヨリ直接ニ報知アリタリト奏セラレシ報告ヲ認了セラレタリ。陛下ハ之ヲ以テ此ノ事件ノ落着セルモノト見做サル、旨ヲ述べタリ。

「ベネデツチ」伯ハ之ニ對シ曰ハク、余ハ陛下ト對話セル後「グラモン」公ヨリ一新訓令ヲ得タリ。此ノ訓令ハ余ニ陛下ニ拜謁シテ左ノ佛國政府ノ請求ヲ言上ス可キコトヲ委任セリ。

(一) 「ホーヘンツォルレルン」皇子ガ王位ヲ辭セルコトヲ承認スルコト、

(二) 將來ニ於テ此ノ皇子ノ王位繼承ヲ容サハルコトヲ保證スベキコト、

陛下ハ之ニ對シ余ニ命ジテ答ヘシメラル、曰ク皇子辭任ノ承認ハ豫メ王位繼承ノ時爲シタル承認ト同一ノ意義、同一ノ範圍ニ於テハ之ヲ與フルコトヲ肯ズ可シ。第二ノ點ニ關シテハ今朝伯ニ對シテ爲シタル答アルノミ。

伯ハ此ノ答ヲ得タルヲ謝シ、本國政府ニ之ニ由リテ返答スベキ旨ヲ述べタリ。

然レドモ伯ハ第二ノ點ニ關シテハ最後ノ訓令ニ於テ明示ノ命令ヲ受ケタルヲ以テ、假令同一ノ語

ヲ再タビ陛下ヨリ聽クニ止マルモ尙一回陛下ト對話セント欲スル旨ヲ述べタリ。

之ニ對シ第三回午後六時三十分、余ハ命ヲ奉ジ伯ニ對シ、陛下ハ第二ノ點ニ關シテハ爾後對談スルヲ拒絕セラル。本朝伯ニ對シ爲セル答ハ此ノ事件ニ付キ最終ノ勅語タル旨ヲ述べタリ。

伯ハ余ガ伯ノ問ヒニ對シ「ビスマルク」伯ハ明日中ニ來着セラルルコトハ保證シ得ズトノ答ヲ聞キ、三后陛下ニ對スル談判ヲ止ムベキ旨ヲ述べタリ。

一千八百七十年七月十三日「エムス」ニ於テ

持從武官 ラチエイル

(第四號)

一千八百七十年七月十二日巴里ニ於テ、

本日午前十時「ベネデツチ」伯ノ急使着スルヤ、直チニ「グラモン」公ハ余ニ本日來車ヲ請フノ旨ヲ述べ、余ハ差支ナキ旨ヲ返答セリ。友誼アル歡待例ノ如クナリキ。

余ハ以下ニ於テ談判ノ始末ヲ報ズルニ先チ注意セントスルコトアリ。他ナシ此談判中西國大使公務上ノ報告ヲ齎タラセリ。此ノ報告ハ皇子ガ即位ニ因リテ葛藤ヲ來タヌヲ見テ、王位ヲ辭スル旨ヲ「ブライム」總督ニ通知セルコトヲ報告セシホーヘンツォルンノアント太子ノ電報ナリ。

「グラモン」公ガ述ベタル要領ハ、陛下ガ佛國政府ニ照會セズシテオーヘンツォルレルン皇子ニ即位ヲ允許セルハ佛國ノ權利ヲ侵害セルモノナリト云フニ在リ。

公ガ余ニ事實眞ニ此ノ如キカト問ヒシニ對シ、余ハ陛下ハ皇子ガ王位ニ即クヲ至當ナリト感ゼラレシ後ニ於テ、形式上之レガ允許ヲ拒ムハ能ヒ賜ハザリシナルベク、又陛下ハ皇子ト佛皇帝ノ關係ヨリ見ルモ、此ノ即位ガ佛國ニ於テ反對ヲ見ントハ信ジ賜ハザリシナラント答ヘタリ。

「グラモン」公ハネモール公ガ白耳義ノ王位ニ即クニ當リ、及ビ「カルブレット」太子ガ希臘ノ王位ニ即クニ當リ、允許ノ拒絕アリシコトヲ引用セリ。余ハ此彼ノ場合同一ナラザル旨ヲ辯ゼリ。公曰ク佛國ハ西國ノ最近隣國トシテ西國ノ即位ニ密着ノ利害ヲ有セルコト明カナルニアラズヤ。此回ノ談判ニ存スル祕密ハ實ニ此ノ利害ヲ無視シタルモノナリ。況ンヤ佛國ハ常ニ一切ノ政治上ノ問題ニ關シ、普國政府ヲ念頭ニ存スルノ實アルニ於テオヤ。此回ノ事件ハ全國ニ感動ヲ興シ、議會ニ於ケル一致ハ此問題ヲシテ益々重大ナラシメタリ。

公尙ホ曰ク、余ハ皇子ノ辭位ヲ以テ一些事ト見做スモノナリ。我政府ハ曾テ其即位ヲ承諾セシ事ナケレバナリ。余ハ將ニ生セントスル衝突ヲ末發ニ防グノ經路ハ貴國王陛下ガ我皇帝ニ對シ佛國ノ權利ヲ侵害セルヲ謝ス旨、及ビ兩國間ノ衝突ヲ避クルノ希望ヲ以テ太子ノ王位ヲ辭スルニ同意セル旨ノ書狀ヲ寄セラルルニ在ルヲ信ズ。余ハ之ヲ得テ激昂セル民心ヲ鎮靜セン。

余ハ之ニ對シ斯ノ如ク事件ヲ進捗セシメタルハ一閣下ガ議院ニ於ケル演述ニ基クコトヲ述ベタリ。公ハ議院ヲ鎮靜スルニ缺ク可カラザリシ旨ヲ答ヘタリ。

此ノ時司法大臣オリヒール君來ル。

兩大臣ハ謝狀ノ事ヲ陛下ニ言上セラレタシト述ベタリ。且ツ電報ニ據リテ之ヲ處理セラレタシト申込マレタルモ余ハ電報ニ托スルノ要ヲ見ズ。

ウ エ ル テ ル 拜

(第五號)

電信

一千八百七十年七月十五日伯林ニ於テ

ホーヘンツォルレルン皇子位ヲ辭スルノ報既ニ西國政府ヨリ佛國政府ニ公報アリシ後、佛國大使ハ「エムス」ニ於テ國王陛下ニ請求シテ曰ク、皇子爾後西國王位ヲ繼ガントスルモ陛下ハ將來之レニ同意ヲ與ヘザルベキヲ約セラルベキ旨ヲ巴里ニ電報スルヲ得ント、陛下ハ之ニ對シ再タビ佛國大使ヲ見ザル旨ヲ答ヘラレ、侍從士官ヲシテ陛下ハ大使ニ何等ノ言フ可キコトナシトノ旨ヲ傳シメラレタリ。

(第六號)

一千八百七十年七月十八日伯林。

佛國ハ皇子任意ノ辭位ヲ以テ足レリトスルモノニアラズ。普國ト談判セズンバ已マズトハ二日前佛國外務大臣ノ口頭ニ出デ、全歐洲ノ知ル所ナリ。以來佛國ノ目的ノ那邊ニ存スルヤハ誰人モ之ヲ疑フモノナシ。此ノ目的ハ本月十五日元老院及ビ議會ニ於ケル大臣ノ出席及ビ同日職務上ノ説明トシテ堂々トシテ述ベタル事實ノ構造ニ依リテ、愈々其ノ真相ヲ露ハセリ。他歐洲諸國ガ此ノ豫知ス可カラザル變狀ニ處スルノ途ヲ講ジ、其ノ佛國ノ請求スル談判トハ何等ノ事項ヲ議スル爲メナルヤヲ知ルニ苦ムモ、談判開カル、ニ當リテハ兩國ニ對シテ仲裁ノ勞ヲ探ラントシテ苦慮スルニ際シ、佛國政府ハ公然タル説明ヲ爲シ、以テ本月六日我國ニ對シテ爲シタル脅迫ノ外、更ラニ尙侮辱ヲ加ヘ、事體ヲシテ如何ナル讓歩モ甲斐ナカラシメ、且ツ他友邦國ヲシテ手ヲ拱スルノ已ムナキニ至ラシメ以テ破裂ヲ免レザルニ進捗セリ。

余ハ那翁皇帝ハ前後ヲ顧ミズ吾人ヲシテ應戰スルカ、然カラザレバ凡ソ國民ノ名譽心上忍ブ能ハザル屈辱ヲ受クルカノ二者其一ヲ選ブノ外ナキノ地位ニ陥ラシムルニ決心セルコトハ、一週日以前ヨリ疑ヲ容ザル所ナリキ。若シ事ノ疑フベキモノアリトセンカ、獨逸大使カ「エムス」ヨリ任處ニ歸着セル後、「グラモン」公及ビ「オリヒール」ト開キ談判ノ報告コソ實ニ怪訝ニ堪ヘザルモノト云フベシ。其ノ報告ニ據レバ「グラモン」公ハ皇子ノ辭位ヲ以テ一些事ニ過ギズトナシ、又此ノ二大臣ハ那翁皇帝ニ對スル我陛下ノ謝狀ヲ得、之ヲ公示シテ以テ佛國ニ於ケル激昂セル人心ヲ鎮靜セント請求セリ。此ノ報告ノ謄本ハ副ヘテ之ニ在リ、一ノ註釋ヲ要スベキナシ。佛國官報ノ傲慢ナル、既ニ戰勝ヲ豫想セリ。然ルニ佛國ハ尙開戰ニ至ラザランヲ憂慮シ、本月十五日國務上ノ説明ニ依リ、以テ事件ヲシテ到頭仲裁ノ餘地ヲ存スル能ハザルノ難局ニ進マシメ、吾人及ビ天下ヲシテ國民ノ名譽心ノ忍ビ得ベキ畛域ニ於テ讓歩ニ依リテ平和ヲ維持スルヲ得ザルコトヲ證セシメタリ。吾人ハ平和ヲ希圖スルニ於テ常ニ正當ナリシコト、及ビ數日前ニ於テハ毫モ戰爭ヲ期セザリシコトハ何人モ疑ヲ容レザル所ニシテ、又容ル、ヲ得ザル所ナリ。佛國政府ハ開戰ノ口實ヲ有セズ、又其ノ捏造セラル口實モ忽チ消滅ニ歸シ、戰爭ノ原因一モ存セザルヲ以テ、平和ヲ希フ自國民ニ辯解センガ爲メ、其ノ虛妄ナルコト書類ニ徵シテ明瞭ナルニ拘ハラズ、事實ヲ隱弊シ若シクハ之ヲ捏造シ、兩代議院ヲ欺キ、又之ニ依リテ國民ヲ欺キ普國ノ爲メニ汚辱ヲ蒙リタリトナシ、辛ジテ國民ノ感情ヲ戰爭ニ煽動スルヲ得タリ。

此ノ虛妄ナル事實ニ逐一辯ズルハ實ニ煩ニ堪ヘザル處ナリ。幸ニ佛國大臣ハ議會ノ一部ガ要求セル公文及ビ訓令ノ閱覽ヲ拒ミタルニ依リ、其ノ文書ナルモノノ無根ナルコトヲ世界ニ暴露シ、單簡

ニ此ノ問題ヲ決シ了レリ。

英國政府ガ佛國大使ノ訪問ヲ受ケ、直ニ拒絕ヲ歐洲政府ニ告知セル通牒ナルモノアルコトナシ。只存スル所ハ世人ノ知悉セル新聞電報アルノミ。是レ獨逸ノ政府及ビ獨逸外ノ二三諸國ニ駐劄スル我國代表者ニ對シ、新聞ノ言句ノ儘ニテ佛國請求ノ性質及ビ其ノ受諾ノ不能ナルコトヲ知ラシメンガ爲メニ發シタルモノニ過ギズ。敢テ佛國ヲ汚辱スルノ意義ヲ含ムコトナシ。

此原文ハ副ヘテ此ニ在リ。中間ノ事實ニ付キテハ何國政府ニモ通知シタルコトナシ。

佛國公使拒絕ノ事ニ關シテハ其主張スル所ヲ炳然タラシムルガ爲メ、余ハ陛下ノ命ニ依リ閣下ニ此ニ二通ノ參照書類ヲ送附シ、閣下ガ信認ノ榮ヲ受クル政府ニ報告セラレンコトヲ希望ス。其ノ一ハ「エムス」ニ於ケル事件ノ上命ヲ奉ジ、且ツ陛下ノ親覽ヲ經テ編輯シタル報告書ニシテ、其ノ二ハ陛下ノ侍從武官ガ命ヲ奉ジテ施行セル顛末ヲ記セシ公報ナリ。

我が大使ガ佛國ヲ去リシハ佛國政府モ知ルガ如ク撤去ニアラズシテ私用ノ歸國ナリ。大使ハ事務ヲ一等書記官ニ托シ、書記官ヘハ之ヲ通告セリ。是レ從來屢々行ハレシ事ナリトス。陛下ガ首相即チ余ニ「レオポルト」太子即位ノ件ニ付キ告知セシトノ事實モ亦無根ナリ。余ハ偶事ニ與カリシ一私人ニ依リテ之ヲ知リテ行ヒタルノミ。

斯ク佛國政府ガ開戦ノ已ム可カラザル所以トセシモノ悉ク無根ニ屬スルニ於テハ、吾人ハ唯「ル

イ」十四世及ビ那翁第一世ニ關スル著名ナル口碑ノ原由ヲ探尋スルノ外ナキニ至ル。

余ハ此ノ形勢ノ由テ生ゼシ原因ハ獨逸國ノ安寧及ビ獨逸ヲ忌嫉スルノ卑劣心ト、及ビ外戦ニ乗ジテ自國民ノ自由ヲ壓伏セントスル非望トニ外ナラザルヲ認ム。

兩國國民ノ憤怒及ビ強力ニ依リ推測スルヲ得ベキ一大激戦ニ因リ、今ヤ益々進歩セントスル文明及ビ歐洲ノ平和的發達ヲ數年阻滯セシムルハ悲ムベキノ至リナリトス。然レドモ暴惡ナル行爲ニヨリテ吾人ヲシテ國民ノ光榮及ビ自由ノ爲メ應戰スルノ已ムヲ得ザルニ至ラシメタルモノニ責任ノ歸ス可キヲ信ジ、吾人ノ事正當ナルヲ以テ神靈ノ保護ヲ得ルコトヲ信ズ。又吾人ハ躍如タル獻身ノ稟性ヲ表示スルヲ見テ、獨逸國民ノ幫助正確ナルヲ信ジ、侮慢ニシテ不法ナル佛國ノ挑戰ニ加盟スルモノナキヲ確信ス。

(第七號ノ甲)

一千八百七十年七月十七日伯林

女皇陛下ノ政府ニ達セル報ニ因リ、我政府ハ北獨逸聯邦ト佛國間ノ交誼將ニ破裂シ戰爭之ニ繼ガントスルヲ恐ル、ナリ。

女皇陛下ノ政府ハ二大友邦ノ爲メ併セテ全歐洲ノ爲メ此ノ一大不幸ヲ悲ム。此ノ利害ニ關シ又人

類ノ利害ニ關シ、余ハ貴政府ニ對シ歐羅巴諸國ガ相互間ニ紛議ヲ生ズルトキハ、干戈ニ訴フルニ至ルニ先チテ、友邦國ハ好意ノ周旋ヲ爲スベキ旨ヲ約セシ一千八百五十六年巴里條約第三十三款ニ基キテ、熱心ナル勸告ヲ爲スベキコトヲ命ゼラレタリ。

此ノ盟約ニ遵ヒテ余ハ本國政府ヨリ貴政府ニ對シ、亦等シク佛國政府ニ對シ極端ニ達セザルニ當リ、戰爭ノ不幸ヲ避ケンガ爲メ、若クハ數友邦國ノ仲裁ニ委ネラレン事ヲ申述スルノ命ヲ得タリ。尙余ハ本國政府ハ何時ニテモ貴囑ニ應ジテ悦ンデ仲裁ノ勞ヲ採ルベキコトヲ表示スルノ命ヲ得タリ。

余ハ茲ニ閣下ニ對シ以上申述スルノ榮ヲ得タル勸告ハ、普國政府ニ於テ優握ナル受諾アラシコトヲ偏ニ希望スル旨ヲ陳述シ、此ノ機會ヲ得テ余ガ尊敬ノ意ヲ致ス。

オーガスタス、ロフタス

北獨逸聯邦首相閣下

第七號ノ乙

前文獨逸譯文 (略之)

(第八號)

第七號ニ對スル首相ノ答文

(首相演述中ニ在リ)

(第九號)

佛國政府ノ命令ヲ奉行スル佛國代理公使スーシニエーハ茲ニ普國外務大臣ニ左ノ通告ヲ爲スノ光榮ヲ有ス。

佛國皇帝陛下ノ政府ハ、普國ノ皇族ヲシテ西班牙國ノ王位ニ當ラシムルノ企計ヲ以テ我國土上ノ安寧ニ危害アルモノト認ムルニ依リ、我同意ヲ得ルニ非ラザレバ之ヲ實行セザルノ確保ヲ普國々王陛下ニ求ムルノ已ムヲ得ザルニ至レリ。

然ルニ普國國王陛下ハ此ノ確保ヲ與ヘザルノミナラズ、我全權大使ニ對シ事情ニ隨ヒ進退スルハ其ノ權内ニ在リト明言セラレタルヲ以テ、我政府ヲシテ此ノ宣言中ニ歐洲ノ權力平均ニ對スル如ク、亦我佛國ニ對シテ脅迫の深意ヲ包藏スルニアラザルカト疑ハシメタリシニ、果シテ普國國王陛下ハ我が大使ノ派遣ヲ拒絕シ、又我公使ニ對シ更ニ何等ノ談判ヲモ爲サザル旨ヲ歐洲ノ諸内閣ニ告知シ

タルニ至リテ、此ノ宣言ノ深意愈明白トナレリ。
是ニ於テ我皇帝陛下ノ政府ハ、其ノ榮譽ヲ保持シ其ノ利益ヲ防衛センガ爲メ、狀況ニ應ジ速カニ必要ノ方法ヲ取ラザル可カラザルモノト判定シ、自今貴國ヲ以テ交戰國ト認ムルモノナリ。
スーシニエー敬シテ閣下ニ其ノ意ヲ致スコト爾リ。謹言

ル、スー
ー
ル

一千八百七十年七月十九日伯林

(第十號)

一千八百七十年七月十九日

佛國皇帝ノ政府ハ其ノ外交官ヲシテ謄本ノ如キ中ニ宣戰書ヲ含メル書類ヲ送附セシメタリ。
此ノ書類ハ最近十四日以來世界ヲ攪擾セル事件ニ關シ、佛國政府ヨリ受ケシ第一ニシテ且ツ唯一ノ公文ナリ。宣戰ノ理由トスル所ハ左ノ二點ニ在リ。

佛國ノ承諾ナクシテ普國太子ヲ西國ノ王位ニ登ラシメザルノ保證ヲ拒絕セルコト、及ビ佛國政府ニ對シ佛國大使ノ訪問ヲ受ケ及ビ之ト談判スルコトヲ拒絕セル通牒ヲ爲シタリト謂フ事。

吾人ハ之ニ對シ單簡ニ辯ズル所アラシ。

我陛下ハ西國々民ノ自由不羈及ビ「フオーヘンツオルレン」太子ノ決意ノ自由ヲ重ンジ、嘗テ太子ノ即位ヲ望ミシコトナシ。將來ニ對スル保證ノ請求ハ不法ニシテ且ツ失當ナリ。佛國ハ之ヲ以テ敵意アリトスルハ故意ノ構造ナリ。

佛國ガ謂フ所ノ通牒ナルモノハ勿論談判拒絕ノ事モ嘗テ有ルコトナシ。佛國大使ハ我政府ト談判ヲ試ミズ、唯々陛下ト「エムス」ニ於テ私話ヲ爲セシノミ。

佛國政府ノ要求ハ凡ソ國民ノ忍ブ能ハザル屈辱ヲ要ムルニアルコト、及ビ戰爭ハ決シテ普國ノ意思ニ存セザルコトハ北獨逸聯邦ノ内外ヲ論ンゼズ、等シク獨逸國民ノ知ル所ナリ。
佛國ノ列擧スル宣戰ノ原因ナルモノ、事實ハ無根ニシテ構造セルモノナルコトハ文明諸國ノ均シク認ムル所ナリ。

北獨逸聯邦及ビ之ト同盟ノ南獨逸政府ハ、此ノ襲撃ニ抵抗シ、神靈ガ吾人ニ與フル一切ノ方法ヲ盡シテ防禦セントス。此ノ報告竝ビニ參照ノ書類ノ謄本ヲ閣下ガ信認ヲ受クルノ榮ヲ有スル政府ニ送付アラシコトヲ……………閣下ニ希望ス。

フホン、ビスマルク

貴族院ニ對スル政策

國家ニ對スル貴族院ノ關係ハ獨リ政治的ノミニアラズシテ専ラ社交的ニアルモノナリ。又國家ヲシテ重キヲ貴族院ニ置ク所以ハ、其政治上ノ機關タルヨリハ寧ロ社交上ノ要具タルニ在リ。其社交上ノ要具タルノ實質ヲ備エテ後始メテ政治上ニ於ケル貴族院ノ勢力ヲ有スルニ至ルモノナリ。故ニ政府ガ貴族院ニ對スル政策ハ先ヅ其社交上ノ關係ヨリ著手シテ漸次ニ政治上ノ關係ニ及ボスベキコト緊要ナリトス。其方法タルヤ貴族ト皇室トノ關係ヲ親密ナラシメ、其親密ナル關係ニ依テ漸次政府ノ政策ヲ間接ニ遂行スルコトニ注目スルニアリ。而シテ其政策ヲ施行スルニハ先ヅ政府ト宮内省ト協同一致シ、數年ヲ期シテ之ヲ成就スベキモノトス。

立憲政治ノ今日ニ於テ、政府ト宮内省トヲ協合シテ貴族ニ對スル政策ヲ施行セシメント云ハ、世人ハ必ラズ驚愕ノ念ヲ生ズルナラン。然レドモ是レ歐洲立憲國ニ行ハル、所ノ政策ニシテ、決シテ無稽ノ政策ニアラザルナリ。眼ヲ轉ジテ歐洲立憲國ニ於ケル王室ト政府トノ關係ヲ一看セヨ。抑政府ト宮内省トヲ分離シ、又王室ト政府トヲ混同セザルコトハ立憲政體ノ要義ナリ。然レドモ是レ全ク政治上表面ノ形式ナリ。其裏面ニ於テハ王室ト政府トハ常ニ密接ノ關係ヲ有シ、一日モ分離ス

ルコト能ハザルナリ。故ニ政府ハ表面ニ於テハ務メテ王室ト混同セザルコトヲ示スト雖モ、其裏面ニ於テハ常ニ宮内省ニ依テ以テ議院ニ對スル政策ヲ施行スルニアラズヤ。彼ノ英國ノ總理大臣ハ政務ノ全權ヲ掌握シテ爵位官職ヲ授與スルノ權力アルト同時ニ、其妻ハ皇帝ノ財囊ノ鑰ヲ保管シ、恩賜ノ金圓ハ悉ク其上奏ニ因テ支出スルノ制タリ。故ニ貴族院ヲシテ國政上ニ於テ有力ナル政府ノ援助トナサント欲セバ、政府ハ宮内省ヲ經由シ、貴族ヲシテ社交上ノ要具トナシ、先ヅ其議院外ニ於ケル品位及勢力ヲ高大ナラシメ、而シテ其議院内ニ發表スル權力ヲ以テ下院ノ過激狂妄ナル議決ヲ抑制スルコト今日ノ最大急務ナリトス。

今社交上ヨリ貴族ヲ統一スル方法ノ概畧ヲ記述セバ、

第一 皇室ト貴族トヲシテ益々親密ナラシムルニハ、單ニ王家ノ藩屏ト云フガ如キ單絶ナル儒學主義ノミニ止マラズ、進ンデ王家ノ藩屏トナラシムルノ方法手段ヲ施行スベシ。王家ノ藩屏トナラシムルニハ宮内省又ハ政府ニ於テ日常貴族ヲ優待スルニ怠ラザルコトヲ要ス。例ヘバ貴族院議員ハ宮中ニ於テ御宴ヲ設ケラル、トキ、其公侯伯子男ノ階級ニ係ハラズ、又其政治上ノ思想ノ如何ニ關セズ、現在議院ニ於テ勢力ヲ有スル者又ハ將來望ヲ屬スルニ足ルベキ貴族ヲ選抜シテ特ニ御陪食ノ榮譽ヲ賜ハリ、又宮中ニ於テ催サル所ノ乘馬、詩歌會其他ノ御會ニハ貴族院議員タル華族十人乃至二十人ヲ選抜シ、特別ノ御思召ヲ以テ陪席ヲ仰付ケラレ、又行幸若クハ陸海軍演習御覽ノ時ニ當

リ、貴族院議員タル華族ニシテ有爲ノ人物ハ、其爵位ノ高下ニ拘ハラズ、特ニ供奉ヲ仰付ケラレ、又宮中ニ於テ時々各種ノ學士ヲ招キ學術ノ講筵ヲ開カレ、貴族院議員タル華族ハ其主義ノ如何ニ係ハラズ、十人乃至二十人ヲ選抜シテ之ヲ聽聞セシメ、又東京府下及各地方ニ散在スル御獵場等ニ於テ狩獵アルトキハ、貴族院議員タル華族ニモ御思召ヲ以テ特ニ狩獵ヲ仰付ケラレル等ナリトス。

右ニ列記スル方法ニ着手スルト同時ニ、貴族ノ社交上ノ地位ヲ高尙鞏固ナラシムルコトヲ勉ムベシ。其方法タルヤ、宮内省ニアル爵位局、内藏寮、學習院ノ三機關ニ依リ事項ヲ施行スルニアリ。

第一 貴族ニ對スル爵位局ノ地位タルヤ殆ンド町村長ノ人民ニ於ケルガ如シ。貴族ノ結婚、養子、相續財産管理等一々其管轄ニ屬セザルハナシ。故ニ爵位局及ビ其管轄ニ屬スル華族會館ニ於テハ、貴族ニ對スル政府ノ取扱ノ方針ヲ熟知シ、以テ華族ノ品位ヲ高尙ナラシメ、且ツ其家名ヲ損失セザルコトヲ獎勵スベシ。而シテ之ヲ實施スルニハ華族ノ財産ヲ三等ニ區別シ、第一真正ナル貴族ノ品位ヲ保チ得ル財産ヲ有スル者、第二第一ノ品位ヲ保ツコト能ハズト雖モ、日本現今ノ社會ニ於テ中等以上ノ生計ヲ營ミ得ル者、第三第一第二ニ位スルコト能ハザル者等ヲ精査シ、以テ其財産保營ノ計畫ヲナスベシ。此ノ三種ノ内第三等ニ位スル者ニ對シテハ務メテ其救濟策ヲ講究シ、將來華族タルノ榮位ヲ保續セシムルノ道ヲ設立スルヲ要ス。今其救濟ノ方法ノ一二ヲ擧グレバ、御料地附屬ノ土地ヲ貸與シテ、永代又ハ有期ノ借地人トナスカ、或ハ宮内省中ノ職員ニ任用スルカ、若クハ其戸

主ノ結婚スルニ當テハ務メテ財産家（士族平民ヲ問ハズ）ノ子女ヲ娶リ、其財産ヲ享有セシメ漸次爵位ニ對スル社交上ノ地位ヲ占有セシムルコトヲ務ムベシ。

第二 内藏寮ニ於テハ華族ノ設立ニ係ル第十五國立銀行ト連絡シテ貴族ノ財産ヲ管理スルノ任務ニ從事スベシ。而シテ内藏寮ハ華族中ノ名門又ハ王家ニ勳勞アル家ニ限リテハ、特ニ家名存續ノ爲メ確實ナル方法ヲ設立スルモノニ付テハ王室ノ財産ヲ傷ケザル限リニ於テ、一時ノ貸下金ヲナシテ家名保續ノ計畫ヲナスコトヲ講究スベシ。又第十五國立銀行ハ明治三十年ニ至リ滿期トナルガ故ニ、今日ヨリ其滿期後ノ處分及ビ繼續法ヲ研究シテ、華族ノ財産ノ保管ニ關スル將來ノ計畫ヲ確定スベシ。若シ明治三十年ニ至リ普通ノ銀行ノ如ク資金割戻ノ方法ヲ實行セバ、華族ノ財産ハ實ニ累卵ノ危キニ至ラン。然ラバ則チ之ヲ私立銀行トシテ繼續センカ、華族中何人カ二千萬圓ノ大資本ヲ運轉シテ華族ノ株主ヲ満足セシムルノ經濟家アルカ。是等ハ今日内藏寮ト大藏省トニ於テ貴族ノ爲ニ計畫スベキ緊急ノ事件ナリトス。

第三 學習院ニ於テハ日本貴族ノ教育ノ方針ヲ確定スルヲ緊要トス。故ニ院長、教頭等ニ命ジテ學習院ハ國民普通ノ教育ニ倣ハズ、貴族ニ限ル一種特別ノ教育ノ方針及ビ其順序等ヲ設立セシムベシ。而シテ獨逸ノ貴族ヲ教育スル方法、露西亞ノ貴族學校ノ組織及英國華族ノ教育等ヲ調査シ、我邦ノ國體及ビ古來ノ慣例及ビ現今ノ情況トニ對照比較シテ、東西折衷シテ日本ノ貴族ニ必要ナル將

來ノ教育ノ大本ヲ確立シ、而シテ後其順序ニ依リ著々其條項ヲ實施シ、以テ華族ノ本分ヲ盡スニ足ルベキ精神ト技術トヲ具備セシムルノ教育ヲ施行スベシ。然ラザレバ今日宮内省ニ於テ學習院ヲ監督シ、皇室及ビ華族ヨリ數萬ノ金錢ヲ支出スルモ却テ文部省直轄ノ學校ニ及バザルコトナキヲ疑ハシムルニ至ラン。加之ナラズ學習院ハ將來貴族院ニ列スル議員ノ養成所トモ云フベキ學校ナルガ故ニ、其教育ヲシテ普通人民ノ教育ト異ナラザラシムルトキニハ、貴族ノ品位及ビ精神ヲ有シテ國政ヲ協賛スルノ效能ハ敢テ見ルコト能ハザルニ至ラントス、

以上ハ今日政府ガ貴族ニ對スル政策ノ概略トス。然レドモ貴族院中ニハ仍ホ貴族ニアラザル勅選議員アリ、又多額納稅者アリ。是等ニ對シテ施スベキ政策ハ數多アリト雖モ、今其一二ノ要領ヲ本論ノ末尾ニ附記シテ以テ參考ニ供セントス。

第一 勅選議員ニ對シテハ社交上ノ關係ヨリハ寧ロ政治的ノ方略ヲ採リ、之ニ授クルニ官職位勳等ヲ以テスルコト可ナルガ如シ。然レドモ彼等ノ大半ハ已ニ數十年來政務ノ劇職ヲ奉ジ、又其經歷ヲ有スル者ナルガ故ニ、或ハ容易ニ普通ノ官職位勳ヲ受クルヲ屑トセザルモノモアルベシ。依テ是等ハ宮中ニ於テ華族ノ議員ヲ召サルトキ、又ハ其他ノ時期ニ於テ特ニ御思召ヲ以テ御陪食ヲ仰付ケラル、等ノ方法ヲ以テ皇室ニ密接ナラシムルコトヲ勉ムベシ。又是等勅選議員ハ多クハ維新ノ功臣ナルガ故ニ、宮内省ヨリ彼等ニ囑托スルニ明治維新ノ歴史ノ材料ヲ蒐集スルコトヲ以テシ、每週

一回又ハ二回宮内省ニ會合シテ、維新歴史ノ材料ヲ蒐集スルノ業務ニ當ラシメ、目下年々消散シツツアル維新歴史ノ材料ヲ保存スルコトヲ命ジナバ、彼等ハ進ンデ王家ノ爲メニ力ヲ盡シ、明治中興ノ大業ニ必要ナル歴史ノ材料ヲ保存スルト同時ニ、政治上ニモ亦圓滿ナル感情ヲ發生シテ、貴族院中ニ於テハ有力ナル政府ノ應援者トナルコト必然ナリ。是レ或ハ康熙帝ガ建國創業ノ後ニ於テ功臣ヲ網羅シテ康熙字典ノ編纂ヲ命ジタルノ政治ト同一ニシテ、明治維新ノ功臣ニ對スル唯一ノ政策ナリト信ズ。

第二 多額納稅者ハ單ニ財産ニ依リ貴族院ニ列スルガ故ニ、今日未ダ政治上ノ思想ヲ有セズ、又立憲政治ノ運用ニ通曉セザルガ爲メニ未ダ其國政參與ノ大任ニ當ルノ技術ナシト雖モ、彼等ハ既ニ四十五人ノ多數ヲ占メタルモノナレバ、是レ貴族院中ニ於テハ有力ナル一團體ナリトス。故ニ是等ニ對スル政府ノ政策ニ付テハ、内閣ハ勿論地方長官ハ政治的ノ政略ヲ採ラズ、華族ニ對スル政略ト同じク社交上ノ關係ヲ親密ナラシムルヲ要ス。其方法タルヤ彼等ノ財産ヲ保存シ、永ク地方ニ於ケル豪族タルノ地方ヲ鞏固ニスルコトヲ教導スベシ。故ニ多額納稅者中地方ノ豪族ニシテ巨多ノ財産ヲ有スル者ニ對シテハ、先ヅ第一ニ彼等ノ最モ恐ル、所ノ財産蕩盡ノ途ヲ杜絶シ、各家ニ相當スル家憲ヲ設立セシメ、其子弟ノ教育及ビ其財産ノ管理及ビ保殖ノ方法等ヲ教示シ、彼等ヲシテ貴族院ニ列スルノ榮譽ト其財産保存及ビ家名繼承トハ全ク現政府ノ賜ナルコトヲ感銘セシメ、以テ明治政府

ニ忠勤ヲ盡スノ念ヲ起サシムルコト、今日多額納稅者ニ對シ施スベキ政略ナリトス。
右ニ列記スル政策ヲ施行スルニハ第一内閣ト宮内省トハ表面ニハ分離屹立スルト雖モ、裏面ニ於テハ協同一致シテ此ノ政策ヲ實施スルヲ要ス。第二有力ナル政事家ヲ選拔シテ貴族院議員トナシ、内閣及ビ宮内省ト協同シテ此ノ政策ヲ履行セシムルヲ要ス。
以上ハ貴族院ニ對スル政府ノ政略ニシテ、其詳細ノ如キハ親シク閣下ニ拜謁シテ陳述セント欲ス。

對議會策ニ付内陳

八月二十九日青森ニ於テ

井 上 毅

一 第一期竝ニ當夏ノ議會ニハ、政府賛成派ト民黨トハ匹敵ノ勢ニテ、其間ニ中立派アリ、各問題毎ニ多數ノ異同ヲ生ジタル有様ニ有之候處、今度ノ冬期ノ議會ニハ或ハ政府ハ腹背敵ヲ受クルノ變境ニ落チル歟モ料カラレズト存候。若シ從前ノ政府賛成派ナルモノハ俱ニ謀ルニ足ラズトナラバ、又民黨ハ幾分ノ讓歩ヲ以テ一致スベキ者トナラバ、政府ハ急ニ意ヲ決シテ斷然民黨ト結托セザル可ラズ。此レ亦政事家ノ一策タルベキモノニシテ、深ク怪ムニ足ルコトナシト存候。但シ民黨ニ聯合セント欲セバ民黨ノ希望如何ヲ講究スルハ國家ニ對スル政府ノ義務ナルベシ。民黨ノ希望ハ既ニ彼等ノ歴次ノ宣言書及ビ事實ノ運動ニ於テ之ヲ表明シタリ。今其ノ主モナルモノヲ舉グレバ、民黨ハ選舉法ヲ改正シ、一縣ヲ以テ一選舉區ト爲シ、及ビ選舉資格ヲ下等人民ニマデ擴張セントスル者ナリ。郡長ヲ公選ニセントスル者ナリ。警察ヲ自治ノ管轄トセントスル者ナリ。民兵ヲ（佛

國ノ大革命ノトキニ行ヒタルモノトシテ今猶瑞西荷蘭白耳義ニ存セリ) 全國ニ設ケントスル者ナリ。(郡長公選警察自治及民兵ノ事ハ自由黨最近ノ事務調査書ニ於テ更ニ是ヲ宣言シタリ) 地租ヲ輕減シ、地價ヲ修正セントスル者ナリ。豫算ヲ以テ法律トシ、隨テ豫算會議ニ於テ絶對ノ權力ヲ行ハントスル者ナリ(松田正久氏ノ豫算論載セテ自由黨ノ黨議ニ在リ) 終リニ政黨内閣ノ制ヲ我國ニ行ハントスル者ナリ。民黨ノ希望ノ件ハ多クアリト雖、其ノ中ニ就テ以上ノ數件ハ彼等ノ最大主義トシ、成立ノ元素トシ、或ハ自由ヲ保證スルニ必要ナル組織トスル所ニシテ、積年ノ計畫ニ出デタルモノナレバ、縱令其中ニ二三ノ圓滑ナル意見ヲ有スルノ人アルニモセヨ、其ノ團結ノ全部ハ必ず其ノ希望ヲ成就シ、目的ヲ達スルニ非ザレバ已マザルモノナリ。政府ハ急ニ民黨ト調和セント欲セバ、或ハ又緩ニ民黨ノ望ヲ養ヒ、後日ノ機會ヲ待チテ俱ニ調和セント欲セバ、必ヤ此ノ數件ヲ採用セザル可ラズ。抑々政府ノ從來執ル所ノ立憲君主主義ト民憲ノ主義トハ、幾分ノ讓歩ヲ以テ相一致スルコトヲ得ベキヤ否ヤ、或ハ到底氷炭相容レザルノ性質ヲ有スルヤ否ヤ、此レ今日ニ於テ前途國家ノ爲ニ最モ精密ナル考慮ヲ煩ハスベキ事ト存候。

一 今日民黨ガ新内閣ニ向テ喝采ヲ表シ、或ハ少クトモ絶對的ノ反對ヲ表セザルガ如キハ彼黨ノ一時ノ假裝的ノ政略ナリ。即チ政府部内及ビ地方官中稍氣力アリテ、絶對的ニ民黨ニ反對スルノ徒ヲ排斥シ、竝ニ先ヅ其ノ當ノ敵ナル溫和派ヲ撲滅シテ以テ政府ノ羽翼ヲ殺グ爲ニ離間ノ策ヲ施ス

ニ在リ。此レ吳ヲ滅ボサンガ爲ニ先ヅ伍子胥ヲ殺シ、宋ヲ滅ボサンガ爲ニ先ヅ岳飛ヲ殺スノ策ニ異ナルコトナシ。即チ松方内閣ノ末路以來、彼黨ノ採ル所ノ祕策ナリ。政府ニシテ彼黨ノ假裝的ノ贊成ヲ知リツ、假リニ之ヲ利用スレバ蓋又妙用ナルベシト雖、其ノ結果ハ早晚再ビ民黨ト對壘相見ルニ至リ、外ニハ一層激烈ナル反對ヲ起シ、内ニハ既ニ政府贊成派ノ心ヲ失ヒ四面皆敵タルニ至ルベシト存候。

一 世間一ノ誤解者アリテ、政府ハ政黨内閣ノ系統ヲ避クル爲ニ全ク政友ヲ拒絶スルヲ以テ當然トストノ説ヲ爲スモノアルガ如シ。政府ハ議院ニ對シ多數ノ政友ヲ有シ、或ハ少クトモ少數ノ政友ヲ有スルニ非ザレバ、決シテ實際ニ立憲政府ノ運動ヲ爲スコト能ハザルベシ。四面ニ一ノ政敵ヲ有セザルガ爲ニ、又四面ニ一ノ政友ヲ有セザル政府ハ必ず敏活ノ施政ヲ舉グルコト能ハズト存候。政府ニ政友アルト、政黨内閣トハ其ノ間猶遠隔ノ距離アルモノニシテ混視スベキニアラズ。政黨内閣トハ彼ノ英人ガ自ラ云ヘル如ク政黨ノ委員ヲ以テ内閣トスルノ謂ヒナリ。

故ニ政府ハ政黨ノ外ニ嚴正中立ヲ取ルノ説ノ如キハ之ヲ法律上ニ適用スルハ可ナリ(政友ト政敵ヲ問ハズ同一ノ法律ヲ以テ制御スルノ意) 之ヲ政略上ニ適用セバ夢中ノ囁語タルコトヲ免カレズト存候。

一 生ガ今日區々ノ微意ニ於テ仰望スル所ハ、政府ハ政黨ノ一時ノ喝采ニ頓着セズシテ將來ノ結局

ヲ洞察シ、又國家永遠ノ大計ヲ經畫シテ之ヲ斷行シ、着々歩ヲ進メ、以テ天下ノ人心ヲ警覺シ、有爲ノ徒ヲシテ感激興起スル所アラシメ、頽勢ヲ挽回シ、盛運ヲ利導スルノ方針ニ出デントヲ。今假リニ其ノ目ヲ列舉センニ、

- 一 生産ノ保護。肥料會社ノ保護、勸農、絹絲輸出税ノ廢止、林制、沿海漁業法ノ制定等
- 二 海運會社ヲ保護シ航路ヲ擴張ス。
- 三 北海道ノ開拓。年々二百萬圓ヲ支給シテ事業費トシ十年ヲ期シテ成緒アラシム
- 四 海軍ノ整理及擴張。
- 五 國家經濟。地方水利土功ノ爲ニ貸出スベキ興業銀行、製鋼、
- 六 條約改正。
- 七 清韓ニ對スル政略。

右ニ就テハ固ヨリ廟堂既ニ成算アル事ト存候。但シ非常ノ時ニ際シテハ又非常ノ舉ニ出デザルベカラズ。今日人心倦怠從テ政府ノ威信地ニ墜ツルノ時ニ當リ、一揮シテ大勢ヲ振作セント欲セバ必ヤ 天皇陛下ノ聖斷ニ依リ、率先精勵上下與ニ艱苦ノ間ニ一致シ、精神一活シテ手足皆振フノ運用ナカル可ラズト存候事、若シ此ニ出ハ地租輕減地價修正等ノ消極的ノ政論ノ如キハ固ヨリ

相容レザル者ニシテ、自然ニ人心ヲ失ヒ漸々ニ消滅スルニ至ランノミ。

一 選舉競争ノ弊ハ各地方ノ人民ヲシテ平和ヲ失ヒ、生産ヲ失ハシム。此ノ弊ノ原ク所ハ獨リ官吏ノ選舉干涉ニ依ルニアラズシテ、人民ノ未ダ立憲制度ニ慣熟セザルト、十年來各地政黨ノ争ト、彼ノ封建ノ餘物ナル壯士ノ横行トニ依ル。此ノ選舉競争ノ弊ハ現ニ府縣會町村會議員選舉ノ間ニ行ハレツツアリ。此レ宜ク急ニ法律ヲ設ケテ以テ之ヲ制限シ、併セテ同時ニ將來ニ向テ警察官及選舉ノ當局者タル郡長以下ノ干涉ヲ禁ズルノ條ヲ設ケザル可ラズ。此ノ事公共ノ平和ヲ維持スル爲ニ既ニ緊急ノ必要ニ迫マレリ。宜ク緊急命令ヲ以テ之ヲ發布スベシト存候（但一ノ事情アリ別希ニ具フ）

一 明治十一年ニ廢刀ノ令アリシ以來、今日ニ至リ仕込杖ヲ以テ帶刀ニ代用シ、公然暴行脅迫ノ兇器ヲ携フルモ法律ノ之ヲ禁ズルナシ。選舉ノ弊ハ往々此ノ兇器横行ノ結果タラズンバアラズ。今宜シク法律ヲ設ケテ兇器ノ携帶ヲ禁ズベシ。

但シ人民ノ兇器携帶ヲ禁ズルトキハ隨テ一層警察ノ取締ヲ嚴重ニセザルベカラズ。又各大臣ノ護衛ハ之ヲ廢セザルベカラズ。何トナレバ既ニ人民ニ對シ自衛ノ具ヲ禁ズルトキハ、獨リ政權アル官吏ノミヲ防衛スルノ理ナケレバナリ。

議會景況ノ報告

金子堅太郎

拜啓益々清康奉大賀候。議會モ開院早々彼は紛紜有之其形況概略奉内申候。

一、谷子爵之建議ハ表面ニハ勤儉尙武ト有之、隨分結構ナルニモ不拘、其一部之賛成者ハ陰然下院之民黨ト聯絡ヲ通ジ、彼是應援スルノ心算之由、其故最初七十八名之賛成者有之候處、反對者(研究會派)顯出シテ運動致候ヨリ、其賛成者中ニモ連署取消シ又ハ開議之當日缺席致候人モ有之、終ニ七十八ニ對スル九十七之多數ニテ否決イタシ、夫レガ爲ニ谷三浦等ノ連中ト千家男トノ關係彌破裂シ、其否決之翌日政府委員更任シ會議之如キモ、鳥尾ノ發議ハ否決シ、相互ノ間柄日々疎隔之形況ニ赴キ申候。就テハ貴族院中ニモ追テハ民黨ト吏黨トノ名稱竝ニ事實發生シ、隨分困難ナル事ニ可相成候。其民黨ハ三曜會(近衛公一味)及勤儉尙武連(谷三浦一味)ヨリ成立シ、吏黨ハ研究會(千家中山侯)之連中ニ御座候。其總員ハ互ニ伯仲スルモ、民黨ハ今回之敗北ニテ堅固ナル團體トナルモ、研究會ハ其内實未ダ堅固ナラザル事實有之候由、此ノ如キ折柄又々小澤男ニ憂慮被致居候。

之將軍免官ニテ貴族院中之將軍連中大ニ激昂シ、日夜處々ニ會同シ、政府ニ質問ヲ起スノ決心ノ由、其提起ノ方法ハ貴族院ヨリセズ下院議員ヨリ發議セシムル計畫ノ由承リ候。

又貴族員議員中谷子爵之建議ニ連署セシ連中ニハ、此ノ如キ形況ニテハ迎モ獨立シテ運動スルコト無益ナレバ、公然下院之民黨ト結び、彼ノ査定案ニ同意シ、七百五十萬以上ニ減却豫算ヲ以テ政府ニ當ルヨリ良策ナシト主唱スル人モ有之、其同志者募集之由ニテ、維新以來之老人達ニハ大ニ憂慮被致居候。

下院ニ於テハ査定案ノ勢力盛大ニシテ迎モ當ルベカラザル模様有之候。其故全院委員會モ廢止シ、直ニ豫算之本會議ニ取懸リ、昨十九日ハ初會議ニモ不拘、別ニ異議モ無之、外務内務大藏之三省トモ議了セリ。此勢ニ依レバ今兩三日ニハ悉皆議了シ政府ノ同意ヲ求ムルノ手續ニ可至歟ト被存候。而シテ政府ハ勿論不同意ヲ表スルナラン。其時ニハ下院ハ政府ノ不同意ヲ唱フルニ不拘貴族院ニ送附スルナラン。又上院議員中ニモ昨年ト同ジク政府ノ不同意ヲ表スル議案ヲ受取リテ之ヲ議スベシト首唱スル人モ有之候事故、今年モ亦彼六十七條同意ノ方法ニ付議論喧シク、上院中ニモ此事ニ付二派ニ分裂シ、其爭擾云フベカラザルニ至ラバ、已ニ昨年モ豫算ニシテ政府ノ同意ナク直ニ下院ヨリ上院ニ送附スル時ハ如何シテ可ナランカトノ疑問起リ、夫レガ爲ニ閣下ノ御高配ヲ辱セシ末、本年モ亦必ラズ此問題ニテ議會ノ紛擾ヲ生ズルナラント愚考仕候。此際貴族院ハ斷

然拒絕スル方得策ト小生ハ愚考仕居候。其義ハ已ニ昨年小田原ニ御伺申上タル事ニ御座候。然レドモ今年之將來ハ如何可相成歟、黒雲日比谷原頭ヲ蔽ヒ、正理ノ日光之ヲ破リテ迷霧ヲ照破スル者ナク、實ニ國家危急之秋カト愚考仕候。先ハ今日ノ形況迄
勿々頓首

堅 太 郎 再拜

十二月二十日

伊藤伯爵閣下

拜啓、今朝ハ尊出ニ拜接忝奉拜誦候。其後電報ヲ以テ御通知申上候通、衆議院ニ於テハ天野若圓之緊急動議即チ確定議決ノ前ニ於テ政府ノ同意ヲ求ムルコトニ可決シ、連日之妖雲一時ニ解散シ、先ヅ爲國家可賀之一事ニ御座候。衆議院之景況ハ毎日小宮氏ニ命ジ御通信爲致置候ヘドモ、今日之事ハ詳細上申仕候様申付置候間、定テ同氏ヨリ詳細具申仕候事ト奉存候。先日來ノ運動モ此議決ニ依レバ先ヅ無用ニハ相成候ヘドモ、實ニ爲國家ニハ祝賀スベキ事ニ御座候。且今度之協議ニテ華族

又ハ勅選議員之精神ト本心トヲ發見シ、何人ハ眞ニ國家之爲ニ盡カスル人ナリ、何人ハ陽ニハ國事ヲ憂フルガ如キモ陰ニハ曖昧タル論說ヲ主唱スル人ナリ杯種々分析スルノ機會ヲ得タルカト被存候。豫算議定細則ハ別紙之通印刷シテ、谷細川兩氏之發議ニテ各豫算委員ニ配付致候間、近日委員會ヲ開キ可申候、尤モ今日衆議院之決議ニ依レバ其議事モ左程六ヶ敷ハ有之間敷哉ト被存候。併シ隨分異說紛々タル六十七條トノ關係アル事故、如何之結果ニ相成候哉精々注意仕居候。

鳥尾子ヨリハ早速返書參リ申候。病中ニハ有之候ヘドモ、憲法違反之決議ハ決シテ貴族院ニ受付ケ難ク、不法無效ノ決議ハ斷然拒絕スベシトノ意氣込ニテ、我黨之味方ニ有之候。尙近日面會之上篤ト將來之事ヲ協議スル積リニ御座候。其景況ハ後日上申可仕候。同子モ先ヅ同志之部分カト被存候。

井上氏ハ日夜奔走、飽迄閣下之御命令ヲ貫徹スル決心ニ御座候。先ハ要用迄如此御座候。勿々頓首

二月二十日夕八時

金子堅太郎

伊藤伯爵閣下

尙以御病氣モ此吉報ニテ速ニ御快復相成候様偏ニ奉願候。

ピット内閣ト下院トノ衝突竝上
奏及勅答

千七百八十三年十二月十八日國王（ジョージ三世）ハ斷然意ヲ決シテ衆議院ノ多數議員ノ賛助ヲ有スル所ノノルス卿及フオクス氏ノ内閣ヲ解任シ、ピットニ託スルニ首相ノ國璽ヲ以テセリ。是ニ於テ衆議院ノ多數議員ハ國主ノ處置及ピットニ對シ最モ強硬ナル反對ヲ試ミ、其ノ間常ニ豫算案ノ協賛ヲ延議シ、決議案ヲ通過スルコト前後凡テ八回、上奏ヲ爲スコト凡テ五回（國王ノ之ニ對シテ勅答ヲ與フルコト凡テ四回）一方ニハ議院ヲ解散スルノ不當ナルコトヲ主張シテ以テ之ヲ拒ミ、又一方ニハ現内閣ノ信任ナキコトヲ決議シ、以テ其ノ辭職ヲ促ガセリ。然ルニ國王ハ動カズ、首相ハ辭セズ、又議院ヲ解散セズ。而シテ議院ノ多數ハ漸ク翻リテ國王及ピットヲ賛成スルニ至レリ。是ニ於テカピットハ輿論ノ既ニ己レニ與ミセルヲ洞察シ、果然議院ヲ解散シ、次回ノ總選舉ニ於テ全勝ヲ占メ、前後稀レナル強内閣ヲ組織セリ。

千七百八十三年十二月ピット首相ノ任ヲ受クルヤ、同月二十二日衆議院ハ左ノ上奏案ヲ可決シ以テ國王ニ奏請セリ。其ノ主旨ハ（上奏第一回）

ピット内閣ト下院トノ衝突竝上奏及勅答

「現今國家ノ狀勢議院ヲ解散スルハ頗ル不可ナリ。希クハ陛下ハ議院ヲシテ國家ニ必要ナル責務ヲ盡スノ期日ヲ有セシメラレンコトヲ。又希クハ陛下ハ私利ヲ目的トスル在廷諸官ノ言ヲ聽カズシテ、公利ヲ精神トスル衆議院ノ議ヲ容レラレンコトヲ」ト。

國王ハ之ニ對シ勅答ヲ與ヘタリ。其主旨ハ（勅答第一回）

「今日ニ於テ朕ガ特權ヲ以テ議院ヲ停會又ハ解散スルコト無カルベシ」ト。

衆議院ハ此ノ勅答ヲ以テ單ニ「クリスマス」休會前ニ係ルモノト爲シ、尙ホ其ノ後ヲ危ブミ同月二十四日左ノ主旨ノ決議案ヲ通過シ、以テ解散ヲ豫防セリ。（決議第一回）

「印度ニ對スル支出ハ議員ニ於テ之ニ對スル充分ナル財源ヲ決議スルマデ大藏省ニ於テ承諾スルコトヲ得ズ」

千七百八十四年一月十二日衆議院ハビットニ迫リテ議院解散ノ手段ヲ探ラザルコトヲ明言セシメントシテ能ハズ、即チ左ノ主旨ノ決議案ヲ通過セリ。

「議院ヲ停會又ハ解散シタル後議院ノ議決セザル費途ニ支出ヲ爲スバ不法ナリ」ト（決議第二回）尋デ左ノ主旨ノ決議ヲ可決セリ（決議第三回）

「英國目下ノ形勢ヲ察スレバ議員及公共ノ信用ヲ有スル内閣ヲ組織スルコト殊ニ必要ナリ」。千七百八十四年一月十四日又左ノ主旨ノ決議案ヲ通過セリ（決議第四回）

「現今ノ内閣員ヲシテ國家最重ノ責務ニ當ラシムルハ憲法ノ精神ニ違ヒ、陛下竝國民ノ利益ニ反スルモノナリ」

ビットハ毅然トシテ動かズ終始沈黙セリ。

一月二十六日遂ニビットハ始メテ言ヲ出シテ曰ク

「今日ノ情況余ハ解散ヲ奏請セズ」

同時ニ又曰ク

「國務大臣ノ任免進退ハ衆議院ノ決議ニ因ルモノニアラズ、而シテ今日余ハ余ノ辭職ヲ以テ公共ノ利益ニ害アリトスルヲ以テ敢テ辭職セズ」ト。

衆議院ハ尙ホ國王ノ保證ヲ得ントシ決議シテ曰ク（決議第五回）

「東印度ニ關スルノ議事ハ甚ダ重大ナルヲ以テ停會又ハ解散ヲ以テ之ヲ中止スベカラズ」

當時有力ナル議員ニシテ漸ク此ノ衝突ヲ調停スルノ必要ヲ感ジ、其ノ間ニ奔走シタルモノアリ。

二月二日衆議院ハ左ノ主旨ノ決議案ヲ通過セリ（決議第六回）

「國家現今ノ情況議院及國民ノ贊成ヲ有スル確乎タル聯合内閣ヲ必要トス」

尋デ又

「本院ノ信任ヲ置ク所ノ内閣ヲ組織セントスルニハ現内閣ヲ繼續セシムルコトヲ得ズ」（決議第

七回)

此等前後數回ノ決議ハ未ダ何等ノ效果ヲ奏セズ、内閣ハ泰然トシテ動カザルヲ以テ、衆議院ハ又此等決議ノ主旨ヲ具シテ上奏セリ(上奏第二回)

上院ハ此ニ於テ始メテ國王及首相ヲ助ケ二月四日左ノ主旨ノ二個ノ決議案ヲ通過セリ(上院決議)

「既ニ法律ヲ以テ行政官ニ委任シタル事務ノ執行ヲ一院ノミノ意見ニ依リ停止スルハ違憲ナリ」
最高行政官ノ任免ハ一ニ陛下ノ特權ナリ。議院ハ陛下ノ此ノ特權ヲ執行セラル、ニ際シテ一ニ聖裁ニ是レ頼ルノミ。

上院ハ尋デ上奏シテ曰ク

「本院ハ陛下ノ特權ヲ執行セラル、ニ當リ、常ニ之ヲ翼賛スルコトヲ保シ、又其ノ選任ハ一ニ陛下ノ聖裁ヲ仰グ」(上院上奏)

國王之ニ答フ、其ノ主旨ハ(勅答第二回)

「朕ハ國務大臣ヲ選任スルニ當リ期スル所ハ一ニ議院及公共ノ信用ヲ受クルニ最モ値スル者ヲ選拔スルニ在リ」

衆議院ハ上院ノ決議ニ對シ左ノ決議ヲ爲セリ。(決議第八回)

「本院ハ行政官ノ執行權ニ關シ特ニ金錢ノ支出ニ關シ本院ノ意見ヲ公示スルノ權ヲ有ス云々」

衆議院ハ前ノ上奏ニ對シ未ダ何等ノ勅答ナキヲ以テ、之ヲ得ルマデ豫算案ノ議事ヲ延議セリ。二月十八日ビットハ衆議院ニ告ゲテ曰ク

「陛下ハ議院ノ決議ノ如ク現内閣ヲ解任スルヲ適當トセラレズ、又現内閣ハ敢テ辭職セズ」ト。

同月二十八日衆議院左ノ決議ヲ爲シテ之ヲ上奏セリ(上奏第三回)

「本院ニ於テ必要ナリト議決シタル内閣ヲ組織スルヲ妨グル所ノ障害ヲ除カレンコトヲ奏請ス」

國王之ニ答ヘテ曰ク(勅答第三回)

「朕ハ鞏固ナル聯合内閣ヲ望ムモノナリ。然レドモ現内閣ハ未ダ何等ノ批議ヲ蒙ラザルノミナラズ、反テ臣下ノ満足ヲ表スルヲ見ル云々」

三月一日衆議院ハ更ニ上奏シテ曰ク(上奏第四回)

「國民代表者ノ信任ヲ有セザル内閣ヲ繼續スルハ公共ノ利益ニ反スル故ニ之ヲ却ケラレンコトヲ奏請ス」

此時フオクスハ衆議院ノ多數ニ反對シテ内閣ヲ組織シタルノ先例ナキコトヲ論ジタリ。而シテビット之ニ應ジテ曰ク、

「我國史ヲ按ズルニ何等ノ審問ヲ受ケズ何等ノ犯罪ナク又何等ノ原因ナクシテ辭職スルヲ必要トスルノ先例ヲ見ズ」ト。

ビット内閣ト下院トノ衝突並上奏及勅答

勅答モ亦同様ノ主旨ニ出ヅ（勅答第四回）

三月八日衆議院ハ更ニ又左ノ主旨ヲ以テ上奏セリ（上奏第五回）

「本院ハ最後ノ勅答ヲ拜シテ實ニ驚愕ノ外ナシ。現内閣ノ執ル所ノ主義ハステエワルト朝專制時代ノ政府ノ執リシ所ノモノナリ。且夫レ何等ノ罪科ナシト雖、大臣ヲ却クルニ於テ何等ノ妨アルコトナシ。何トナレバ解任ニシテ刑罰ニ非ザレバナリ云々」

三月八日ノ上奏ハ實ニ最後ノモノトナレリ。一月十二日ニハ反對黨ノ多數ナルコト五十四、二月二十日ニハ減ジテ二十、三月一日ニハ又減ジテ十二、同月五日ニハ又減ジテ九、而シテ三月八日ニハ又減ジテ一ト爲リ、終ニ國王及首相ノ勝利ニ歸シタルヲ以テ、豫算案ハ容易ニ議院ヲ通過セリ。而シテ三月二十四日ビツトハ果然議院ヲ停會シテ翌日之ヲ解散シ、次回ノ總選舉ニ於テ大多數ヲ占メタリ。

下院議員選舉法ニ付テノ意見

下院議員ノ選舉法ニ付テハ直選ト復選トノ二種アリ。而シテ其利害得失ヲ論究スルニ當テハ、先ヅ復選法ノ弊害ヲ詳述スレバ直選法ノ適當ナルコト言論ヲ費サズシテ自ラ明カナリ。故ニ今復選法ノ弊害ヲ左ニ列記シ以テ本邦下院議員ノ選舉法ハ直選ニセラレンコトヲ切望ス。

第一 復選法ヲ用ユルトキニハ人民ヲシテ政治ノ思想ヲ滅殺セシム。何トナレバ人民直ニ下院議員ヲ選舉スル能ハズ、代選人ヲ以テ之ヲ選舉セシムルガ故ニ、自ラ進ンデ適當ノ議員ヲ探索スルノ必要ヲ見ズ。已ニ其必要ヲ見ザレバ平常其心ヲ政治ニ傾クルコト無ク、又議員ガ下院ノ議場ニ於テ如何ナル論ヲ主持スルカヲ注目スルコト無ク、終ニ議員選舉ノ大事ヲ代選人ニノミ抛任シ、人民參政ノ權ヲ拋棄スルニ至ラン。

（參照）

「ヘアー」代議政體論ニ云、復選法ノ目的ハ賢明且不偏ノ代選人ヲシテ適當ノ議員ヲ選舉セシムルニ在リト雖モ、其實際ニ於テハ全ク此目的ヲ達スルコト能ハズ。其代選人ハ徒ニ政黨ノ機關トナ

リ、終ニ復選法ノ目的ニ背馳ス。又原選舉人ハ此復選法ノ爲メ下院議員ノ選舉ニ熱心スルコトヲ滅殺スルニ至ラン云々。

「ボルク」政治論ニ云、復選法ハ人民ト代議士トノ間ヲ隔絶スルモノナリ。故ニ此隔絶ノ階級ヲ破ルニアラザレバ人民ハ下院議員ヲ選舉スルノ實力ナク、徒ニ選舉ノ虚装ヲ得ルノミナリ。又選舉ノ時ニ於テ余輩ガ注目スルコトハ先ヅ議員ノ適否ヲ探知スルヲ以テ第一トス。其選舉ノ後ハ議員ハ常ニ選舉人ニ對シ義務ヲ有シ、且之ニ依頼セザルヲ得ザルモノナリ。然ルニ復選法ニ依レバ、此義務ト依頼トノ聯絡ヲ絶ツモノト謂フベシ。況ンヤ人選ノ一事ハ苟モ判決力ヲ有スル人民ナレバ決シテ之ヲ他人ニ代理セシムルコトヲ欲セザルニ於テヤ云々。

「ウルゼー」曰、復選法ハ選舉人ヲシテ其權ヲ重ンゼシメズ、寧ロ其得喪ヲ顧ミザルノ情ヲ起スニ至ラシメン。蓋シ一國ノ人民ニシテ直ニ其代議士ヲ選舉スルヲ得ズ、唯僅ニ其代選人ヲ選舉スルニ止ラシメバ、彼レ必ズ其結果ヲ見ルノ遅キニ疲レ、其權ノ重要ナルヲ遺忘スルニ至ルベケレバナリ。顧フニ若シ能ク一國ノ人民ニ就テ聰明不明ノ別ヲ立ツルヲ得バ、宜ク不明ノ徒ヲシテ其選舉權ヲ受クルヲ得ザラシムベシ。豈故ニ他人ヲ中間ニ挟ミ其舉行ヲ強ユルヲ爲サンヤ。云々

「ミル」曰、復選法ヲ行ハバ人民ノ利益ヲ減少スルノ弊アリ。其不利寧ロ直選ノ危険ヲ避タルノ利ヨリ大ナリ。直選ノ危険ヤ無智不識ノ徒ヲシテ其選舉ヲ誤ラシムルニ在リ、而シテ其利益ヤ人民ヲ

シテ各々公同ノ心ヲ起サシメ、其政治ノ思想ヲ養ハシムルニ在リ。顧フニ復選ノ制ヲ以テ能ク人民公同ノ心ヲ起サシメ其政治ノ思想ヲ發セシムルヲ得ル乎、蓋是レ難カラシ。且夫レ人民ニシテ直接ニ議員ヲ保舉スルヲ得ザレバ必ズ投票ノ事ヲ重ンセズ、隨テ其權利ヲ誤用スルノ虞ナキヲ保セズ。況ンヤ無識ノ徒ニシテ實ニ其選舉ヲ爲スニ意アラシメバ、必其所信ノ人ニ就テ何人カ能ク議員タルニ足ルヲ推問スルナラン。云々

第二 復選法ニ依レバ議員ガ人民ニ對スルノ責任ヲシテ薄弱ナラシムルモノナリ。何トナレバ議員ハ人民ト直接ノ關係ヲ有セズ、其言論行爲ニ付テハ人民ヨリ攻撃ヲ受クルコト薄ク、又代選人ノミヲ籠絡スレバ自己ノ位地ヲ保ツコトヲ得ルガ故ニ、國民一般ニ對シテハ一重ノ障壁ヲ設ケタルガ如ク、自然人民ノ痛痒ヲ感ゼザルノ情況アレバナリ。

(參照)

「ベンサム」憲法論ニ云、復選法ノ弊害ハ原選舉人ニ對スル責任ヲ缺キ、詰問セラル、責任ヲ缺キ逐斥セラル、責任ヲ缺ク。故ニ議員一タビ選舉セラル、時ニハ原選舉人ハ之ヲ監督スルノ權ヲ有セズ。議員ノ放恣ヲ防グノ手段ナク終ニ之ヲシテ失政ニ陥リ又ハ壓制ヲ働カシムルニ至ル。云々
「リーバー」曰、復選ノ制ハ代議士ヲシテ人民ニ對シ直接ノ責任ヲ免カレシメ、又之ニ對シ直接ノ

感情ヲ起サシメズ、隨テ人民ニ利アラザラントス。云々

「ボルク」政治論ニ云、複選法ニ依レバ議員ノ責任ハ全ク消滅ス。何トナレバ人民ハ議員ノ言行ニ就テハ代選人ニ向テ詰問セザルヲ得ズ。然レドモ代選人ヲ詰問スルハ不當ノ事ニシテ、實際行フベカラザルノミナラズ笑フベキノ至リナリトス。

況ンヤ代選人モ亦自ラ議員選舉ノ際誤ラレザルナキヲ保シ難キニ於テヲヤ。云々

第三 複選法ハ少數人民ヲシテ下院議員ヲ選舉セシメ、多數人民ハ却テ下院ニ代表セラル、コトナシ。何トナレバ議員ノ當選ヲ判定スルハ原選舉人ノ總人員ニアラズシテ代選人ノ多數ニ依ルモノナレバナリ。

(參照)

「カートライト」將軍ノ西班牙國會ニ關スル意見ヲ閱スルニ氏ハ複撰法ハ唯巧ミナル術策ト稱スベキモ其實代議政體主義ノ勢價ヲ毀損スルモノナリト攻撃シタリ。其言ニ曰、複選法ニ依レバ一級毎ニ選舉人ノ員數ヲ減少シ、最終ニハ僅々タル代選人ニ由テ議員ヲ選舉スルニ至ラン。而シテ選舉セラレタル代議士ハ原選舉區ノ多數人民ガ選舉スルコトヲ欲セザルノ人ナルコト往々之レアリト云々、此說終ニ行ハレテ千八百七十六年西班牙ノ憲法ニハ複選法ヲ廢シテ直選法ト爲セリ。

「ホエート、ヘス」曰、試ニ一國ヲ百個ノ選舉區ニ分チ、每區平均四千名ノ選舉人アリトシ、國內ニ甲乙ノ二大政黨アリトセヨ。今其五十一ノ選舉區ニ於テハ甲黨主義ノ者當選シ、而シテ四十九ノ選舉區ニ於テハ乙黨主義ノ者當選スレバ、甲黨ハ無論國會ニ於テ多數ヲ占ムルナリ。然ルニ每區投票ノ比例ヲ見ルニ、初メノ五十一區ニ於テハ每區平均二千五百人ハ甲黨ノ爲メニ投票シ、千五百人ハ乙黨ノ爲メニ投票シ、之ニ反シテ次ギノ四十九區ニ於テハ每區平均三千五百人ハ乙黨ノ爲メニ投票シ、其甲黨ノ爲メニ投票スル者ハ僅ニ五百人ニ過ギザルコトアルベシ。然ルトキハ國民中乙黨ノ主義ヲ取ル者ハ二十四萬八千人ニシテ、甲黨ノ主義ヲ執ル者ハ十五萬二千人ナルベシ。是レ乙黨ハ國民中ニ在リテ多數ヲ占ムルコト瞭然タリト雖モ、已ニ國民中ニ多數ヲ占ムル乙黨ニシテ國會ニ在リテハ却テ少數ニ居ルニ非ズヤ。

千八百七十八年米國大統領選舉ニ際シ「ホエート、ヘス」ノ說ヲ其實地ニ見ルコトヲ得タリ。此年ノ大統領選舉ニハ「ヘイズ」及「チルデン」ノ二氏ヲ以テ候補者トセリ。而シテ「ヘイズ」ハ代選人ノ投票八十一ヲ得テ「チルデン」ハ其八十ヲ得タリ。此數ニ依レバ「ヘイズ」ハ無論多數ナレドモ其各州ニ於テ「ヘイズ」ト「チルデン」トヲ選舉シタル原選舉人ノ數ハ、「チルデン」ニ投票シタル者「ヘイズ」ニ投票シタル者ニ超スルコト數十萬人ナルコトヲ發見セリ。此ニ於テ合衆國ノ政治家中ニハ大ニ複選法ノ非ヲ唱へ、彼ノ獨立ノ際名案ト稱セラレタル大統領複選ノ方

法モ「ワシントン」「ゼファソン」「アダムス」三大統領選舉ノ否ハ全ク空文ニ屬シ、今ハ已ニ其效ヲ見ザルモノナリトシ、現ニ上院ニ於テハ其改正方ノ調査ニ着手スルニ至リタリ。

第四 複選法ニ依レバ代選人ハ原選舉人ヨリ少數ナルガ故ニ、選舉ノ際各政黨ハ多數ノ原選舉人ヲ籠絡スルヨリ、少數ノ代選人ヲ籠絡スルノ容易ナルヲ喜ビ、各々自黨ノ議員ヲ下院ニ出サント企テ、頻ニ少數ノ代選人ニ賄賂ヲ與ヘ、若クハ之ヲ教唆恐嚇シテ以テ不當ノ投票ヲ爲サシメ、國會議員選舉ノ目的ヲ誤リ、又國風ヲ懷亂スルニ至ラン。

(參照)

「ベンサム」憲法論ニ云、中間ニ在ル代選人ハ原選舉區ノ人民ヨリ少數ナルガ故ニ、自然邪曲ニ陥リ易シ、邪曲ニ陥リ易キ代選人ノ數僅少ナレバ隨テ之ヲシテ邪曲ニ陥ラシメント欲スル者ノ勢力ヲ強大ナラシムルモノナリ。云々

第五 國會ヲ開ケバ如何ナル寒村僻邑ト雖モ政黨ノ勢力ヲ免ル、コト能ハズ。人民必ズ政黨ノ主義ヲ以テ下院ノ議員ヲ選舉スルニ至ラン。然ラバ原選舉人ガ代選人ヲ選ブノ時ニ當リ、甲政黨ハ其黨ノ代選人ヲ選舉シ、乙政黨ハ其黨ノ代選人ヲ選舉スル勿論ナリ。故ニ原選舉人ガ代選人ヲ選舉シタリタル時ハ、業已ニ議員選舉ノ結果ハ世上ニ表明シタルモノト謂フベシ。何ゾ必シモ其代選

人ヲ一所ニ集合シテ更ニ議員ノ選舉ヲ爲サシムルコトヲ要センヤ。是レ即チ二重ノ手數ト爲シテ毫モ其蓋アルヲ見ザルモノナリ。

(參照)

「ミル」代議政體論ニ云、北米合衆國ノ大統領ハ複選法ニ依リテ選舉セラル、モノナレバ、一般ノ人民ハ大統領ニ對シテ投票スルニアラズ、大統領ヲ選舉スル代選人ニ對シテ投票スルモノナリ。其代選人ハ常ニ豫メ指定シタル候補者ヲ投票スル約束ヲ以テ選舉セラル、モノナリ。人民ハ代選人ヲ選ブニ當リ其人物ノ可否ヲ詮索シテ之ヲ投票スルニアラズ、唯政黨ニ左右セラル、モノナリ。又複選法ノ代選人ハ遍ク國中ヲ探索シテ大統領又ハ下院議員ニ適當ナル人物ヲ見出ス爲メノ目的ヲ以テ選舉セラレタルモノニ非ズ、唯原選舉人ガ已ニ熟知シタル候補者ヲ選ブニ過ギザルノミ。

第六 複選法ノ主義ハ人民幼稚ナルガ故ニ、議員適當ノ人物ヲ選知スルコト能ハズ、往々他人ニ籠絡セラレテ不當ノ人物ヲ選舉スルニ至ラン。故ニ代選人ヲ選ンデ之レニ議員選舉ノ事ヲ委任セシムルニ在リ。然レドモ府縣會郡區町村會ヲ開設シテ地方ノ經濟ヲ議セシムルコトハ明治十二年已來茲ニ九年ノ星霜ヲ經、國會ヲ開設シテ人民ニ參政ノ權ヲ與ヘントスル今日ニ於テ、尙人民ヲ幼稚視シ議員ノ適否ヲ探知スルノ知能ナシト云フガ如キハ、少シク前後矛盾ト謂ハザルヲ得ズ。然リ

而シテ三千五百萬ノ人民中悉ク議員ヲ選舉スルノ知能ヲ具備スルモノニアラザレバ、此際復選論者ガ憂慮スル無知無産ノ人民ハ、選舉法ニ依テ選舉權ヲ與ヘズ、其資格ニハ確實ナル制限ヲ加フルニ於テハ又十分ニ此弊害ヲ癒スルコトヲ得ン。

(參照)

「ウルゼー」政治論ニ云、代理人ヲ選ブニ適シタル人民ニシテ、自ラ下院議員ヲ直選スルニ適セズ、ト斷定スルハ奇怪ノ言ト謂ハザルヲ得ズ。故ニ人民ハ全ク選舉ノ權ヲ有セザル乎、否ラザレバ直接十分ナル選舉ノ權ヲ有スル乎ノ二様ニ在リトス。若シ夫レ憲法ニ於テ此二說ノ間ニ跨レル曖昧ナル代選人ヲ設クルガ如キハ是レ即チ人民ニ信ヲ置カザルモノト謂フベシ。云々

第七 郡會又ハ町村會ニ於テ下院ノ議員ヲ復選セシムルノ事ハ、地方議會ト國會トヲ混同シテ國務ヲ處理スルニ弊害ヲ來スノ恐レアリ。抑國會ハ全國人民ノ選舉シタル代議士ヲ集メテ、國政ニ對シ人民ノ意想ヲ吐露セシムル所ニシテ、全國ノ郡會又ハ町村會ヲ代表セシムル所ニアラズ。何トナレバ郡會又ハ町村會ハ一郡又ハ一町村ノ經濟ヲ議シ、狹隘ナル郡又ハ町村ノ區域ニ於テ施行スル事業ヲ處理スル自治體ノモノニシテ、決シテ一般ノ國政ニ參議スルノ性質ヲ有スルモノニアラザルナリ。故ニ若シ郡會又ハ町村會ヨリ國會議員ヲ選舉セシムルトキニハ、一般ノ政治ト郡村ノ

事務トヲ混同シ、最大ト最小トヲ聯絡シ政務ノ齊整ヲシテ錯雜紊亂セシムルノ恐レアラン。

郡會又ハ町村會ノ議員ニハ其郡村ニ於テ負擔スル土木、教育、勸業等ノ事業ヲ論議シ、其經費ノ徵收方法ヲ決定スルニ適當ナル人物ヲ選舉センコトヲ專一ノ目的トスベキナリ。決シテ國會議員ヲ選舉スルニ適當ナル代選人ヲ要スル所ニアラザルナリ。國會議員ヲ選舉スルト郡村ノ事業ヲ評論スルトハ固ヨリ同一ノ事ニアラザルナリ。

第八 郡會又ハ町村會ヨリ下院議員ヲ復選セシムルノ制度ヲ立テ、國會ヲ開設セバ、國會中ノ政府反對黨ニシテ政府ノ事業ニ妨害ヲ與ヘント欲スルモノハ、必ズ各議員ノ選舉セラレタル郡村ノ議會ト往復通信シ共ニ一黨派ヲ團結シ、入テハ國會議場ニ於テ政府ニ反對シ、出テハ郡村議會ニ於テ地方事務ニ妨害ヲ加ヘ、大小政務ノ在ル所ニ於テ其奸策ヲ逞フセバ、獨リ國政上ノ害ナルノミナラズ、國民一般ノ妨害ヲ生ゼントスルヤ必セリ。已ニ明治十五年東京府會議員ニ於テハ全國ノ府縣會議員ト聯絡シ、彼我相應ジテ大ニ政府ニ迫ラント試ミタリ。故ニ政府ハ同年第七十號布告ヲ以テ府縣會議員ノ互ニ往復通信スルコトヲ禁ジタリ。然レドモ一タビ國會ヲ開設シタル後ハ、國會議員ト地方議會議員トノ往復通信ヲ禁ズルガ如キコトハ恐クハ施行スルニ難カラシ。

第九 政黨ノ便宜上ヨリ之ヲ論ズレバ、少數ノ郡會又ハ町村會ノ議員ヲ籠絡シテ已レノ意想ノ如クナラシムルコトハ、全國一般ノ人民ヲ籠絡シテ已レノ意想ノ如クナラシムルヨリ尤モ容易ナリト

ス。故ニ若シ郡會又ハ町村會ヲ以テ複選ノ場所トナサバ、郡村ノ議會ハ徒ニ政黨ガ國會ノ勝敗ヲ爭フノ場所トナリ、政黨ハ郡村ノ議員ヲ以テ自黨ノ勢力ヲ地方ニ專有スルノ器械トナシ、郡村議員ハ其勢ヒ自ラ郡村ノ事業ヲ棄テテ國會ノ政論ニ着目シ、竟ニ郡村議會ノ本性ヲ忘却シテ國會議員選舉ノ戰場トナスニ至ラシメントス。

第十 複選法ハ今日政治學者ノ駁撃スルノミナラズ、實際ノ政治家モ亦之ヲ擯斥シタリ。

(參照)

「ヘアー」代議政體論ニ云、「カートライト」將軍ハ實際ヲ熟察シ、果斷ナル謀計ヲ以テ西班牙ノ複選法ヲ攻撃シテ遂ニ之ヲ廢止セシメタリ。然ルニ佛蘭西革命ノ時、佛國人民ガ英人「ウキリヤム」ニ佛國選舉法ヲ諮問シタルトキ、「ウキリヤム」頻リニ複選法ヲ佛國ニ施行スベシト勸告シ、又其以前英人「ヒューム」モ亦之ヲ勸告セシコトアリテ、遂ニ今日ニ至ルマデ此誤謬ノ說ヲ傳ヘタルモノナリト。英國ノ政治學者ハ皆明カニ之ヲ擯斥シタリ云々。

「ミル」代議政體論ニ云、複選法ハ英國ノ慣例ニハ未ダ見ザル所ニシテ、英人中ニハ一人ノ贊成者モナカルベシ。然レドモ其方法ハ初讀ノ人ニハ道理ラシク見ヘ、且他國ニモ前例アリ。故ニ政論ノ未定混雜シタル國ニ於テハ、或ハ其萌芽ヲ表面ニ出シテ人心ヲ眩惑セシムルコトモ亦測リ知ルヲ用ヒ郡村ニ複選法ヲ用フルモノトス。

ベカラズ。云々

第十一 今日歐米各國ノ實況ヲ觀察スルニ、直選法ヲ用フルノ國ハ十二アリ。即チ英吉利、白耳義、佛蘭西、西班牙、瑞西、葡萄牙、和蘭、丁抹、日耳曼、伊太利、瑞典、北米合衆國、是レナリ。

而シテ複選法ヲ用フルノ國ハ之ヲ普魯西、諾威ノ二國トス。澳大利ハ市區及商法會議所ニ直選法ヲ用ヒ郡村ニ複選法ヲ用フルモノトス。

以上陳述スル所ニ據レバ、第一、歐米學者ノ理論、第二、歐米各國ノ實況、第三、本邦現時ノ景況モ複選法ノ適セザルコトヲ明示セルモノナリ。故ニ今日日本邦ニ於テ憲法ノ基礎ヲ定ムルニハ第一王權及ビ行政權ヲ鞏固ニシ、政府ニ於テ充分ニ政權ヲ掌握シ、第二、上院ハ貴族ノ元素ト保守ノ主義トヲ以テ之ヲ組織シ、毫モ民主主義ヲ包含セズ、第三、下院ハ充分ナル制限ヲ以テ直選法ヲ施行シ參政ノ權ヲ有スル人民一般ニ選舉ノ權ヲ與ヘラレンコトヲ希望ス。

憲法第六十七條帝國議會ノ解釋

第一 本條ハ廢除削減ト云ヘル作用ノ要件ヲ規定シタルモノナリ。廢除削減ハ議決ノ働ナリ。議決ハ各院各別ニ之ヲ爲スモノニテ（但シ甲院ノ議決ヲ乙院ニ廻シタルトキ乙院ニテ之ヲ修正シタル場合ヲ除ク外）兩院合同シテ之ヲナスモノニアラズ。故ニ帝國議會ハ政府ノ同意ヲ得ズシテ廢除削減スルコトヲ得ズトハ、各議院ニ對シテ其ノ議權ヲ制限シタルナリ。

第二 日本憲法ニ於テ行政部ト立法部トノ關係ヲ規定スル場合ハ、兩議院ト云ハズシテ帝國議會ト云フヲ例トス。

第三 兩議院合議終結ノ上同意ヲ求ムベシトノ說ハ、實際ノ手續ニ於テ政府ノ同意ト 天皇ノ裁可トヲ混同セントスルモノナリ。

政府ハ各院ニ於テ發言ノ權ヲ有ス。故ニ同意又ハ不同意ヲ表スルハ各院ニ於テスルコト政府ノ權利又ハ義務タラザルベカラズ。本條ノ所謂政府ノ同意トハ兩院合議上奏ノ上ノ裁可ト固ヨリ混同スベカラズ。

普漏西貴族院第一讀會模樣

（議長） 左ノ提出ガゴザキマシタ。

ハノーブル州所有地一部讓渡便宜手續ニ關スル法案。

（議長） 私ハ右法案ニ付キ十五名ノ委員會ヲ選定サレンコトヲ動議イタシマシタ（選定サレタラヨカロート存ジマスト云フガ如シ）本院議員中ヨリ異議ノ申出ガゴザイマセンナラバ、私ハ本院ガ十五名ノ委員會ヲ選舉スルコトニ同意サレタルコトト認メマス……私ハ右委員會ヲ閉會ノ後、各部ニ於テ選舉サレ又委員會ハ名簿委員會室ニ參集サレンコトヲ希望イタシマス。

次ニ……………

議員定數其他問目

一 議員定數ノ事。

人口十萬人ヲ目安トシ、一ノ選舉區トナシ、代議士一人ヲ出スノ割合トナスコト、實際ニ於テ都鄙ニ拘ラズ其人ヲ得ベキ乎。

(參照)

- 白耳義 四萬人ニ付一人
- 丁 抹 一萬六千人ニ付一人
- 佛 蘭 西 フロンテント 一區毎ニ一人、但一區人口十萬人ヲ超ユレバ一人ヲ増加ス
- 伊 太 利 一區ニ何人ト定メ人口ニ依ラズ
- 奧 地 利 同 上
- 獨 逸 十萬人ニ付一人
- 荷 蘭 三千人ニ付一人
- 西 班 牙 五千人ニ付一人

- 瑞 典 市區ハ一萬人ニ付一人
郡村ハ四萬人以下ニ一人、四萬人ヲ超ユル毎ニ一人ヲ増加ス
- 瑞 西 一萬人ニ付一人
- 北米合衆國 十三萬人ニ付一人

一 選舉法ニ依リ選舉名簿ヲ作ルト實際ノ選舉ヲ行フト、其間ノ空隙ハ何箇月ヲ要スベキ乎ノ事。選舉名簿一タビ成ルトキハ其一期間ハ確定ノ物トシ、中途ニ變更セシメザルベキヲ以テ、名簿確定ノ日ト實際選舉ノ日トハ可成短縮ナルヲ要ス。然シナガラ事創始ニ係リ、名簿編製ニ付キ多少ノ煩雜ヲ免レザルベキヲ以テ、最初ノ一期ハ何月ノ空隙ヲ與ヘ餘地ヲ爲スベキ乎。

(參照)

白耳義

選舉人名簿ハ毎年之ヲ改正ス。其方法ハ毎年八月一日ヨリ同十四日マデニ邑長之ヲ改正シ、同十五日ヨリ同三十日マデ人民ニ貼示シテ之ガ更正ヲ求メシム。同三十一日ヨリ九月三日マデニ之ヲ更正シ、九月四日ヲ以テ豫定ス。九月四日以後尙ホ其記載方ニ付異議アルモノハ裁判所ニ

出訴セシム。而シテ翌年五月一日マデニ更正ヲ命ズル裁判アレバ邑長之ヲ修正シ、其期限後ハ確定ノモノトシテ變更セズ。六月第二ノ火曜日ニ選舉會ヲ開ク。

獨逸

選舉人名簿ハ獨逸皇帝ヨリ定ムル選舉期日前二十八日間ニ公衆ノ檢閱ニ供ス。故ニ各村里ノ長ハ選舉人名簿ヲ作り、少クトモ八日間公衆ノ檢閱ニ供シ、人民ハ其記載方ニ付故障アルトキニハ、其檢閱ニ供シタル日ヨリ八日間ニ村里ノ長ニ申立之ガ改正ヲ求ム。而シテ其故障ハ檢閱ニ供シタル日ヨリ二十一日間ニ判定シ、其翌日ヲ以テ改正ヲ止メテ確定ノモノトス。

英國ハ毎年六月十日ヨリ選舉名簿ヲ改正ス。其方法ハ市街村落ニ施行スル登記法ニ依ル。

陞授爵ニ付議員資格ノ消滅

木内重四郎

一 地方納稅簿ノ事（國稅各個人ノ納額ノ臺帳）

選舉名簿ハ各個人ノ納稅簿ニ根據ヲ取ラザルベカラズ。選舉ノ資格ニ付爭訟アルトキハ納稅簿ハ第一ノ證據物タリ。而シテ又納稅簿ハ各個人ノ披覽ヲ許スヲ法トセザルベカラズ。從來各地方郡又ハ一戸長管轄ニ納稅簿アリヤ、若之レアラバ其體裁ハ如何。

（參照）

納稅額ヲ以テ選舉人ノ資格ヲ定ムル國ニ於テハ納稅臺帳ニ照ラシ選舉人名簿ヲ作ル（白耳義選舉法第五條、第七條）

一 選舉名簿雛形ノ事

陞授爵ニ付議員資格ノ消滅

從來府縣會議員選舉ニ於テ取扱フ所ノ選舉名簿ノ雛形ハ如何。
右選舉名簿ニハ各人ノ納稅額年令ノ外其職業、履歷ノ大綱、本生ノ地方、轉任ノ年月、納稅ノ細目、納稅ノ各地方ニ跨ル總計ヲ記シアル乎。
前ノ項目ヲ記載セントスルニハ煩雜ニシテ爲シ能ハザルノ事ナル乎。
選舉簿ノ見出法ハ如何。イロハ順ニ記載スル乎又ハ番地ヲ以テ記載スル乎。

一 選舉會ノ事

府縣會議員ノ選舉會ニハ選舉ノ當日雜人ノ混入ヲ防グ爲ニ、選舉人ニ入場證ヲ與フル乎、又ハ入札用紙ヲ以テ證トスルヤ。
選舉會ハ集會人ノ揃ヒタル後ニ呼出ヲ以テ投票セシムル乎。又ハ銘々勝手ニ投票場ニ入り投票シ去ル乎。

選舉人中ヨリ選舉投票検査員ヲ設クルノ事ヲ行ヒ來リタル乎。
若右等ノ細密ナル方法ヲ用ヒザルトキハ當日ノ混雜ト後日ノ爭議ヲ引起スコトナキ乎。

一 投票用紙ノ事

府縣廳ニ於テ用紙ヲ作り、各戸長役場ニ配付シ、戸長ヨリ各選舉人ニ配付スルカ、又ハ各人ヨリ役場ニ出頭シテ請求セシムルカ、又ハ諸印紙ノ如ク政府ニ於テ調製シ賣捌人ニ賣捌カシムルカ、又ハ府縣廳ヨリ用紙ノ紙質寸法書式ヲ示スニ止ムルカ、右現在府縣會議員ニ付テハ如何施行シ居ルヤ。

一、島々ノ選舉投票ノ事

島ノ内一選舉區ヲナスニ足ラザルハ選舉總代人ヲ選ビ、各個ノ投票ヲ封緘シ、委托シテ選舉場ニ出頭セシメ投票セシムベキ乎、右ニ付不都合ヲ見ザルベキ乎。

一 選舉人ハ密封ノ投票ヲ戸長役場ニ差出シ、郡區長ニ於テ之ヲ開封シテ被選人ヲ定ムル事。

一 選舉區内ニハ數千人ノ選舉人アリ、又其人ハ遠隔ノ土地ニ散在スルガ故ニ、之ヲ選舉會毎ニ

一 郡區役所ニ集合セシムルトキニハ混雜ヲ生ジ、且ツ巨多ノ費用ヲ要ス。依テ各選舉人ヲシテ

陸授爵ニ付議員資格ノ消滅

所轄戸長役場ニ出頭シ、密封ノ投票ヲ差出サシム。戸長ハ之ヲ取纏メテ郡區長ニ送付シ、郡區長ハ其管内ノ投票監査人ト立會ヒ被選人ヲ公示ス、此方法如何。

判 決

伯子男爵議員爵位ノ陞授又ハ貶降若クハ褫奪ニ依リ爵位ニ異同ヲ生ズルトキハ當然議員ノ位列ヲ失フモノトス。

理 由

第一 法文ノ精神

貴族院令第一條三項ニ伯子男爵各々其ノ同爵中ヨリ選舉セラレタル者トアリ。而シテ第四條ニモ各々其ノ同爵ノ選ニ當リタル者トアリテ、一定ノ爵ヲ以テ議員タルノ要件トセリ。此ノ條件ニシテ消滅セン乎、議員ノ資格ヲ失ヒ位列ヲ停ムベキハ當然自明ノ結果ナリトス。

夫レ議員ノ其ノ位列ヲ保有スル所以ノ者ハ一定ノ爵(條件)ヲ有スルニ在リ。子爵者其ノ同爵中ヨリ選舉セラレタルトキハ當然子爵議員ナリト雖、一旦伯爵ヲ陞授セラル、トキハ之ヲ目シテ子爵議員ナリトナスコトヲ得ズ。何トナレバ其ノ人既ニ子爵ナラザレバナリ。又之ヲ呼ンデ伯爵議員ト

ナスヲ得ベカラズ。何トナレバ伯爵中ヨリ選舉セラレタルコトナケレバナリ。若シ貴族院令ガ嘗テ伯子男爵全體ノ中ヨリ伯子男爵議員若干名ヲ選舉スベシト命ジ、而シテ選舉ノ手續ニ於テ伯子男爵者ノ協議ニ依リ、便宜ノ爲メ同爵者相合シテ互選シタルトキハ、當選後爵位ノ變動アルモ其ノ伯子男爵タルコトヲ失ハザル限リハ議員ノ位列ヲ失フコトナカルベシ。何トナレバ此ノ貴族院令ハ嘗テ一定ノ爵ヲ以テ標準トセザレバナリ。然レドモ貴族院令第一條三項及第四條ニハ明ニ一定ノ爵ヲ以テ議員タルノ要件トセリ。子爵議員今伯爵ヲ陞授セラレ子爵タル要件ヲ失ハ、安ゾ議員タルヲ得ンヤ。

第二 衆議院議員トノ權衡

均シク是レ立法ノ職務ニ參與スルノ議員タリ、而シテ衆議院議員ニ在リテハ被選ノ資格ヲ失フトキハ之ヲ以テ退職者トナシ(議院法第十五章第七十七條)ナガラ、惟リ貴族院議員ニ在リテハ猶位列ヲ保有スベシトナスハ論理ノ貫通セザルモノト云フベシ。

論者或ハ云ク、議院法第十五章第七十七條ニ於テ各議院議員退職ノ場合ヲ規定セズ、單ニ衆議院議員ノミノ規定ヲ與ヘタルハ、是レ貴族院議員ニ關シテハ反對ノ取扱ニ出デシガ爲ナルコト知ルベシト、論者ノ言非ナリ。夫レ議院法第七十七條ノ目的ハ專ラ衆議院議員ノ場合ヲ規定スルニ在ルマデニシテ、貴族院議員ニ關スル規定ヲ故サラニ排斥シタルニ在ラザルナリ。

議院法第七十七條ニ於テ貴族院議員ニ關スル規定ナキヲ見テ直チニ推測ヲ下シ、立法者ノ精神ハ貴族院議員ニ關シテハ反對ノ規定ヲナスニ在リトスルハ毫モ其ノ理由アルヲ見ズ。夫レ議院法ニ於テ此條ヲ設クルハ、同時ノ發布ニ係ル所ノ衆議院議員選舉法ト相對照シテ效力ヲ有スルモノナリ。當時貴族院令ハ同時ニ發布セラレタリト雖、貴族院議員ノ資格ニ關スル規定ハ未ダ何ノ示定スル所ナシ（同年六月ニ至リ始メテ其ノ規則ヲ發布セラレタリ）之ヲ如何ンゾ衆議院議員ト同一條ニ於テ規定スルコトヲ得ンヤ。況ンヤ貴族院令ハ勅令ナリ、勅令遵由ノ手續ヲ規定スルニ法律ヲ以テスルハ、法律勅令ノ關係上自然ノ體式ニ合フモノニアラズ。故ニ議院法中ニ於テ貴族院議員資格ニ關スル規定ヲ見ザルハ毫モ怪シムニ足ラザルナリ。猶安ンゾ反對ノ論證ヲ以テ之ヲ排斥シタルモノナリトナスヲ得ンヤ。故ニ予ハ論者ノ妄ヲ辯ズルト同時ニ、自然ノ道理タル權衡論ヲ以テ貴族院議員ノ資格ヲ論斷セント欲スルナリ。

反對說ノ妄ヲ辯ズ

反對論者ハ唯貴族院令第四條ニ七ヶ年ノ任期ヲ以テ議員タルベシト規定シタルヲ證據トシテ、被選ノ當時同爵タリシ以上ハ當然議員ニシテ、爾後爵位ノ異同ハ位列ニ效力ヲ及ボサズト主張ス。其

ノ誤謬左ノ如シ。

第一 勅令ノ精神ヲ沒ス。

貴族院令第一條三項ニ於テ、同爵ノ選舉ヲ要件ト定メタルハ其ノ主意同爵者ノ意見ヲ代表シ、利益特權（モシ之アラバ）ヲ保護セシメントスルニ在リ。夫レ國家ヲ先ニシテ一身一家ヲ後ニスベキハ臣民ノ德義ナリトス。況ンヤ堂々タル華胄安ンゾ同爵同族ノ利害ヲ是レ圖リ、國家ノ大病ヲ後ニシテ可ナランヤ。然レドモ立法者此條項ヲ設ケタルノ精神ハ、國政ニ參與スル（主タル目的）ト同時ニ之ニ加ヘテ同爵ノ利害（從タル目的）ヲ保護セシメントスルニ在ルヤ明ナリ。然ラザレバ何ヲ以テ各々同爵中ヨリ選舉セシムルノ必要アランヤ。然ルニ反對論者ノ說ノ如クナラシメバ、子爵中ニ爵位陞授者アリタルガ爲ニ、子爵者ハ同爵ノ利害ヲ保護スベキ代表者ヲ失ヒタルガ上ニ、自カラ異爵者（伯爵）ノ援助ヲナシツツアルノ奇觀ヲ現ハスニ至ルベシ。是レ豈異爵對峙同爵相依ノ精神ニ反スルモノニアラズヤ。

第二 文義ノ解釋ヲ誤マル。

貴族院令第四條ニ七ヶ年ノ任期アルハ單ニ任期ヲ定メタル迄ニシテ、其間資格ノ變動アルトキハ位列ニ變動ヲ及ボスハ勿論ノコトナリトス。若シ法文ガ七ヶ年ノ任期ト定メタル以上ハ、其間資格ニ如何ナル變動アルトモ、議員ノ位列ニ效力ヲ及ボサズト做サバ、資格ハ到底變動ナキモノト斷定

シテ可ナリ。猶何ゾ資格審査委員ヲ置クヲ須キンヤ。又何ゾ資格審査規則ヲ設クルヲ須キンヤ。

第三 既得權ノ誤用。

論者或ハ當選ヲ以テ七ケ年間在任ノ既得權ヲ生ゼリトナス者アリト雖、是レ公權私權ノ區別ヲ誤マルモノトス。夫レ民法上私權ニ於テノミ論ジ得ベキ既得權ヲ以テ公權タル議員ノ位列ニ推論スルコトヲ得ザルナリ。

第四 貴族院令第十條ノ解釋。

論者或ハ貴族院令第十條以外ニ於テハ位列ヲ失フノ場合ナシト論ゼリ。是レ謬論ノミ。夫レ貴族院令第十條ハ卑行失體アル者ヲ除名スル場合ヲ規定セシ迄ニシテ、議員其ノ位列ヲ失フノ場合ハ本條ニ於テ之ヲ悉シタルモノニアラズ。若シ本條以外ニ於テハ一モ位列ヲ失フノ場合ナシトセバ、何ヲ以テ資格審査ノ要アリヤ。然ルニ貴族院令第九條ハ明ニ貴族院ニ與フルニ議員資格審査判決ノ權ヲ以テシタルニアラズヤ。伯子男爵議員タル者一朝議員タルノ要件(資格)ヲ失ハバ、何ヲ以テ第十條ノ規定以外ナリト云フヲ以テ辯護ヲ試ムルコトヲ得ンヤ。

反對說ヨリ生ズル不當ノ結果

反對論ノ根據ナキハ前段述べブル所ニ於テ既ニ明白ナリト雖、假リニ一步ヲ讓リ論者ノ說ヲ認ムルトキハ左ノ不當ナル結果ニ陥ルヲ免カレズ。

第一 華族間ニ於ケル不權衡

伯子男爵議員其ノ爵位ニ異同ヲ生ズルモ猶伯子男爵ノ範圍ヲ出デザルトキハ、議員ノ位列ヲ保有シ得ベシ。然ルニ公侯爵議員其ノ爵位ヲ貶降セラレテ、伯子男爵トナリタルトキハ議員ノ位列ヲ保有スルコトアタハザルベシ。此ノ二者ハ共ニ資格ノ變更ニ基因シナガラ、一ハ位列ヲ失ヒ一ハ之ヲ保有スルハ豈ニ不權衡ニアラズト謂ハンヤ。

第二 瘋癲白癡議員ヲ生ズ。

伯子男爵議員當選ノ後ニ至リ、瘋癲白癡ノ者トナルモ猶位列ヲ保有セシメザルベカラズ。何トナレバ論者ハ資格ノ異同ヲ以テ位列ニ影響ヲ及ボサズトナセバナリ。論者ノ說爰ニ至リテ窺究復々遁辭ナカルベシ。

第三 資格ノ意義

論者云ハク、資格ナルモノハ選舉當時ノ被選資格ヲ指スモノニシテ、其ノ他ニ議員ノ資格ナルモノナシ。被選ノ當時適法ノ被選資格ヲ備ヘ當選シタル者ハ、爾後該資格ニ異同ヲ生ズルトモ是レ法令ノ問フ所ニアラズ。七年間ハ在任ノ權利アル者ナリト。論者ハ貴族院令第九條ニ所謂資格ナル文

字ヲ解釋シテ、選舉當時ノ被選資格ノミヲ指セリト主張スルモ、明治廿三年勅令第二百廿一號（貴族院議員資格及選舉訴訟判決規則）ハ論者ノ解釋ニ反對ノ解釋ヲ下セリ。同勅令第十五條ニ云ハク、議員他ノ議員ノ資格ニ對シ異議ヲ申立ツル者アルトキハ、貴族院伯子男爵議員選舉規則第十八條及貴族院多額納稅者議員選舉規則第六條ニ掲ゲタル期限ノ限ニアラズトアリテ、當選訴訟ニ於テハ出訴期限ヲ開會後十日ト定メタレドモ、資格ノ異議ニ關シテハ何時ニテモ變動アルトキニ及ビテ之ヲ申立ツルヲ許セリ。勅令既ニ斯クノ如シ。論者猶僻說ヲ固執セント欲スルモ得ベケンヤ。

多額納稅者議員トノ關係

伯子男爵議員ノ各爵者中ヨリ選舉セラル、ハ猶多額納稅者議員ノ各府縣ヨリ互選セラル、ガゴトシ。今神奈川縣選出多額納稅者議員ニシテ、本籍ヲ新潟縣ニ移シ、及新潟ニ住居スルトキハ議員ノ位列ヲ失フコト固ヨリ論ヲマタズ。何トナレバ神奈川縣ニ於テ本籍地ヲ占メ、及住居スルコト議員タルノ一要件タレバナリ。子爵議員一朝伯爵ヲ陞授セラレ、猶議員タルコトアラバ是レ新潟縣人ニシテ神奈川縣多額納稅者議員タルナリ、論者ノ妄亦明ナラズヤ。

論者難ジテ云ハク、多額納稅者議員ハ多額納稅者十五人ノ一人タル要件アルガ爲ニ當選シタルナ

リ。然ルニ當選後納稅額減少復タ多額納稅ノ實ナキニ至ルモ、身代限ニ至ラザル限ハ位列ヲ失ハズ（明治廿三年內務省訓令第七號第六條）然ルニ伯子男爵議員ノミ爵位異同ノ爲ニ位列ヲ失フハ、彼ニ寛假シテ此ニ酷薄ナルモノナリト。予之ニ答ヘテ云ハク、內務省訓令ハ理論上正當ナルモノニアラズ。多額納稅者議員家産ヲ蕩盡シテ僅ニ身代限ヲ免カル、ガ如キハ多額納稅者ノ實安クニ在ランヤ。故ニ各府縣ニ於テ多額納稅者十五人ノ範圍外ニ出ル者ハ當然資格ヲ失フ者ト見做スベシ。

嚴密ニ理論ヲ述ブルトキハ前條ノ如シト雖、之ヲ實際ニ徵スレバ理論ノ實行シ易カラザルヲ如何トモスベカラズ。納稅額ナル者ハ年々變動ナキヲ保スベカラズ。各府縣納稅者ノ納稅額ヲ毎年一々精細ニ調査シ、十五人ヲ拔擢スルハ當事者其ノ煩ニ堪ヘザラントス。況ンヤ年々改選ヲ事トスルガ如キハ事實殆ド能ハザルノ事ナリトス。故ニ便宜ノ上ヨリ特例ヲ用キルノ價値アリトス。

又此ノ特例ヲ用キルニハ數多ノ辯護理由アリ。夫レ多額納稅議員ニハ唯多額トアリテ一定ノ納稅額ヲ規定セザルコト、伯子男各爵對峙相犯スベカラザルト同日ノ地ニアラズ。既ニ納稅額ヲ規定セザルヲ見レバ、納稅額ノ變動ヲ問ハザルヤ明ナリ。加之多額納稅者相互ノ關係ノ變動ハ自己一身ノ能ク防ギ得ベキニアラズ。自己如何ニ勤儉ニシテ納稅額ニ異同ヲ生ゼザルヲ圖ルモ、他ニ一朝鉅萬ノ富ヲ博スルノ人生ゼバ、己ハ十五人ノ範圍外ニ出デザルヲ得ズ。是レ其ノ原因ハ己ニ在ラズシテ他人ニ在リト謂フベシ。然ルニ伯子男爵議員ガ爵位ノ異同ノ如キ、若ハ衆議院議員ガ被選資格ヲ失

フガ如キハ、皆其ノ原因自己ニ任リテ他人ト相關連セズ。此ノ二者ヲ以テ直チニ多額納稅者議員ヲ
羈セント欲スルハ抑亦酷ナリト謂フベシ。

故ニ予ハ理論上内務省訓令ニ反對スト雖、實際ハ其ノ然ラザルヲ得ザルヲ知り、又其ノ然カラシ
ムルノ事情アルヲ知ルナリ。

處分

前條詳論スル所ノ理由ニ依リ、子男爵議員中爵位ヲ陞授セラレタル者ハ議長ヨリ直チニ貴族院伯
子男爵議員選舉規則第十六條ニ依リ關員ヲ生ジタル旨ヲ奏上スルヲ至當トス。然ルトキハ勅命ヲ以
テ補缺選舉ヲ行フコトヲ命ゼラルルコト、信ズ。議長ノ奏上ハ法令自然ノ結果ニ從ヒ議長ノ職務ヲ
行フモノナリ。若シ之ニ對シ異議起ラバ次會期ニ於テ院議ヲ以テ決スベキノミ。異議起ラザルニ拘
ハラズ、猶院議ニ依ルニアラザレバ議長之ヲ決行シ得ズト謂ハバ、是レ貴族院令法文ノ精神明白ナ
ルニモ拘ハラズ、自然ノ結果ナリト認メザルノ論ノミ。

憲法上ノ質疑ニ對シ「セジウイク」 博士ノ書翰

貴翰竝ニ英字新聞ノ切抜ヲ欣讀シ、貴問ノ諸點ニ就キ余ノ意見ヲ記述スル爲ニ考慮ヲ費セリ。余ハ
近世ノ憲法ヲ攻究セシト雖モ專ラ政治學上ノ論理ニ關スル著述者トシテ之ヲ研究セシモノニシテ、
意ヲ法理ニ傾ケザリシモノナレバ、憲法上ノ法律論ニ關スル貴問ニ對シ甚ダ答辯ニ躊躇セザルヲ得
ザルナリ。

第一問ハ政理上ヨリ觀察スレバ大ナル必要ヲ認ムルコト能ハズ。何トナレバ該問題ハ寧ろ形式上
ニ屬スルモノナレバナリ。然レドモ聊カ左ニ余ガ意見ヲ提出セントス。

第一問

皇帝ハ議院ヨリ上奏スル毎ニ必ラズ勅答ヲ發スベキモノナルカ、將タ勅答ナルモノハ或ハ勅書ニ
依テ發セラレ、或ハ事實上ノ勅答(即チ議會解散又ハ内閣辭職)トナリテ世ニ顯ハル、モノナルカ。

此問題ニ關シテハ

憲法上ノ質疑ニ對シ「セジウイク」博士ノ書翰

第一 皇帝ハ上奏ニ對シ絶對的ニ勅答ヲ與ヘラルベキ義務ヲ有セザルモノトス。
第二 然レドモ皇帝ニ於テ内閣ヲ辭職セシメ、又ハ議會ヲ解散シ、即チ貴下ノ所謂ル事實上ノ勅答ヲナサル場合ニ於テハ、皇帝ト兩院トノ調和ヲ維持スル爲メニ、上奏ニ對シ正式ノ勅答ト云ハズトモ之ニ類似シタル答案ヲ與フベキモノナリ。
而シテ伊藤伯爵ガ選擇シタル勅答ノ體裁ハ決シテ異常ノモノニハアラザルナリ。

第一一問

議會ノ一院ニ關セズ、無期ノ休會ヲ議決スルコトヲ得ルヤ。

此問題ニ關シテハ余ハ下院獨リ無期ノ休會ヲ議決スルコトハ憲法第四十四條ノ精神ニ反スルモノナリト確信ス。然レドモ英國ノ下院ハ憲法上ノ權利トシテ無期休會ヲナシ得ルノ權ヲ明ニ有スルモノナリ。憲法學ノ泰斗「アンソン」氏其憲法論ニ曰ク。

各院ノ休會ハ他院ニ關係ナク各々自由ニ之ヲ議決スルコトヲ得。

皇帝ハ各院ニ休會ヲ命ズルコトヲ得ズ。又皇帝ハ各院ガ定メタル休會期限前ニ強テ會議ヲ開カシムルコトヲ得ズ。又曰ク各院ハ何時間、何日間、何週間ニテモ休會ヲナシ得ベシ。

余ハ議院ニ於テ休會ヲ議決スルノ權ヲ憲法上ノ規定ヲ以テ制限スルコト能ハザルモノト思考ス。

何トナレバ議院ノ多數若シ休會ヲ欲スル場合ニ於テハ、假令皇帝ヨリ休會ノ議決ヲナスコトヲ制止スルモ、議院ハ決シテ其開期中ハ有益ナル事務ヲナサルベケレバナリ。

勢力アル政治家伊藤伯爵ノ政略ニ關シテ、余ガ如キ日本ノ政況ヲ詳知セザルモノニ於テ敢テ評論ヲ試ムルコトヲ欲セザルナリ。然レドモ官吏ノ俸給十分ノ一ヲ納付セシムルノ政策ニ對シテハ聊カ反對ノ論旨ヲ記述スベシ。此減俸結果タルヤ、將來官吏ニ於テ容易ク之ヲ負擔スルコトヲ得テ苦情ナキカ、又ハ其負擔ニ困難ニシテ苦情ヲ生ズルカノ二者ノ一ニ居ラザルヲ得ザルナリ。今假リニ前説ナラシメンカ、政府反對黨ハ必ラズ謂ハン、官吏ノ俸給ノ過分ナリシコトハ吾黨ニ於テ從來主張セシ處ナリ。而シテ今ヤ官吏ハ容易ク其十分ノ一ヲ納付スルコトヲ承認セリ。是レ我黨ノ意見ノ確實ナルコトヲ證明スルモノナリ。然ルニ若シ之ニ反シテ後説ナラシメンカ、政府ハ官吏ノ忠實心ニ對シテ危險ナル減殺劑ヲ施シタルモノナリト謂ハザルヲ得ズ。然レドモ余ハ日本當時ノ時勢ノ必要ハ此二者ノ反對論ニ勝ルモノアリテ此舉ニ出デタルモノト信ズ。

千八百九十三年四月二十六日

「ケンブリヂ」大學ニ於テ

ヘンリー、セジウイク

金子堅太郎君

貴下

帝國議會開院式勅語

第一回 (明治二十三年十一月二十九日)

朕貴族院及衆議院ノ各員ニ告グ。

朕即位以來二十年間ノ經始スル所、内治諸般ノ制度粗々其綱領ヲ舉ゲタリ。庶幾クハ

皇祖皇宗ノ遺德ニ倚リ、卿等ト共ニ前ヲ繼ギ後ヲ啓キ憲法ノ美果ヲ收メ、以テ將來ニ益々我方帝

國ノ光烈ト我臣民ノ忠良ニシテ勇進ナル氣性トヲシテ中外ニ表明ナラシムルコトヲ得ム。

朕又夙ニ各國ト盟好ヲ修メ、通商ヲ廣メ、國勢ヲ振張セムコトヲ期ス。幸ニ締約諸國ノ交際ハ益

益親厚ヲ加ヘタリ。

陸海ノ軍備ハ内外ノ平和ヲ保全スル爲メニ歲ヲ積ミテ完實ヲ期セザルベカラズ。

明治二十四年度ノ豫算及各般法律案ハ朕ガ之ヲ國務大臣ニ命ジテ議會ノ議ニ付セシム。朕ハ卿等

ガ公平慎重以テ審議協賛スル所アルコトヲ期シ、併セテ將來ニ繼グベキノ模範ヲ貽サムコトヲ望ム。

第二回 (明治二十四年十月二十六日)

朕貴族院及衆議院ノ各員ニ告グ。

朕茲ニ親臨シテ帝國議會第二期開會ノ式ヲ舉グ。

朕明治二十五年ノ豫算及各般ノ法律案ハ國務大臣ニ命ジテ之ヲ議會ノ議ニ付セシム。

朕既ニ我ガ帝國ノ光輝アル憲法上ノ進行ヲ誤ラザルコトヲ嘉シ、更ニ卿等ガ帝國ノ隆昌ト人民ノ幸福トヲ以テ目的トシ、和衷協同シテ益々其ノ公務ヲ竭サムコトヲ望ム。

第三回 (明治二十五年五月六日)

朕貴族院及衆議院ノ各員ニ告グ。

朕茲ニ親臨シテ開院ノ式ヲ行フ。

明治二十五年ノ歳入歳出ハ既ニ前年度ノ豫算ニ依ラシメタリ。仍國務大臣ニ命ジテ緊急ナル追加豫算ヲ以テ議會ノ議ニ付セシメ、茲ニ必要ナル法律案ヲ提出セシム。

惟フニ各般進張ノ事業ハ實ニ國家ノ隆運ト關係ヲ相爲ス。朕ハ卿等ガ慎重討議シ以テ協賛ノ任ヲ完クセムコトヲ望ム。

第四回 (明治二十五年十一月二十九日)

朕貴族院及衆議院ノ各員ニ告グ。

朕茲ニ親臨シテ開院ノ式ヲ行フ。

朕ハ國務大臣ニ命ジテ明治二十六年ノ豫算及必要ナル法律案ヲ議會ニ提出セシム。

朕ハ卿等ガ國家ノ要務ニ對シテ和衷協賛ノ任ヲ竭サムコトヲ望ム。

第五回 (明治二十六年十一月二十八日)

朕貴族院及衆議院ノ各員ニ告グ。

朕茲ニ親臨シテ帝國議會開院ノ式ヲ行フ。

朕ハ國務大臣ニ命ジテ行政諸般ノ整理ヲ經テ調整シタル明治二十七年ノ豫算及必要ナル法律案ヲ提出セシム。

朕ハ卿等ガ國家ノ要務ニ對シ協賛ノ任ヲ竭サムコトヲ望ム。

第六回 (明治二十七年五月十五日)

朕貴族院及衆議院ノ各員ニ告グ。

朕茲ニ親臨シテ開會ノ式ヲ行フ。

朕ハ國務大臣ニ命ジテ急要ナル追加豫算及法律案ヲ提出セシム。

朕ハ卿等ガ國家ノ要務ニ對シ審議ヲ盡シ協贊ノ任ヲ致サムコトヲ望ム。

第七回 (明治二十七年十月十八日)

朕貴族院及衆議院ノ各員ニ告グ。

朕茲ニ臨時帝國議會ヲ召集シ、特ニ國務大臣ニ命ジテ刻下ノ急要ナル陸海軍費ニ關スル議案ヲ提出セシム。

朕ハ清國ガ帝國ト共ニ東洋ノ和平ヲ保持スルノ任ヲ忘レ、遂ニ今日ノ事局ヲ見ルニ至リタルヲ憾トス。然レドモ釁端既ニ開ク。交戦ノ目的ヲ達セズムバ以テ止ムベカラズ。朕ハ帝國ノ臣民ガ一致和協朕ガ事務ヲ獎順シ、全局ノ大捷ヲ以テ早く東洋ノ平和ヲ恢復シ、以テ國光ヲ宣揚セムコトヲ望ム。各員其レ旃ヲ勗メヨ。

第八回

朕茲ニ帝國議會ノ開院式ヲ行ヒ、貴族院及衆議院ノ各員ニ告グ。

朕ハ國務大臣ヲシテ明治二十八年度ノ豫算及其ノ他ノ必要ナル議案ヲ提出セシム。

朕ガ外征ノ師ハ每戰捷ヲ奏シ漸次敵地ニ進入ス。今ヤ嚴冬ニ際ス、沍寒ヲ冒シ艱苦ヲ嘗メ益々其ノ勇武ヲ著ハセリ。中立列國ノ交際ハ益々親睦ヲ敦クシ朕ガ宿望タル條約改正ノ業既ニ成績ヲ告グルモノノ外仍ホ協商ニ在ルモノ亦均シク其ノ歩ヲ進ム。

朕ハ此ノ光輝アル進運ニ膺リ國度ノ文明ヲ躋シ、祖宗ノ遺烈ニ頼リ有終ノ美ヲ濟サムコトヲ欲ス。卿等其レ能ク中外ノ大勢ヲ察シ、上下和協ノ實ヲ舉ゲ以テ朕ガ望ム所ニ副ヘヨ。

第一回議會衆議院ニ於ケル總理大臣ノ演說

總理大臣(伯爵山縣有朋君)

二十三年十二月六日

諸君我ガ

天皇陛下ハ至仁ナル聖慮ニ依リマシテ、曩ニ千載不磨ノ大典ヲ立テサセラレ、茲ニ諸君ト相會スルヲ得タルハ誠ニ國家ノ爲慶賀ニ堪ヘザル次第御座キマス。又本官ノ光榮トスル所デ御座キマス。本官ハ今内外ノ政務ニ就キマシテ、諸君ニ其ノ方針ノ在ル所ヲ陳述シマスノ機會ニ遭遇致シマシタルガ、既ニ政府ノ執ル所ノ政務ニ於キマシテハ、先日開院ノ勅語ニ於キマシテ其ノ大體ヲ明示致サレマシタ以上ニ、今更ニ本官ガ事々シク辯明致シマスル必要ヲ見マセヌデ御座リマス。サリナガラ二三ノ要點ニ就キ其ノ概略ヲ陳述致シマシテ、諸君ノ公平ナル判斷ヲ煩ハサンコトヲ望ミマス。顧ミルニ舊幕府ガ鎮港ノ政略ヲ執リタル以來、我ガ國三百年間ノ無事太平ヲ保續致シマシタニ相違御座リマセヌデ御座リマス。併シ此ノ政略ハ宇内ノ大勢ニ背馳致シマシテ、我ガ國三百年間ノ進

化ヲ遅ク致シマシタル結果ヲ生ジタルハ甚ダ遺憾ノ至リニ存ジマフ。

明治大政維新ノ時ニ膺リマシテ、世運ノ變遷ヲ察シテ一旦此ノ方向ヲ變ジマスルト、過去數百年間滯ル所ノ負債ヲ償還セネバナラスト云フ事ニ氣ガ附キマシタ故ニ我々ガ此ノ短日月ノ間ニ於キマシテ其ノ負債ヲ償還スルコトニ努力致シマシタデ御座リマス。然ルニ僅ニ二十有數年間ノ短日月ナルガ故ニ、今日ニ至ルマデ我々諸君ト共ニ背上ニ負擔スルトコロノ至重ノ義務ハ其ノ半ヲ終フルニ至リマセヌデ御座キマス。併シナガラ幸ニ上ハ 聖天子ノ宏遠ナル皇謨ト、下ハ先進諸氏ノ翼贊計畫スルトコロニ依リマシテ、其ノ大體ノ標準ヲ一定スルコトヲ得マシタ。故ニ漸次其ノ順序ヲ追フテ今日マデノ運ビト相成リマシタ次第デアリマス。勿論政府ノ實務上ニ就キマシテハ、或ハ之ヲ緩ニシ、或ハ之ヲ急ニシ、又ハ此ノ法ヲ執リ、又ハ此ノ法ニ依ルコトニ至リマシテ、人々各々其ノ見ルトコロニ依リマシテ各々出入異同アルコトハ是數ノ免カル可カラザルトコロト存ジマス。今其ノ小異ハ姑ク擱キマシテ、施政ノ大局上ニ就イテ觀察ヲ下ストキハ、我々一樣ニ同一ノ軌轍ノ上ニ進ミ行キツツアリ、決シテ此ノ一大環線ノ外ニ脱出スルコトハ致シマセヌ。是ハ本官ガ斷言スルニ更ニ憚カラヌトコロデアリマス。

舊政府ヨリ二十四年度ノ總豫算ヲ提出致シマシタルハ、此ノ歲計豫算ニ就キマシテ我々憲法上及ビ法律勅令ヲ奉事スルノ義務者デ御座キマス。此ノ歲計豫算ニ就キマシテ本官ハ諸君ガ慎重公平ナ

ル審議翼賛ノアルコトハ信ジテ疑マセヌ。豫算帳ニ就キマシテ最歳出ノ大部分ヲ占メルモノハ、即チ陸海軍ノ經費デ御座キマス。是ニ就キマシテハ本官ガ政府ノ觀ル所ニ就イテ將來ノ爲ニ一言ヲ吐露シテ諸君ノ注意ヲ冀ハンコトヲ望ミマス。抑々今ノ時ニ方リマシテ國家ノ最急務トスル所ノモノハ行政及地方ノ制度ヲ整理シ、運用ヲ敏活ナラシメルコトデアル。又農工及通商ノ業務ヲ獎勵作進シテ、國ノ實力ヲ養成致スコトガ最必要ノコトト思ヒマス。サレバ内治即内政ハ一日モ忽ニナラヌコトハ、勿論申スマデモナイコトト存ジマス。又是ト同時ニ國家ノ獨立ヲ維持シ、國勢ノ伸張ヲ圖ルコトガ最緊要ノコトト存ジマス。此ノ事タル諸君及我々ノ共同事務ノ目的デアツテ、獨政府ノナスベキコトデ御座キマス。將來政事上ノ局面ニ於テ何等ノ變化ヲ現出スルモ、決シテ變化スルコトハ御座キマスマイト存ジマス。大凡帝國臣民タル者ハ協心同力シテ、此ノ一直線ノ方向ヲ取ツテ此ノ共同ノ目的ニ達スルコトヲ誤ラズ、進マナケレバナラヌト思ヒマス。蓋シ國家獨立自營ノ道ニ二途アリ。第一ニ主權線ヲ守護スルコト、第二ニハ利益線ヲ保護スルコトデアル。コノ主權線トハ國ノ疆域ヲ謂ヒ、利益線トハ其ノ主權線ヲ保護スルコトデアル。其ノ主權線トハ國ノ疆域ヲ謂ヒ利益線トハ其ノ主權線ノ安危ニ密着ノ關係アル區域ヲ申シタノデアル。凡國トシテ主權線及利益線ヲ保タヌ國ハ御座キマセヌ。方今列國ノ間ニ介立シテ一國ノ獨立ヲ維持スルニハ、獨リ主權線ヲ守護スルノミニテハ、決シテ十分トハ申サレマセヌ。必ズ利益線ヲ保護致サナクテハナラヌコトト存

ジマス。今果シテ吾々ガ申ス所ノ主權線ノミニ止ラズシテ、其ノ利益線ヲ保ツテ一國ノ獨立ノ完全ヲナサントスルニハ、固ヨリ一朝一夕ノ話ノミデ之ヲナシ得ベキコトデ御座キマセヌ。必ズヤ寸ヲ積ミ尺ヲ累ネテ漸次ニ國力ヲ養ヒ、其ノ成績ヲ觀ルコトヲ力メナケレバナラヌコトト存ジマス。即豫算ニ掲ゲタルヤウニ巨大ノ金額ヲ割イテ陸海軍ノ經費ニ充ツルモ、亦此ノ趣意ニ外ナラヌコトト存ジマス。寔ニ是ハ止ムヲ得ザル必要ノ經費デアル。

以上演ベマスル所ノ數個ノ要點ハ、假令小異ハアルトモ、其ノ大體ニ就キマシテハ諸君ニ於テ必ズ協同一致セラレンコトハ本官ハ信ジテ疑ヒマセヌ。大凡是等ノ事ニ就キマシテ今申述ベマスル様ニ成ルベクハ速ニ拂盡サネバナラヌ共同義務デアル。然ラバ此ノ重大ノ義務ヲ盡サンガ爲ニハ我々境遇ニ伴フ所ノ一個ノ利益ヲ犧牲ニ供シテ、公平無私ニ相俱ニ胸襟ヲ押開イテ腹臆ナク相談シ相議スルニ於テハ、互ニ其ノ意見ヲ一致スルコトニ於テ決シテ難キコトハナイコトト存ジマス。本官ハ幸ニ諸君ノ了察アランコトヲ望ミマス。

第二回議會衆議院ニ於ケル總理大臣ノ演說

內閣總理大臣(伯爵松方正義君)

諸君第二期帝國議會ノ開クルニ當リマシテ、諸君ト相見ルノ榮ヲ得マシタハ實ニ本官ノ幸デアリマス。

政府ハ維新以來文明ノ針路ニ進行シテ一定動カザル政略ヲ執ツテ居ルコトハ今更喋々ヲ要セズトモ諸君御承知ノコトト信ジマス。

締盟各國トノ交際ハ年ヲ逐フテ親密ヲ加フルコトハ諸君ト俱ニ國家ノ爲メニ賀シマス。

條約改正ノ事ハ政府ガ二十餘年來計畫シツツ、實ニ一日モ打棄テ、ハ置キマセヌガ、未ダ成功ノ時機ヲ得ルニハ至リマセヌ。併シナガラ政府ハ國家ノ權利ト利益トヲ重ンジ、百難ヲ排除シテモ必ズ宿望ヲ遂グル覺悟デアリマス。

國運ノ進歩ハ中途デ停滞シ、又ハ退縮スベキデハアリマセヌ。近時百般ノ事業中殊ニ貿易ノ伸張

運輸交通ノ發達ト海陸軍備ノ非常ニ擴張セシトニ由リマシテ、苟モ宇内ニ一國ノ獨立ヲ保ツモノハ皆此針路ニ向ツテ進行ヲ競ヒマスルハ諸君モ御承知ノ通デアル。

我國モ亦一國ノ名譽ヲ保チ各國ト競争場裡ニ馳驅致シマス以上ハ、今日國力ノ許ス限りハ國防ト國家經濟トヲ目的ト爲シ、其事業ノ内最モ急ナルモノヲ選ミ決行シナケレバナリマセヌ。決シテ一日モ緩漫ニ付シ置クコトハ出來マセヌ。國防ノ必要ニ附キマシテハ先ヅ陸軍デハ兵器彈藥ノ改良、砲臺ノ建築、海軍デハ船艦ノ製造ガ最モ急要デアリマス。

然ルニ兵器船艦ノ製造ニ最モ必要ノ材料タル鋼鐵ハ皆海外ヨリ輸入ヲ仰ガネバナリマセヌ。夫ガタメニ年々巨萬ノ金ヲ海外ニ抛ツノミナラズ、一旦事アルトキハ此必要缺クベカラザル材料ヲ輸入スルノ途忽チ絶スルノ次第ニテ、實ニ兵備上ノ危險經濟上ノ損害共ニ甚シキ譯故、政府ハ此危險ト損害トヲ避クルタメ、新ニ一ノ製鋼所ヲ創立スルノ議ヲ決シマシテ、其經費ヲ二十五年度ノ豫算ニ組込ミ置キマシタ。

鐵道ハ國防上並ニ經濟上ノ點ニ於テ之ヲ國有ト爲シ、以テ其延長及完成ヲ圖ルコトハ今日ノ時勢ニ最モ適切ナルモノト認メマス。依テ政府ハ參謀本部ト鐵道廳トニ調査ヲ命ジマシテ、其報告書ニ依ツテ計畫ヲ定メマシタ。夫ニ就キ必要ナル法律案ハ不日議會ニ提出シテ諸君ノ協賛ヲ求ムル筈デアリマス。

政府ハ又深ク經濟上ノ發達ニ注意ヲ爲シ、益々實業ノ進歩ヲ圖ル積リデ、本年提出致シマスル信用組合法、農會法ノ如キハ即チ此目的ヲ達スベキ計畫ノ一部デアリマス。

治水ノ事業ハ人民ノ生命財產ニ關係スル最モ緊要ノ事ニテ、一年後クレマスルト、或ハ十年ノ大害ヲ遺シマス故、政府ハ河川修築ニ要スル經費ヲ増加シテ現在施行中ノ工事ヲ早ムルト同時ニ、廣ク精密ノ調査ニ著手シ全國一般ノ計畫ヲモ定ムル考デアリマス。

從來地方費支辨ノ監獄費ハ、以後國庫ノ負擔ニ移スコトニ決定シテ、既ニ其法律案ヲ提出致シマシタ。全體地方ノ財源ハ各々其地方ノ生産力ヲ發達シ得ベキ様ニ使用セシムルガ必要ノミナラズ、此監獄費ハ去ル十三年中一時財政上ノ必要ニヨリマシテ國庫ヨリ地方費ノ負擔ニ移シタルモノ故、財政稍々整理シタルノ今日、再ビ國庫ノ支辨ニ復シマスルハ固ヨリ當然ノコトト考ヘマス。

抑々國運ノ進歩ニ伴ヒ經費ノ次第ニ増加スルハ避クベカラザル結果デアリマス。去ナガラ進歩ノ事業ヲ施行シマスルニハ常ニ財政ノ如何ヲ顧ルコトガ甚ダ緊要デアアル。夫故ニ是迄モ十中ノ半バサラ事業ヲ決行スルコトノ出來ザリシハ常ニ遺憾ニ思ヒマシタガ、幸ニ此二三年、殊ニ本年度ニ於テハ經費ノ節減ニ依リ歲計ノ餘裕ヲ生ジマシタ故、此餘裕金ハ主トシテ前ニ陳ベマシタ必要ノ事業費ニ使用スルコトガ出來マス。

諸君、幸ニ二十五年年度ノ豫算ヲ公平慎重ニ審査ヒラレマシタナラバ、其編製ノ主義ハ本官ガ前ニ

陳述致シマシタル施政ノ方針ニ戻ラナイコトヲ御認メナサルデゴザリマセウ。政府ガカメテ經費ヲ節シ、必要ノ事業ヲ舉ゲントスルノ意ハ此豫算ノ上デ證明シ得ラレマセウト信ジマス。諸君政府ハ外ニ向ツテハ益々和親ヲ厚クシ、國權ヲ擴張シ、内ニ在ツテハ國防ヲ充實シ實業ヲ獎勵シ、國家經濟ノ發達ヲ保シ、又常ニ財政ノ安全ヲ維持スル覺悟デアリマスル。

諸君、諸君ト相共ニ提契シテ益々

皇室ノ尊榮ヲ加ヘ、人民ノ幸福ヲ進メ、國家ノ富強ヲ致シ我

帝國ノ光輝ヲ中外ニ發揚センコトハ本官ニ於テ最モ切望スル所デゴザキマス。

第三回議會衆議院ニ於ケル總理大臣ノ演說

內閣總理大臣(伯爵松方正義君)

諸君、今回帝國議會ニ提出スル議案ハ事後承諾ヲ求ムル事件ノ外、府縣監獄費國庫支辦法案、鐵道公債法案、私設鐵道買收法案等ノ法律案ト、二十五年ノ追加豫算等デアリマス。

客年十月愛知岐阜兩縣震災ノ節、救濟並ニ堤防工事費トシテ施行シマシタ豫算外ノ支出ト、其後右兩縣並ニ富山福岡二縣ノ土木費補助トシテ施行致シマシタ豫算外支出トハ併セテ議會ノ承諾ヲ求メマス。

明治二十四年勅令第四十六號モ亦憲法上ノ命ズル所ニ從ヒマシテ議會ニ提出致シマス。

監獄ノ費用ハ明治十三年前ニハ國庫ノ負擔デアリマシタカラ、當時財政整理ノ必要ニ依リマシテ地方稅ノ支辨ニ移シタナレドモ、財政ノ稍整理セル今日ニ於キマシテハ元ノ如ク國庫ノ支辨ニ復スルガ當然デアアル。サウシテ之ガタメ各地方人民ノ負擔ヲ弛ルメ、生産力ヲ發達シ、又地方政務ノ改

良ヲ促シ、其利益ノ及ブ所ハ決シテ少クデハアリマスマイ。

次ニ鐵道ノ事デアリマスガ、鐵道ノ經濟上軍事上共ニ重大ナル關係ヲ有シ、文明ノ利器富強ノ要具タルコトハ世人一般ノ是認スル所デアリマス。政府ハ疾クヨリ鐵道ノ敷設シナケレバナラヌコトニ著眼シテ、必要ナル線路ノ工事ヲ起シ、又ハ民設ヲモ許可シテ其進歩ヲ圖リマシタガ、創業以來幾多ノ星霜ヲ經テ今日ニ至ルモ、既ニ出來上ツタ線路ト現ニ敷設中ノ線路トヲ合セテモ尙ホ千六百哩内外ニ過ギマセヌ。殊ニ現在ノ私設會社中ニハ往々豫定ノ如ク工事ニ著手シナイモノモアリ、又半途ニシテ工事ヲ中止シタルモノモアル位デ、既ニ工事ノ成就シタ會社デモ將來益々諸般ノ改良ヲ加ヘテ、經濟上ナリ軍事上ナリ完全ナル鐵道ノ效用ヲ爲サシムルコトハ到底望ミガアリマセヌ。

既往ノ實驗ニ徴シ、現今ノ形勢ニ照シテ考ヘマスルニ、鐵道事業ヲ專ラ營利ヲ主眼トスル私設會社ニ任セ置キマシテハ、國家經濟上軍事上公共ノ利益ヲ進ムルコトガ甚ダ困難デアアル。是レ政府ガ鐵道ヲ國有トシテ大ニ其擴張完成ヲ圖ルノ計畫ヲ定メタ所以デアリマス。此計畫ヲ實施スルニハ私設鐵道ヲ買收シテ十分ニ線路ヲ連絡シ、又其管理ヲ統一シナケレバナリマセヌ。畢竟、私設鐵道買收ノコトハ鐵道ノ擴張ニ伴フ必要ノ手段デアリマス。

二十五年ノ豫算ハ勅令第二十八號ヲ以テ憲法第七十一條ニ據リ、前年度豫算ノ施行ヲ命ゼラレマシタ。仍テ目下緊急ノ事業ニ屬スル經費ハ追加豫算トシテ特ニ議會ノ協贊ヲ求メマスルガ、其中

重ナルモノハ専ラ國防ニ關スルモノデ、則チ新タニ軍艦ヲ製造シテ海軍ノ勢力ヲ維持スルコト、製鋼所ヲ設置シテ造船製砲其他軍事上必要ノ鋼材ヲ製出スルコト、東京灣砲臺建築ノ年期ヲ引上テ帝都ノ關門トモ云フベキ港灣防禦ノ速成ヲ期スルコト、連發銃竝ニ綿火藥ヲ製造シテ兵器彈藥ノ改良ヲ施スコト等ニ必要ノ經費デアリマス。

抑々國防ノ一日モ忽セニ致サレヌハ多言ヲ要シマセヌ。唯之ヲ充實スルニハ莫大ノ費用ヲ要シ、財政ノ許サバルアツテ十分ノ計畫ヲ立ツルコトヲ得マセヌノハ甚ダ遺憾トスル所デアリマス。併シ以上述べタルモノハ急務中ノ急務故少クトモ是丈ケハ一日モ早ク之ヲ施行シナケレバナリマセヌ。

諸君、今日宇内各國ガ互ニ富強ヲ競ヒ雄長ヲ爭フ有様ハ諸君ノ熟知セラル、通デアツテ、我國ハ各國ニ對シテ如何ナル境遇ニ在ルカ、又如何ナル關係ヲ持ツテ居ルカノ問題ニ就キマシテハ、今茲ニ本大臣ガ明言セズト雖モ滿場ノ諸君ト感ヲ同フスルコト、信ジマス。故ニ今日ノ時勢ニ必要ナル事業ハ國家經濟ナリ國防ナリ出來得ル丈ケ經營シマシテ、我國力ヲ發達シ、我國權ヲ擴張スル目的デアリマス。諸君ノ公明ナル協賛ヲ得マシテ此進歩ノ事業ヲ成就シ相共ニ國家ノ隆盛ヲ圖リ、國利ノ幸福ヲ進ムルコトハ本大臣ノ切望スル所デアリマス。

第二議會解散ニ關スル上申書

惟ミルニ衆議院ノ解散ヲ命ズルハ政府議院ヲ以テ民信ヲ失シ、輿論ヲ代表スルモノニアラズトナスノ場合ニ於テシ、又ハ新議院ガ必ズ政府執ル所ノ政策ヲ助クルノ勝算アル場合ニ於テスベシ。然ラザレバ大權ヲ濫用シテ徒ニ世論ノ攻撃ヲ受ケ、政府ノ威信ヲ失墜シ、立憲制度ノ運用ヲ誤ルノ弊終ニ善美ノ欽定憲法ヲシテ死文廢殘タルニ終ラシメントス。解散豈ニ輕舉濫用ヲ容ルベケンヤ。今ヤ政府ハ既ニ議院ヲ解散セラレタリ。而シテ大成會等ノ如キ從來政府ヲ助ケタル議員ノ言ヲ聞クニ彼等ハ歸縣シテ新選舉ヲ爭フノ念慮ナシト。何トナレバ反對黨ノ攻撃ハ四方ニ起ルニ係ラズ、彼等ヲ贊助スルモノ甚少ナク、且ツ政府モ亦彼等ニ對シ十分ナル勢援ヲ與ヘザリシト。故ニ新議院ニシテ若シ舊議院ニ異ナルコト莫カラシメンカ、即チ政府ハ民心ノ向背ヲ料知スルノ識ナキノ譏ヲ受クルニアラザレバ、則チ必勝ノ成算ナクシテ開戦シタルノ責ヲ免カルベカラズ。政府焉ンゾ超然卓立シテ以テ改選ノ成敗ヲ傍觀スベケンヤ。宜シク速ニ方ヲ案ジ、計ヲ策シ、之ヲ實際ニ施シテ以テ成敗利鈍ヲ改選ノ一舉ニ試ムベシ。決シテ新議院ヲシテ舊議院ノ繼續者タルノ陋態ヲ現出セシムベカラズ。又決シテ大權ノ發動ヲ數次ニシテ立憲制度ヲ弄視スベカラズ。不肖中心改選ノ成敗ヲ念ヒ、

憂慮措クアタハズ。叩リニ自ラ憚ラズ敢テ卑見ヲ略記シテ之ヲ閣下ニ獻ズ。若シ深謀高圖ノ少補タルヲ得バ豈ニ膏ニ不肖ノ光榮ノミナランヤ。

一、電信ヲ以テ速ニ各府縣知事ノ上京ヲ命ズル事、警部長其他政黨ノ事情ニ通曉シタル吏員ヲ隨行セシムル事。

二、知事ヲシテ其管内各選舉區ノ形勢ヲ詳陳セシメ、依リテ以テ全國各政黨色別ケノ地圖ヲ調製シ反對黨及我黨ノ多少及其ノ現況ヲ表示シ參考ノ資ニ供スル事。

三、陽ニハ知事ヲ内閣又ハ内務省ニ召集シ、奏議ノ主旨ヲ詳説シ政府ノ方針ヲ明示スル事。

四、陰ニハ各大臣三々五々其ノ近親ノ知事ヲ招キ方略ヲ援クル事。

五、右ノ計畫成リタル後始メテ選舉ノ期日ヲ定ムル事、其ノ計畫未ダ成ラザル間ハ輕卒ニ期日ヲ定メザルヲ可トス。

六、知事歸縣後各大臣受持區域ヲ定メテ全國各地ヲ巡廻スル事。

七、其ノ巡廻地ハ政黨色別ケ地圖ニ基キ、反對黨ノ勢力強大ニシテ、迎モ勝算ナキ地方ハ之ヲ避クルヲ可トス。是レ反對黨ヨリ妨碍侮辱ヲ受クルアリ、依テ以テ大臣ノ聲望ト政府ノ威信トヲ傷クルノ恐レアレバナリ。

八、之ニ反シ我黨ノ勢力盛ナル地方ハ之ヲ巡視シ、到ル所人民ノ歡迎ヲ受ケ、依リテ以テ政府ノ

聲望ノ盛ナルヲ示シ、反對黨ノ氣焰ヲ鎮壓スル事。

九、巡廻地ニ於テハ公開ノ演説ヲ避ケ、懇談會又ハ小宴ヲ設ケ務メテ奢侈ヲ去リ、質素ヲ旨トシ懇切ニ政府ノ方針ヲ諭示スル事。

十、此ノ巡廻ハ專ラ政府ニ倚賴セザルヲ得ザル事業アル地方ニ於テスベシ。例セバ關西、九州、山陽、水戸、北陸諸鐵道所在地ノ如キハ利益上其ノ買収ヲ賛成セザルヲ得ザルニ依リ、此ノ點ヲ以テ我黨ノ議員ヲ選出スル事。

十一、巡廻中ニ鐵道重役及大株主ニ説諭シ、其ノ味方ヲ募集シ、依リテ以テ我黨ノ勢力ヲ増加セシムル事。

十二、右ノ巡廻ト同時ニ舊藩主ニ依頼シ、募參又ハ歸省ト號シ舊領地ニ赴カシメ政府ノ方針ヲ諭示シ、我黨ノ議員ヲ選出セシムル事。

十三、舊藩主ニ隨從セシムルニハ其ノ藩出身ノ官吏ヲ以テシ、又ハ家職中ニ於テ政治ニ通曉スル者ヲ以テスル事。

十四、若シ舊藩主ノ應援ニ依テ選舉ニ見込アルトキハ、其ノ運動費ノ如キハ其ノ實ハ政府ヨリ補助スルモ、其ノ名ハ舊藩主ノ出金ト號シ密カニ下渡ス事。

十五、募參又ハ歸省ト號シ、有爲ノ官吏ヲ其ノ郷里ニ差遣シ、地方ノ有志者ニ遊説シテ我黨ノ議

員ヲ選出セシムル事。

十六、知事郡長等ハ固ヨリ表面ニハ選舉ニ干渉スルコトヲ得ズト雖モ、法規ニ背戾セザル範圍内ニ於テ我黨選出ニ盡力セシムル事。

十七、右ノ如クスルト同時ニ、一方ニ於テハ反對黨ノ勢力ヲ減少セシムルコトヲ勉ムベシ。反對黨ガ壯士ヲ用キテ選舉人ヲ脅迫シ、又ハ賄賂ヲ使用スル等ノ場合ニ於テハ、警察ノ力ヲ以テ之ヲ鎮遏スルコトニ盡力スベキ事。

十八、選舉結了ニ至ルマデハ地方ノ政黨事情ト將來選舉ノ見込ニ付、每週知事ヨリ内申セシメ、其ノ情況ニ應ジ隨時計畫ヲ定メ、大臣自ラ出張シ又ハ官吏ヲ派遣シ或ハ舊藩主ノ出張ヲ請求スル事。

地方ニ於ケル討議會策

第一期以來帝國議會ノ形勢ニ依レバ、衆議院ト政府トノ衝突ハ年ヲ追フテ其ノ度ヲ高メ、終ニ大詔喚發ノ已ムヲ得ザルノ極點ニ達シタリ。而シテ此ノ衝突タルヤ再ビ第五議會ニ於テ發生スルコトナキヲ保タンヤ。然ラバ則チ政府ハ時機ニ依テハ已ムヲ得ズ解散ヲ命ゼザルヲ得ザルニ至ラン。假令ヒ其ノ衝突ハ巧ニ疏通シテ解散ノ嚴令ヲ要セザルモ、衆議院ノ總選舉ハ法律ニ據リ四年毎ニ之ヲ行フノ成規タリ。故ニ政府ハ解散スルト否トニ拘ハラズ、常ニ總選舉ノ準備ノ目的ヲ以テ、各府縣ニ於テ選舉區黨派ノ色分ケ地圖ヲ調製シ、毎選舉會ニ於ケル投票人ノ姓名ヲ類別シテ、政府ヲ賛成スル者ト、反對スル者トノ一覽表ヲ作ラザルヲ得ザルナリ。

此ノ地圖ヲ調製スルノ目的ヲ以テ假リニ府縣ヲ大別シテ左ノ種類トス。

- 第一 溫和黨ノ區域
- 第二 自由黨ノ區域
- 第三 改進黨ノ區域
- 第四 同盟派ノ區域

地方ニ於ケル討議會策

第五 中立派ノ區域

此ノ種類ニ基キ各選舉區ニ於ケル選舉人及被選舉人ノ人員、竝ニ第一期以來ノ總選舉ニ於ケル投票人ノ性質等ヲ検査シ詳細ナル色分ケ圖及選舉投票結果一覽表ヲ調製スベシ。是レ本邦ノ選舉法ニ於テ記名投票ヲ採用シタル深意ナリ。而シテ此ノ地圖及一覽表ニ依リ各地方ノ政黨ヲ視察シ、其ノ事情ト現勢トニ應ジテ知事、書記官、警部長、參事官、收稅長等ヲ選任シ、密カニ其ノ旨ヲ地方長官ニ訓令シ、常ニ地方ノ狀態ニ適合シタル政略ヲ施行シ、漸次政府ノ勢力ヲ伸張鞏固ニシテ、總選舉ノ準備ヲ隱密ノ内ニ施行スルコト目下ノ急務ナリトス。

第一區域ニ於テハ溫和派ヲシテ益々其ノ團結ヲ鞏固ニシ、又永久之ヲ維持スルノ方略ヲ指定シテ密カニ地方官ニ訓令シ、溫和派ト政府トノ關係ヲ堅固ニスルコトヲ怠ラザルベシ。

第二第三第四ノ區域ニ於テハ、今日直ニ民黨ノ團結ヲ破壞シテ溫和派ノ議員ヲ選出セシメント企ツルコトハ政府ノ得策ニアラザルナリ。何トナレバ歐米ノ選舉競争ノ諺ニ曰ク、勝算ノ見込ナキ區域ニ向テハ勉メテ干涉セザルヲ宜シトス。若シ強テ此ノ企望ヲ達セント欲セバ政府ハ非常ノ干涉ヲ行ヒ、莫大ノ金員ヲ費シテ毫モ効能ナキノミナラズ、却テ地方人民ノ感觸ヲ害シ、政府ノ威信ヲ傷クルニ至ルコト昨年ノ例ニ於テ明カナレバナリ。然レドモ亦現今ノ如ク全ク民黨ニ放任スルハ決シテ政府ノ得策ニ非ザルナリ。故ニ今日政府ハ一方ニ於テハ陰然民黨ノ勢力ヲシテ漸次軟弱ナラシム

ルノ手段ヲ計畫シ、又他ノ一方ニ於テハ溫和派ノ勢力ヲ養成スルノ方法ヲ設立シ、緩急順序ヲ謀リ數年ヲ期シテ此ノ政策ヲ遂グルノ目的ヲ立ツベキモノナリ。而シテ此ノ地方ノ知事ハ以下其ノ人物ヲ精選シテ之ニ任用シ、密カニ此ノ政策ヲ授ケ、政府モ亦特別ノ保護及應援ヲ與ユルコト緊要ナリトス。

第五區域ハ今日政府ニ於テ占領セント欲セバ尙ホ勝算ノ見込アル區域ナリ。英米ノ選舉競争ノ諺ニ曰ク、中立派ノ區域ノ去就ハ兩政黨ノ勝敗ヲ決スルモノナリ。競争ノ祕訣ハ全力ヲ投ジテ中立區ヲ占領スルニアリト。故ニ政府ハ全力ヲ舉ゲテ此ノ地方ヲ占領スルノ方略ヲ探ラザルベカラザルナリ。依テ此ノ區域ニ於ケル地方官ノ選擇ハ最モ注意セザルヲ得ザルナリ。何トナレバ其ノ地方官ノ意見ノ如何ニ依テハ民黨ノ勢力ヲ増加スルヤモ亦計リ難シ。又其ノ地方官ノ技倆如何ニ依テハ將來大ニ政府ノ權力ヲ伸張スルコト自由ナレバナリ。而シテ此ノ地方選出ノ議員ノ去就ハ以テ政府ト民黨トノ政權ノ消長ヲ決定スルモノナリ。

以上陳述スル所ノ政黨ノ色分ケ圖及之ニ關スル政略ノ如キハ、小生既ニ明治廿五年解散後ノ總選舉前ニ於テ前內務大臣品川子爵ニ建議シタリ。抑々此ノ色分ケ圖及政略ノ必要ヲ感ジタルハ、廿三年小生ガ英國滯在中政黨俱樂部及政社ニ趣キ、其ノ備附タル英國選舉區ノ色分ケ圖ヲ一覽シ、且ツ彼國ノ政事家ニ就キ選舉競争ノ方法等ヲ攻究シタル時ニアリ。爾來廿三年及廿五年ノ兩度ノ總選舉

ノ形況ヲ目撃シテ慨難ニ堪ヘズ、終ニ意見ヲ起草シタルモノナリ。

右ニ略記シタル方針ニ依リ、地方ニ於ケル討議會策ノ大體ヲ確定シ、地方官ヲ招集シ、第一ヨリ第五ニ至ルノ區域ノ性質ニ從ヒ、其ノ地方適當ノ訓令ヲ下スコト今日ノ急務ナリ。而シテ其ノ訓令タルヤ中央政府ト地方政府トノ間ヲ一貫連繫シ、其ノ地方ノ政況一變スルニ非ザル以上ハ、假令ヒ一時地方官ノ更迭アルモ永久確守シ、順ヲ追ヒ歩ヲ地方ニ於ケル討議會策ノ大本トナランコトヲ希望ス。

然レドモ右ニ列記シタル政略ノ外尙ホ數多アリト雖ドモ、目下政府ニ於テ速ニ着手セザルヲ得ザル事件ハ粗ボ左ノ如クナラントス。第一政府ノ地方ニ於ケル討議會策ハ獨リ衆議院議員及政治ニ關スル人士ニ止ラズ、第二第三流ニ位スル少年子弟ヲ收拾シ、將來ニ於ケル政治ノ分子ト現政府トノ關係ヲシテ密着シテ相離ルベカラザル基ヲ創ムルノ計畫ヲナサルベカラズ。今日各府縣ニ於ケル政黨員ハ目下黨員ヲ蒐集スルト共ニ地方ノ學校ニ於テ修學スル少年ヲ收拾シ、後進者ヲシテ將來ノ政黨員ニ充ントスルノ計畫ヲ立テ、既ニ彼等ハ地方ノ中學校、師範學校其ノ他各學校ノ校長教員及職員等ノ地位ハ成ルベク自黨ノ人物又ハ同意見ヲ懷抱スル人士ヲ以テ之ニ充テ、大ニ後進生ヲ養成スルノ方略ヲ實施セントセリ。故ニ此ノ際政府ハ地方官ニ訓令ヲ下シ、此ノ萌芽ヲ斷絶シ、溫和派ノ人物又ハ政府ト同主義ノ者ヲ以テ學校長、教員、職員其ノ他總テ學務ニ從事スル職務ニ充テ、

地方ニ於ケル少年子弟ヲシテ著實溫和ノ方針ヲ採ラシメ、民黨過激ノ精神ヲ養成スルノ傾向ヲ掃除スルコトヲ勉ムベシ。

第二我邦ハ三百年來封建ノ政治ニ慣熟シタルノ後ナルガ故ニ、地方人民ノ舊藩主ヲ敬慕スルノ念尙ホ未ダ旺盛ナリトス。故ニ舊藩主ノ一言タルヤ、知事ノ訓諭ハ勿論内閣大臣ノ懇篤ナル説諭ヨリモ仍ホ遙ニ勢力アルモノナリ。依テ政府ハ地方ニ於ケル討議會策ヲ講究スルニ當テハ、先ヅ各藩ノ舊主ヲ中心點トナシ、其ノ勢援ヲ藉リ、其ノ恩威ニ依リ、士民ノ人心ヲ收拾シテ着々政府ノ方針ヲ施行スルコトヲ勉ムベシ。是ヲ以テ先ヅ各藩主ヲ誘導シテ舊領地ニ在住セシメ、其ノ地方教育殖産興業ノ如キハ其ノ舊藩主ヲシテ之ヲ監督セシムルノ方針ヲ採ルベシ。而シテ其ノ藩主ト政府トノ關係ハ余ガ貴族院ニ於ケル討議會策ニ陳述シタル方法ニ依リ、密接ナラシムルトキニハ政府ハ東京ニ安座シテ居ナガラ地方ノ人心ヲ收拾スルコトヲ得ルニ至ラントス。

第三議院政治ノ要素ハ議院ニ於テ多數ヲ占ムルニ在リ、議員ノ多數ハ法律ヲ廢スベク又豫算ヲ否決スベシ。若シ政府ニ於テ議員ノ多數ヲ占メント欲セバ政府ト地方トノ關係ヲ親密ナラシムルコト第一ノ急務ナリトス。故ニ政府ハ陰然其ノ同主義ノ黨派ニ命ジテ政治ニ關スル本部ヲ東京ニ置カシメ、又各府縣ニ於テハ其支部ヲ設ケシムルコト必要ナリ。而シテ其ノ本部ニ於テハ新聞又ハ雜誌ヲ發刊シテ東京ト地方トノ連絡ヲ親密ナラシメ、一電信ハ以テ地方ヲ動カスニ足り、一返信ハ以テ地

方ノ狀況ヲ東京ニ通報スルニ足り、内外相應ゼシメ其ノ勢援ニ依テ討議會策ヲ行フニ非ザレバ、遂ニ政府ハ輦轂ノ下ニ孤立シテ地方ハ皆反對黨ノ占領スル所トナリ、其ノ結果ハ毎年議院ニ於テ政府攻撃ノ聲トナリ、又法律ノ否決トナリ、豫算ノ衝突トナリ、或ハ信任缺乏ノ上奏トナリ、遂ニ政府ハ解散セザルヲ得ザルノ悲境ニ陥ル。而シテ解散後ノ形況ハ却テ反對黨ノ勢力ヲ増加シ、終ニ我邦ノ憲法政治ハ政府ノ對議會ノ策ノ準備整ハザルガ爲ニ、不幸ナル結果ヲ見ルニ至ルヤモ計リ知ルベカラザルナリ。

以上ハ已ニ業ニ政府ニ於テ準備計畫アルベシト確信スレドモ、聊カ愚見ノ一二ヲ陳述シテ閣下ノ參考ニ供ス。

議會ト政府トノ衝突ニ付政府ノ採ルベキ方策

清水市太郎

現今議會ト政府トノ衝突ハ實ニ國家ノ難問ニシテ、内外ノ人民ノ注目スル所タリ。此際政府ノ採ルベキ方策ハ左ノ三種ノ一ナラントス。

第一策 議會ヲ解散シ、直ニ知事ヲ召集シ、選舉ノ準備ヲナシ、各大臣ハ受特區ヲ定メテ地方ヲ巡廻シ政府ノ意見ヲ發表スルコト。

第二策 下院ノ有力ナル政黨ト交渉シ、豫算案ニ付譲リ合ヒヲナシ、且ツ政黨員中ノ重立チタル者ヲ政府部内ニ引キ入レ調和策ヲ取ルコト。

第三策 彈劾的ノ上奏ヲ奉呈スルモ勅答ヲ發セズ、再ビ休會ヲ議決シ、又ハ故ラニ歸縣スルモ主動的ノ處斷ヲナサズ、殘留ノ議員ヲ纏メテ善後策ヲ講ズベシ。若シ其策行ハレザルトキハ、會期ノ盡ルヲ待テ豫算ハ憲法第七十一條ニ依リ前年度ニ依ルコト。

諸會ト政府トノ衝突ニ付政府ノ採ルベキ方策

第一策ハ昨年ノ先例ニ鑑ミルモ頗ル困難ニシテ、今日之ヲ再演スルヤ否ハ未ダ計リ知ルベカラザルナリ。第二策ハ危計中ノ最モ危ナルモノニシテ、將來政黨内閣ノ端緒ヲ開始スルモノナレバ、是亦或ハ今日ノ得策ニアラザルナリ。依テ余ハ第三策ノ採納アランコトヲ希望スルモノナリ。

第三策ヲ非難スルモノハ云ハントス。此ノ如クナレバ政府ノ優柔不斷ヲ示シ、内閣ノ威信ヲ損ジ文武官ノ尊敬ヲ失ヒ外國ノ輕侮ヲ受クルニ至ラント。然レドモ余ハ此ノ非難ヲ以テ顧慮スルニ足ラザル感情的ノ論斷ト云ハント欲ス。抑々立憲政治ノ内閣ハ憲法ノ明條ヲ恪遵シ、國家ノ基礎ヲ遽變セザルコトヲ目的トシ、専ラ後日ノ勝算ヲ經畫スベキモノトス。決シテ一時ノ感情ニ聳動セラレテ眼前ノ小政略ヲ行フベキモノニアラザルナリ。又今日ノ元勳内閣ハ假令ヒ第三策ヲ採用スルモ、維新以來ノ偉勳大功ハ尙ホ文武官ノ威信ヲ繫留スルニ足り、其ノ一言一行ハ以テ地方官ヲ指揮シテ十分政府ノ意思ヲ各地ニ普及セシムルコトヲ得、又賛下ノ文武官ヲ統收スルニ餘力アリ、又外國政府ノ信用ハ元勳内閣組織ノ當初ヨリ日二月ニ一層昂張スルコト彼地ノ通信ニ見エタリ。單ニ此ノ三策採用ノ爲ニ外國政府ニ威信ヲ損ズルコトナキハ余ガ確信スル所ナリ。故ニ余ハ此ノ元勳内閣ノ特有スル從來ノ勳功及經歷ニ依リ、中外ノ威信ヲ繫留スルニ足ルガ爲ニ、爰ニ第三策ノ採納アランコトヲ希望スルモノナリ。

對 議 會 策

清水市 太郎

實業特ニ航海業、漁業、商業、殖民及ビ鐵道ノ五大事業ヲ振擡發達スルヲ以テ大主眼トナシ、海軍平時ノ實用、即チ以上五大事業ノ中初メノ四大事業ノ保護發達ヲ計營規畫スト怒鳴スレバ、先ヅ參百ノ議員ヲシテ肅然タラシムルヲ得。彼輩若シ尙ホ政府ヲ苦ムルヲ以テ目的トシ、國家ノ實利實益ニ至ツテハ問フ所ニアラズトナサンカ、斷然解散ス可キナリ。

經濟發達ノ順序ニ三級アリ「ローカリチー」(地方主義)時代「ナシヨナリズム」(國家主義)時代「コスモポリタリズム」(四海兄弟主義)時代是ナリ。本邦今「ナシヨナリズム」時代ニアリ、故ニ「孟買航路ヲ更ニ延長シテ地中海ニ入ラシメ、米國西岸新航路ヲ開キ、南洋航路ヲ保護スルハ是非共上下舉ツテ百事ヲ抛チ勤ムベキ事ナリ」ト云フ時ハ、海内響キノ如クニ應ジ天下漢民ノ爲メニ双肩ヲ脱スルノ徒ノミ。

航海業ト漁業

而シテ航海業ヲ盛ニセント欲セバ必ず先ヅ漁業ヲ發達セシメザルベカラズ。漁業ハ航海業ノ豫備

門ニシテ、漁業盛ナラズシテ航海業獨リ盛ナリシ國ハ之レアラズ。漁業ノ盛ヲ計ル方法一ニシテ足ラズト雖ドモ、主トシテ左ノ五點ヲ着目ス。

第一 ライフボート 生命救助船ヲ津港ニ設ケ置クコト。

第二 難破船救助者報酬法ヲ布キ、救助セルモノニ救助ヲ受ケタルモノヨリ財産ノ財産ノ價額生命救助ノ數トニヨリ報酬ヲ支拂ヒスル事、且政府ヨリ救助者ニ賞牌等ヲ送ル事。

第三 海軍ニ令シ軍艦ヲシテ途上難破船ヲ救助セシムル事、而シテ其費用ハ固トヨリ官費トナシ置キ、救助ノ報酬ヲ水夫若クハ士官等ノ受クルコトハ通常救助者同様トス。

第四 水夫ニ限り海軍水兵ニノミ徵集シ陸軍兵ニ出ヅルノ義務ヲ免ズルコト。

第五 水夫ノ沈没セルトキ其老親妻子等救助抱養ノ方法ヲ設クル事等ナリトス。

商業ハ方今本邦ノ輸出入貿易價額大凡ソ一億七千萬圓ニ達セントシ、其外見大ニ賀ス可キガ如シト雖ドモ、其實ハ八割前後ノ價額ハ主トシテ外人ノ手ヲ經、外人ノ船舶ニ依リテ行ハル、モノニシテ本邦人ノ手ヲ經テ行ハル、モノハ實ニ一割七八分乃至二割ニ過ギズ。而シテ其主タル原因ヲ究ムルニ航海業ノ主權ヲ外人ノ握ルニ因ラズンバアラズ。是レ萬事ヲ抛テ航海業ノ擴張ヲ計ラザル可ラズト云フ所以ナリ。

植民ヲナスヲ以テ單ニ本國過多ノ人口ヲ他國ニ移シテ勞力ノ價ヒ安キニ過グルヲ拒グトナシ、若

商業ト航海

植民地ト本國

クハ物價ノ高キニ過グルヲ安カラシメントスト云フモノハ愚論ニシテ取ルニ足ラズ。植民ノ眼目ハ實ニ植民地ト本國ノ關係ヲ密着ニシ彼我相交易シ彼我相裨益スルヲ計ルニアリ。苟クモ本國ニ裨益ナキ植民ナランカ、始メヨリ爲サルノ優レルニ如カズ。何トナレバ各人丁年以上ニ達スル迄本國ニ衣食シ、而シテ漸ク勞力ナリ腦力ナリヲ以テ本國ノ用タル可キ時ニ當リ、移ツテ他國ニ寄寓シ、本國ニ益スル所ナキガ如キ植民ハ始メヨリ爲スコトノ不利ナレバナリ。

以上ノ目的ヲ以テ航海業ノ漁業商業植民ヲ振發發達セシムルニハ、平時必ラズ海軍ノ用多キニ居ル。故ニ現今歐米各國海軍ノ用ハ戰時ニアリト云ハンヨリハ寧ロ平時ニ於テ却テ大ト云ハザル可カラザルモノアリ。

前顯四大事業ノ問題ハ國家的觀念ニ訴ヘ勝算歷々タルモノナリ。

尙ホ鐵道布設問題ハ黨派分裂策ノ上乘ナルモノナリ。各地方ノ實業家若クハ普通土地所有者ノ鐵路沿道ニ當ルモノヨリ囑託ヲ受ケ來タルヲ以テ、黨派ノ主義ヲ脱却シ、己等囑託ヲ受ケ來レル所ヲ達センコトヲ欲スルモノ比々皆然レバナリ。是レ乘ズ可キノ所ニシテ、即チ我公明至誠眞ニ國ヲ憂フルノ主義ヲ貫徹スルノ一方便ノミ。

是レヲ要スルニ黨派問題ヲ脱却シ、去ツテ國家問題ニ進入スルニアリ。此大主眼ヲ貫クヲ以テ骨髓トナシ、先ヅ彼ガ膽ヲ奪ハ、時是恰カモ國家主義喚發ノ經濟時代ニシテ、實業春草ノ如ク萌芽シ

來ル機節ナルヲ以テ、全國輿論ノ賛成ヲ得、天下識者ノ同意ヲ得ルコト不肖市太郎ヲ以テ之ヲ見レバ掌ヲ反スガ如クナル而耳。滔々タル彼愚論者流ニ至ツテハ「國家多事又顧ルニ違アラズ」ノ言ヲ以テ當ランノミ。

加之ナラズ若シ他黨ノ方策ニシテ用ユベキモアル時ハ、假令ヒ自黨當初ヨリノ方策ニ有ラザルモ所謂彼レガ「鉅ヲ奪ヘルノミ」ト放言シ、着々我ニ於テ之ヲ實行シテ可ナリ「グラッドストーン」政府ガ保守黨ノ絶叫シテ「ウガンダ屯在ノ英兵ヲ撤去ス可カラズ、其英商ノ實益ヲ害スル擧ゲテ云フ可ラズ」ト主張スルヤ、已業ハ是レト反對ノ意見ナリシニモ拘ハラズ、事實餘リ然リト認ムルニ及ンデ毫モ憶スル所ナク、保守黨ノ云ヘルガ如ク英兵ヲ「ウガンダ」ヨリ撤去セズシテ更ニ疑フ所ナカリシガ如キ是ナリ。

如此行ヒ來リ彼レ尙頑愚我眞ニ國ヲ憂ヒ民ヲ思フノ事業ヲ翼賛セザレバ上ハ
陛下ニ奏上シ下ハ國民ニ訴へ、斷然解散ス可キノミ。千載史上我辭理ヲ得光明燦然タル可キナリ。

貴族院議長上奏豫算案ニ付上下 兩院所見ヲ異ニスルノ件

附 樞 密 院 議 決

貴族院議長臣茂韶誠恐誠惶貴族院ノ決議ヲ以テ恭ク

叡聖文武 天皇陛下ニ上奏ス。

本院ハ政府ヨリ提出シ衆議院ヨリ送付シタル明治二十五年年度歳入歳出總豫算追加案ヲ議スルニ當リ、衆議院ノ削除シタル海軍省所管第一款軍艦製造費及文部省所管第二款震災豫防調査會設備費ノ兩款ヲ急要ノ歳出ナリト認メ、憲法ニ依リテ與ヘラレタル協賛ノ權ニ依リ政府ノ要求ニ基キ衆議院ノ修正案ヲ修正シ、議院法第五十五條ニ依リ衆議院ニ移シタリ。抑豫算案ハ前ニ衆議院ニ提出セラ
ルルノ外、憲法上豫算ニ對スル協賛ノ職權ニ於テ兩院ノ間ニ輕重スル所ナキヲ信ジ、又此職權ニ依
テ修正ヲ行フニ當リ、政府ノ要求スル款項ヲ設クルニ付テハ、法律上何等ノ制限ナキヲ信ズ。是ヲ
以テ本院ハ憲法ノ命ズル職務ヲ盡シ、且議院法ノ手續ヲ履ミ、以テ衆議院ノ同意ヲ求メタリ。然ル

豫算委員會
ニ於テ政府
ヨリ要求セ
リ

貴族院議長上奏豫算案ニ付上下兩院所見ヲ異ニスルノ件

ニ衆議院ハ更ニ之ヲ挿入シタルハ不合法ノ議決ナルヲ以テ、回付ヲ受クベキモノニアラズトシテ返付セリ。本院ニ於テハ本院ノ議決ヲ合法ノモノト確信スルヲ以テ、更ニ之ヲ衆議院ニ回付シタルニ、衆議院ヨリ再應返付シ兩院ノ所見遂ニ相合フ能ハザルニ至レリ。

今憲法上ノ疑義ニ關シ、兩院ノ所見互ニ相合ハズ。從テ憲法上ノ進行ヲ現在及將來ニ妨グルノ懼アルニ於テ、本院ハ謹デ狀ヲ具ヘ上奏シ仰デ

聖明ノ親裁ヲ待ツアルノミ。臣恐懼ノ至ニ堪ヘズ。謹デ上奏ス。

明治二十五年六月十一日

貴族院ヨリ憲法上ノ疑義ヲ以テ 上奏セル件

明治二十五年六月十二日

貴族院ヨリ憲法上ノ疑義ヲ以テ上奏セル件

樞密顧問ニ諮詢ス

右奉

勅旨

明治二十五年六月

内大臣侯爵 德 大 寺 實 則 花押

貴族院ヨリ憲法上ノ疑義ヲ以テ上奏セル件

貴族院上奏憲法上ノ疑義ニ關スル ル 審査報告

恭テ按ズルニ、本件ハ衆議院削除セル所ノ明治二十五年度歳入歳出總豫算追加案中、海軍省所管第一款軍艦製造費及文部省所管第二款震災豫防調査會設備費ノ兩款ヲ貴族院ニ於テ存留スルコトニ議決シ、之ヲ衆議院ニ回移シタルニ、衆議院ニ於テハ貴族院ニ先ダテ豫算案ノ提出ヲ受クルノ權アルニ依リ、貴族院ハ先キニ衆議院ノ議決シタル修正ヲ以テ原案トシ其ノ範圍内ニ於テ協賛權ヲ行フベキモノトス。今衆議院ノ既ニ削除シタル款項ヲ再ビ挿入スルハ新タニ款項ヲ増加スルニ他ナラス。而シテ新タニ款項ヲ増加スルノ權ハ兩院俱ニ之ヲ有セズ。然ルニ貴族院ノ議決ハ此疆域ヲ踰超シタルノ非法ノモノタルガ故ニ、受領スベキ所ニ非ズトシテ之ヲ排斥シタリ。而シテ貴族院ハ謂フ衆議院ハ貴族院ニ先ツテ政府ヨリ豫算案ノ提出ヲ承クル外、豫算ニ對スル協賛權ハ兩院俱ニ軒輊スル所アルナシ。是ヲ以テ貴族院ハ一タビ衆議院ノ削除シタルニ款ヲ存留シテ再タビ衆議院ニ回移シタルハ憲法ニ遵依セル適當ナル處措ナリト、是レ爭議ノ梗概ナリ。然リ而シテ一タビ衆議院ニ於テ排斥シタル以上ハ、貴族院ハ茫乎トシテ曠過スベカラザルニ由リ

直チニ普テ憲法上ノ疑義ト爲シ 楓震ニ伏跪シテ

聖斷ヲ待ツニ臻リタリ。蓋シ帝國憲法ハ一ニ 聖衷ニ出デ 聖裁ニ由ルヲ以テ、今貴族院ガ

其淵源ニ愬テ 聖明ノ定奪ヲ仰グハ憲法ノ進行ニ就テ深ク憂慮スルノ誠衷ヲ表スルニ外ナラス。

而シテ 陛下ガ先ツ本院ノ議ニ詢ヒ玉フ所以ハ、本院官制ノ明文存スルニ率由ス。

今回ノ事タル翅ニ憲法實施ノ後絶無ノ爭議タルノミナラズ、例範ヲ將來百世ニ貽スノ重大事ナルヲ以テ、最モ慎重ニ最モ綿密ニ攻究查覈シ、以テ憲法ノ光輝ヲ赫奕ナラシメザルベカラズ。是ノ故ニ小官不肖ヲ以テ查按ノ命ヲ辱クセルモ、唯ダ之ガ疑點ヲ臚陳スルニ止メ其酌定可否一ニ各位閣下ノ高判ヲ竣ツ。是レ殊ニ斷案ヲ鄭重ニスルニ於テ當ニ小官ノ分タルヲ信ズレバナリ。今其疑點ヲ綱舉スレバ即チ左ノ如シ。

一、貴族院ヨリノ上奏ノ趣旨ハ憲法上ノ疑義ナル乎。將タ議院法ノ疑義ナル乎。

二、憲法上ノ疑義ニ關スル上奏ニ對シテハ必ず法律上 聖裁ヲ與ヘラルベキモノナル乎。將

叡慮ノ儘ナルベキ乎。

三、憲法上ノ疑義ハ一機關内ニ生ジタルモノト、又甲乙兩機關ノ間ニ生ジタルモノトノ差別ヲ問ハズ、一切ノ場合ニ於テ 聖裁ヲ煩スコトヲ得ル乎。否。

四、甲院既ニ乙院ノ所爲ニ對シテ上奏ヲ爲シタル場合ニ於テ、乙院ノ上奏ヲ待タズ甲院ノ上奏ノ

- ミニ就テ 聖裁ヲ下サルベキ乎。
- 五、聖裁ハ上奏ニ對スル 勅答ナルベキ乎。將タ單獨ニ 聖意ヲ發表スルノ詔勅ナルベキ乎。語ヲ換ヘテ云ヘバ 聖裁ハ上奏ノ事項ニ對スル裁判ノ性質ニ屬スベキ乎。將タ憲法ノ解釋ナルベキ乎。
- 六、兩院ノ間ニ今回爭議ノ端ヲ啓キタル追加豫算案ト稱スル議案ノ性質如何。
- 七、追加豫算案ニ於ケル一院ノ議決ハ政府ノ議案ヲ消滅セシムル乎。否。
- 八、貴族院ニ於テ軍艦製造費及震災豫防調査費ノ二款ヲ加ヘタルハ衆議院ノ修正ヲ再修正シタルモノト認ムベキ乎。將タ更ニ新案ノ提出ト認ムベキ乎。
- 九、議院ハ政府ノ要求以上ニ費額ヲ増加シ、又ハ原案外ニ款項ヲ増加スルコトヲ得ザル乎。
- 十、豫算議權ハ兩院均一彼此ノ間輕重スル所ナキ乎。
- 十一、追加豫算ハ其形式ト其實體トニ於テ一案ナリヤ。否。
- 十二、豫算ノ各款項ハ獨立獨行ノモノナルヤ。否。又一款項ノ不成立ノ爲ニ豫算全部ノ不成立トナル乎。否。
- 十三、不合理ト認メタルモノハ議スベカラザル乎。又ハ議シテ後否決スベキ乎。兩院議長ノ權限如何。

- 十四、聖裁ニ對シ兩院又ハ兩院ノ一ニ於テ不順ノ言行アルトキハ如何。
- 十五、政府提出案ニ就キ、兩院ノ間ニ爭端ヲ生ジタル場合ニ於テ、政府ハ一モ其見ル所ヲ表白セズ、拱手傍觀シテ一ニ 聖裁ニ依ラントスルハ閣臣ノ責任ヲ全フシタリトスベキ乎。
- 十六、勅書ニテ 聖裁ヲ與ヘラルベキ乎。又ハ勅語ヲ以テセラルベキ乎。
- 十七、議會ニ對シテ 聖裁ヲ與ヘラルベキ乎。又ハ不合理ノ一院ニ對シテ與ヘラルベキ乎。又ハ兩院ニ拘ラズ憲法ノ正解トシテ與ヘラルベキ乎。
- 十八、勅書ナレバ副署ノ手續如何。
- 十九、勅書若ハ 勅語ヲ傳ヘラル、ノ手續如何。
- 以上ハ各位閣下ガ本件ヲ審按明斷セラル、ニ於テ法理上及事實上其一ヲ後ニスベカラサルノ須急問題トス。若夫レ各位閣下ニ於テ此諸點ヲ熟察深考セラル、トキハ、各位閣下ノ高見爰ニ定マリ、其結果ヲ敷奏シテ奉對セバ 聖裁ヲ萬一ニ裨補スルニ幾ラン乎。而シテ其疑點ノ因由スル所ニ就テハ各位閣下ノ高問ヲ待チ、親シク拜答スル所アラントス。右敬テ稟告ス。

明治二十五年六月

樞密院書記官長 伊東巳代治

樞密院議長伯爵 伊藤博文 殿

一、貴族院ヨリ憲法上ノ疑義ヲ以テ上奏セル件

右本日御下附相成候付及御配布候也

明治二十五年六月十二日

樞密院書記官

一、貴族院上奏之件

明十三日午前第十時 總委員會

同 午後 第一讀會 開會

右議長ノ命ニ依リ及御通知候也

明治二十五年六月十二日

樞密院書記官

茲ニ下問ヲ辱シ本院官制ニ依リ、明治二十五年六月十一日貴族院ノ上奏セル憲法上ノ疑義ニ對シ
左ノ議決ヲ爲シタリ。

憲法上豫算ニ對スル貴族院及衆議院ノ協賛權ハ我帝國憲法第六十五條ニ依リ、衆議院ハ貴族院
ニ先テテ政府ヨリ豫算案ノ提出ヲ承クルノ外兩院軒輊スル所ナキ者ナリ。

故ニ後議ノ議院ハ前議ノ議院ニ對シテ何等羈束セラル、コトナク、從テ前議ノ議院ニ於テ削除
セル款項ヲ存留スルハ素ヨリ後議ノ議院ノ修正權内ニ屬スベキモノトス。但シ後議ノ議院ハ前
議ノ議院ニ對シ、議院法ノ命ズル所ニ依リ同意ヲ求ムルヲ以テ唯一ノ手續トスルノミ。

右ニ關シ内申

貴族院ノ有スル豫算修正ノ權ハ憲法第六十五條ニ依リ衆議院ト同一ナリトス。故ニ政府提出ノ豫算ニ掲載セラレタル款項ヲ恢復スルハ貴族院ノ特權ナリ。此ノ特權タルヤ獨リ貴族院ガ之ヲ貴重スルノミナラズ、政府ガ衆議院ニ對シ過激ナル豫算ノ削減ヲ防制スル唯一ノ權力ナリトス。

衆議院ニ於テ豫算ニ掲グル國家重要ノ款項ヲ削除シ貴族院ニ送附シタルトキ、貴族院ハ之ヲ恢復スル爲ニ豫算ヲ修正議決シ、之ヲ衆議院ニ回付シテ其ノ同意ヲ求ムルコトヲ得ルモノナリ。若シ衆議院ニ於テ之ニ同意セザルトキハ兩院協議會ヲ求ムベキモノトス。而シテ兩院協議會ニ於テハ貴族院ノ修正ノ如キ成案ヲ報告シタル後、衆議院之ヲ否決シテ豫算ヲ貴族院ニ送附シ、貴族院ハ協議會ノ成案ノ通り議決シタルトキ、爰ニ始メテ兩院ノ意思衝突シ、豫算成立スルヤ否ノ重要問題ヲ惹起スルニ至ラン。

甲說ニ依レバ兩院ノ衝突ハ單ニ豫算ノ款項ニ止マルモノニシテ、豫算全體ニアラザルモノナレバ其ノ款項ノミ不成立トナリ、其ノ他豫算ノ款項ハ悉ク成立スルモノナリ。又乙說ニ依レバ假令ヒ衝突ハ款項ニ止マルモ豫算ハ分割スベカラザルモノナレバ、豫算全部ノ不成立トナルモノナリ。現ニ

政府ハ明治二十三年初度ノ議會ヲ開ク以前ニ於テ、閣議ヲ以テ豫算ハ分割スベカラザルコトニ一決セリ。今此ノ兩說ノ可否ヲ斷定シテ議院將來ノ慣例ヲ遺スコトハ獨リ上下兩院ノ議決權ノ消長ノミニアラズ、全ク國家最大ノ要務ナリ。故ニ此ノ問題ヲ決定スルニ當テハ、本年ノ追加豫算ノミニ着目シテ判斷スベキモノニアラズ。將來、政府貴族院衆議院ノ三體ノ關係上ニ及ボス所ノ結果ヲ洞察セザルベカラズ。又此ノ斷定ノ如何ニ依リテハ、將來日本ノ政治ヲシテ全ク下院ノ專握スル所ナラシムルニ至ラントス。請フ左ニ其ノ理由ヲ陳ゼン。

甲說ニ依ルトキハ左ノ弊害ヲ招クニ至ラン。

一、兩院間ニ於テ款項ノ衝突ヲ生ジタルトキハ、其ノ款項ノミ不成立トナルモノトセバ、貴族院ガ憲法上占有スル豫算修正權ハ虛文ニ陥リ其ノ實權ナシ。何トナレバ衆議院ハ最初ヨリ其ノ款項ヲ削除シタルモノナレバ、協議會ヲ開キタレバトテ之ヲ恢復スルノ思想ヲ惹起スベキ謂レナケレバナリ。

二、協議會ノ成案ヲ否決セルトキハ其ノ款項ノミ不成立トナルモノトセバ、衆議院ハ豫算ノ上ニ於テ生死ノ全權ヲ專有シ、政府又ハ貴族院ハ之ニ對シテ抑制ノ手段ナク、拱手シテ其ノ命令ニ屈服セザルヲ得ザルニ至ラン。

三、此ノ如キ結果ヲ生ゼバ憲法制定ノ當時ニ於テ貴族院ニ豫算修正權ヲ附與シ、政府ハ之ニ依テ

以テ衆議院ノ急激不法ナル豫算ノ削減ヲ恢復セント欲スル唯一ノ精神ハ何クニアルカ。然レドモ乙説ニ依ルトキハ左ノ利益ヲ生ズルニ至ラン。

- 一、協議會ノ後衆議院ニ於テ貴族院ガ恢復シタル款項（即チ政府ノ要求）ヲ否決セバ、豫算全體ノ不成立トナルガ故ニ、之レヨリ生ズル所ノ結果ハ悉ク衆議院ノ責任ニ歸セシメ、衆議院ヲシテ豫算全體ヲ成立セシムルヤ否ヲ判定セシムル困難ナル地位ニ立タシム。
- 二、衆議院ニ於テ政府攻撃ノ手段ト最初ノ行懸ヨリ生ズル情實トヲ除却セズ、僅々タル款項ニ不同意ヲ主張スルトキニハ、國家ノ豫算全體ヲ不成立ニ陥ラシメ、國民ノ嫌厭ヲ招クガ故ニ終ニ貴族院ノ修正（即チ政府ノ要求）ヲ可決セシムルコトヲ得ントス。
- 三、然ルニ之ヲ熟考セズ、貴族院ガ國家ノ要件ト認メテ恢復シタル款項ヲ廢棄シタルトキニハ、衆議院ハ貴族院ノ懽心ヲ失フノミナラズ、其ノ憤懣敵愾ノ心ヲ生ゼシムルノ逆境ニ陥ル。
- 四、豫算全體ノ不成立ハ凡テノ官業ヲ中止シ、其ノ影響ハ忽チ民業ニ波及シ、全國到ル處不景氣ヲ歎ジ、良民ハ憤懣シテ其ノ責ヲ衆議院ニ歸シ、貴族院ハ終ニ政府ト聯合シテ衆議院ノ過激不法ヲ責ムルニ至ラン。
- 五、此ノ如キ場合ニ至ラバ政府ハ垂拱シテ國民ノ贊助ヲ受ケ、又貴族院ノ後援ヲ得ルガ如キ全勝ノ地步ヲ占ムルニ至ラン。然ラバ則チ後日議會ノ形況ニ依リ不得已解散ノ令ヲ下スモ、國民及

貴族院ハ政府ニ賛成シテ終ニ衆議院ノ全敗トナルニ至ラン。是レ本件ニ關スル對議會策ノ最大ノ手段ナリトス。

以上ハ本問題ヨリ生ズル利害ノ一部分ナリ。今日若シ政府ニ於テ豫算全體不成立ノ説ヲ取ラズ、豫算一部ノ不成立説ヲ採用セバ、將來ノ政治ハ下院ノ左右スル所トナリ、政府及貴族院ノ權力ハ地ニ落ち、國家萬世ノ大計ヲ過ルニ至ラントス。尙ホ其ノ詳細ナル箇條ノ如キハ親シク閣下ニ拜謁シテ開申センコト切望ノ至リニ堪ヘズ。

豫算議決權ノ問ニ關スル意見

附 比斯馬克氏ノ主義ニ付テノ別例

ア モツセ氏

豫算ノ細目ニ關スル貴問ハ豫算議決權ノ全體ニ涉ルニ非ザレバ論究スルヲ得ザルガ故ニ、可成簡單ニ此權ト關涉シテ貴問ニ對ヘント欲ス。

第一 經濟ノ第一要務ハ收入支出ノ間ニ平均ヲ保タシムルニ在リ。而シテ此目的ハ大ナル經濟殊ニ國家ノ經濟ニ於テハ定期ノ豫算ヲ立ルニ非ザレバ之ヲ達スルコト能ハズ。故ニ專制ノ國ニ於テモ既ニ完全ナル豫算ヲ作り、可成之ヲ守ルノ計畫アルヲ要シタリ。普國ハ專制ノ國家タリシ時ニ既ニ率先シテ此財術ノ需要ヲ充タシタルハ世人ノ知ル所ナリ。日本ニ於テモ此事ニ關シテ既ニ稱賛スベキノ計畫ヲナセリ。然レドモ此ノ急務ヲ正當ニ履行シ、可成收入支出ヲ適切便宜ニ整理シ、殊ニ之ヲ節約シ、又國家ノ信用ヲ鞏固ニセントスル爲ニハ國會ノ憲法上ノ參與ヲ待テ、始テ大ナル保證ヲ見ルコトヲ得ルハ疑フベカラザルナリ。又政事上ノ關係ニ於テハ國會ノ憲法上ノ參與ニ就テ更ニ重要ノ利益アリ、即人民ハ政府ノ專縱ヲ防止シタル感覺ヲ生ジ、負擔及其費用ノ目的ヲ確定スルノ

際、竝ニ此費用ヲ監督スルノ際、代人ヲ以テ自ら參與スルコトヲ得、其賦課セラレタル負擔ハ最必要ナルモノニシテ、專國家ノ目的即全體ノ利益トナル目的ノ爲ニ費用セラル、モノナリトノ信任ヲ得ル是レナリ。

然レドモ他ノ一方ヨリ之ヲ見ルトキハ、上陳ノ利益ハ議院ニシテ豫算ヲ議決スルノ際、國家ノ眞正ノ利益ヲ重ンジ、黨派ノ利益ノ爲ニ牽制セラル、コトナキニ非ザレバ存立スルコトヲ得ベカラズ。而シテ又議院ノ廣大ナル豫算議決權ハ行政ヲ左右スルノ權力タルハ明カナリ。國民自治ノ制ニ美成セラレ、公共ノ需要ヲ了解シ、又統治ヲナスノ資格ヲ有スル黨派ヲ組織シ、議院ノ多數ヲ以テ內閣ヲ組織スル原則ヲ行フノ國ニ在テハ、議院ニ廣大ナル豫算議決權ヲ與フルモ國家ノ利益ヲ害セザルベシト雖、此要件ヲ存セザル國ニ於テハ如此權利ハ勢必ズ爭議ヲ生ズルニ至ルベク、而シテ統治權ノ愈強大ナルニ從テ爭議愈々強烈ナルヲ見ルベシ。此等ノ要件ハ日本ニ於テ之アルヲ見ズ。且方ニ強大ナル政府アルヲ必要トスルノ時ニ當レリ。加フルニ國民ハ統治ノ資格アル大黨派ヲ組織スルヲ力メズシテ、好ンデ小黨派ヲ組織スルノ傾向アリ。故ニ予ハ此事ニ關シテ日本ハ白耳曼人種國ノ例ニ倣フベシト信ズ。即英國及獨逸國ハ漸次歩ヲ進メ現今ノ開明ニ至リタルモノニシテ、日本ニ於テモ亦時ヲ逐フテ此國會ノ權利ヲ擴張スルニ至ルベク、俄ニ立憲國ガ開明ニ依テ得タル所ノ最上級ヲ模倣スベカラズ。此諸國ガ一般ノ機關的ノ進歩ニ從ヒ、專制國ヨリ立憲國ニ變廷スルノ際如何

ナル方法ヲ施シタルヤヲ觀察スベキナリ。

予ガ左ニ提出スル所ノ意見ハ此主義ニ依ルモノナリ。

第一 總テ豫算議決ノ起源ハ何レノ國ニ於テモ收入ノ承諾ニ在リ、日本ニ於テモ國會ニ此權ヲ與フルニ弊害アルコトナシ。然レドモ予ハ豫算議決權ヲ新稅ノミニ限リ、凡テ收入ハ毎年承諾ヲ要ストイヘル白耳義憲法ノ原則ヲ取ルベカラズト信ズ。左ニ掲ル所ノ成文ハ此主義ニ適フベシ。

議院ノ承諾ヲ經ルニ非ザレバ新稅ヲ設ケ、又ハ現行ノ租稅ヲ增額若ハ變更スルコトヲ得ズ。

此原則ハ普國憲法第九條ノ意義ニ同ジト雖、普國憲法ノ成文ハ元來獨リ新舊變廷ノ効用ヲ有スルコトヲ知ラシムルノ感覺ナキニ非ズ。故ニ予ハ巴威爾憲法第七章第三條ノ成文ヲ優レリトシ、其承諾シタル租稅ハ繼續シテ之ヲ徵收スルノ原則ヲ以テ間稅ニ止メズシテ之ヲ直稅ニ及ボスヲ正當ナリトス。

若シ此主義ニシテ果シテ賛成ヲ得ルトキハ、白耳義憲法ヨリ普國憲法(第九十九條)ニ傳染シタル原則ハ之ヲ避クルヲ可ナリトス。數多ノ有名ナル國法學者ノ說ニ、政府ハ唯豫算法律ニ依テ現行法ノ租稅ヲ徵收スル法律上ノ權利ヲ有シ、其現行法ハ縱令永遠ニ効力ヲ有スルモノナルニモセヨ、毎年發スル所ノ施行法即豫算ニ依ルニ非ザレバ之ヲ施行スルヲ得ザルガ故ニ、第九十九條ニ於テ要スル施行法ノ成立セザルトキ、又ハ成立セザルノ間、政府ハ永久ノ法律ニ基ク所ノ租稅ヨリ生ズル收

入ヲモ徵收スルノ權ヲ有セズトスルハ、即此白耳義ノ原則ニ由來スルモノナリ。此說ハ獨リ黨派ノ主義ニ止マラズ、守舊主義ヲ執ル所ノ法學者モ亦第九十九條ノ法律上理由ニ依テ主張スル所ナリ。予ハ「グナイスト」氏ノ言ノ如ク果シテ此主義ノ正當ナルヤ否ヤハ此ニ之ヲ講究スルヲ欲セズト雖ドモ、第九十九條ノ主義ヲ執ラントスルトキハ、第九十九條ノ如キ數多ノ國ノ憲法ニ掲ゲタル所ノ規定ヲ斥ケテ此兩様ノ關係ヨリ起ル爭議ヲ豫防スベキハ上ニ陳ベタル所ニ依テ知ルベキナリ。

其他議院ニ租稅承諾權ヲ與フルハ、此權ヲ以テ信任諾否ノ手段トナシ、或ハ政府ノ爲ニ強テ承諾ヲナサシムルノ方法タラシムルニ非ズ。此權アルガ爲議院ハ同時ニ憲法上ノ義務ヲ負擔スベキガ爲ナルコトヲ憲法ニ明言スルヲ可トス。故ニ左ニ掲グル二個ノ成文ヲ採用スベシ。

議院ハ經常及非常ノ國費ニ充ツル爲必要ナル收入ヲ承諾スルノ義務ヲ有ス(李遜憲法第九十七條、千八百三十二年十月十二日ノ「ゾラウンシュワキヒ」憲法第七十三條)

租稅ノ承諾ニハ其租稅ノ費出ト直接ノ關係ヲ有セザル約束ヲ附帶セシムルベカラズ(巴威爾憲法第七章第九條、瓦敦堡第一百十三條、李遜第二百二條、「セルビイ」第六十四條)

第一ノ原則ハ其必要ナリトノ語ニ就キ直ニ爭議ヲ生ズベキガ故ニ、嚴格ナル法則ヨリハ寧ロ政事上ノ主義ヲ包含シタルモノタルハ予モ亦之ヲ認ムル所ナリ。然レドモ此原則ヲ憲法ニ掲載シテ以テ其主旨ヲ明カニシ、且佛國ニ淵源シテ一般ニ敷及シ、議院ノ隨意ニ行フヲ得ル所ノ第一ノ豫算議決

權ノ主義ニ對シ之ヲ防止スルヲカムルヲ以テ便宜ナリトスベシ。

此ニ反シ第二ノ原則ハ直接ナル實際上ノ効用ヲ有シ、英國法ニ於テモ「テイキングビル」ヲ以テ認メタル禁止ヲ包含ス。又千八百六十九年ノ「セルビイ」憲法第六十四條ニ於テモ亦此レト同一ノ禁止アリ。

第二 左ニ列記スル事件ハ國會ノ承諾ヲ受クベシトノ規定ヲ設クルハ弊害ナキノミナラズ又國家ノ利益タルベシ。

(伊) 國債ヲ興スコト。

(呂) 國家財産ヲ賣却スルコト。

(波) 保證ヲ負擔スルコト。

然レドモ羅馬人種ノ憲法及普國憲法ニ於テ見ル所ノ「法律ヲ要ス」トノ語ヲ避ケザルベカラズ。何トナレバ此事タル行政上ノ處分ニシテ、法制ノ類ニ非ズ。而シテ此語ニ由テ意義錯謬ヲ來スモノナレバナリ。故ニ此處分ハ兩院ノ承諾ヲ受ルニ非ザレバ之ヲナスコトヲ得ベカラズトノ文ヲ以テ之ヲ掲グルヲ可ナリトス。

急迫ノ場合ノ爲ニハ千八百五十一年五月五日ノ改正李遜憲法第一百五條及「セルビイ」憲法第六十六條ニ擬シタル規定ヲ設ルヲ可トスベシ。

第四

豫算議決權ノ尤困難ナル問題ハ支出ノ確定是レナリ。元來法律上政府ノ權内ニ在ル收入ヲ以テ國務ヲ處理スルニ必要ナル費途ニ充ツルハ施政權ノ務ナリ。往昔英國法ニ據ルモ中獨逸諸國ノ憲法ニ從フモ皆然ラザルハナシ。英國ニ於テハ第十七世期ノ末葉ニ於テ始メテ議院ハ所謂「アツプロブリアチオンスクラウセル」(一定ノ費途ニ充ツベキ條款)ヲ以テ租稅承諾ノ際ニ行政ヲ制限セントシタリ。中獨逸諸國ニ於テハ議院ニ歸スル收入承諾ヲ議決スルニ當テ當然其必要ナルヤ否ヲ審查スルノ點ヨリ見レバ、議院ハ間接ニ支出上ニ勢力ヲ有スルガ如シト雖、巴威爾憲法第七章第三條乃至第八條、瓦敦堡憲法第一百一條第一百十二條、千八百十八年ノ巴丁憲法第五十三條以下ニ據ルニ當テ白耳義佛國ニ倣ヒ、豫算議決權ノ範圍ニ於テ直接ニ支出承諾權ヲ議院ニ與ヘタルコトナシ。予ハ第一ニ陳ベタル大旨ヲ執ル者ナレバ當分如此支出承諾權ヲ議院ニ與ヘザルノ意見ヲ提出スベシ。人或ハ予ガ説ヲ駁シテ曰ン、彼獨逸諸國ノ憲法ニ據レバ豫算モ亦議院ニ提出スベシト。然レドモ彼憲法ニ明言セル如ク(巴威爾憲法第七章ニ於テ「故ニ」ナル語ヲ用キ、瓦敦堡憲法第一百一條ニ於テ「爲ニ」ナル語ヲ用キタリ)此レ乃收入ノ承諾ニ關スル政府ノ發議ヲ證明スル爲ニスル者ニシテ、豫算全體ニ關シテ議院ノ議決ヲ取ル爲ニハ非ザルナリ。

此ニ反シ豫算法ヲ以テ確定シタル支出ノミヲ政府ニ許ス所ノ憲法ハ、反對ノ主義ヲ執ルコト世ノ普ク知ル所ナリ(白耳義第一百十五條、荷蘭第一百十九條、第二百十條、盧克山堡憲法第一百四條、獨逸

帝國第六十九條、普國第九十九條、西班牙第八十五條、葡萄牙第三百三十六條乃至第三百三十八條、千八百五十二年ノ同國法律第十二條第十三條、噠馬第四十九條、「ルメニヤ」第百十三條、希臘第六十條等。

此豫算議決權ノ弊害ハ世人ノ知ル所ナリ。今此權ヲ制限スルノ方法ヲ求ムルニ左ノ如シ。

(伊) 議院ノ承諾ハ單一ナル有益ノ支出ニ於テ之アルヲ要スレドモ、必要ノ支出ニ於テハ然ラズ。然レドモ此區別ハ猶價值ナキモノナリ。何トナレバ此レガ爲堅確ナル經界ナケレバナリ。

(呂) 英國ノ例ニ倣ヒ(「コンソリテーター」ト、フント) 支出ノ不動部分ヲ豫算中ヨリ分離シ、其有動部分ノミニ關シ毎年議院ノ承諾ヲ受クベシ。此考案ハ專「スタイン」氏ニ出タルモノニシテ、氏ハ國家豫算ト(不動部分) 政府豫算(有動部分) トノ區別ヲナサント欲シ、「グナイス」ト「ラーバント」ト「シユルチエー」ト「ワグネル」及其他數多有名ナル獨逸國法學者ノ贊成ヲ受ケタリ。然レドモ如何ナル支出ヲ不動部分トスベキヤノ詳細ノ說ニ至リテハ未ダ一轍ナラズ。但シ國家ノ法律上ノ支出(國債、帝室經費、多少異論アル所ノ官吏ノ俸給、恩給、法律上團結體及公院ニ與フル補助金等)ノ不動部分ニ屬スルコトハ諸家ノ說既ニ一定ニ歸シタリ。又他ノ學者ハ其他大體ニ於テ疑フベカラザル國家機關ノ制度ニ必要ナル定額ヲモ不動部分ニ算入シ、毎年承諾ヲ受クベキモノハ只々此支出ノ増額ト及他ノ國家ノ支出ニ限ルベシトスル者アリ。但シ此範圍ニ於ケル所謂經常豫算ニ從來實際ニ

之ヲ施行シタルノ國アルコトナシ。此ニ反スル困難ナル弊害論ハ「普國憲法改革論」第百九十葉乃至第百九十二葉ニ於テ切論シタルヲ以テ此ニハ之ヲ引用スルヲ以テ、足レリトス。然レドモ政府ノ法律上ノ義務ヲシテ定期ノ承諾ヲ受ケシメザルハ正當ナル考案ニシテ、年來議院ノ進歩シタル國ニ於テハ予ハ此防障ヲ以テ實際ニ於テ豫算議決權ノ濫弊ヲ制止スルニ十分ナリト認ム。

然レドモ他ノ一方ニ於テ豫算ノ爭議ハ通例法律上ノ義務ニ關スルモノニ非ザルコトヲ看過スベカラズ。此考案ノ價值タルハ政府ハ豫算ノ成立セザル場合ニ於テモ其支出ヲナスニ妨ゲナキガ故ニ、國家ハ豫算ノ拒否ニ依テ其命運ヲ危クスルコトナキニ在リ。而シテ自由論者モ亦此考案ニ同意ヲ表スル者多シ。何トナレバ豫算承諾ハ此レニ依テ始メテ議院ノ實用スルヲ得ル權利トナレバナリ。又英國ノ例ヲ以テカ明ナルガ如ク、議院ノ地位ハ此ニ依テ衰弱スルニ非ズシテ却テ鞏固ナルニ至ルベシ。故ニ予ハ第一ニ掲ゲタル理由ニ依リ此制限モ亦日本ノ爲ニ十分ナリトスルヲ得ズ。

(波) 獨逸帝國憲法ハ其第六十二條ニ於テ軍制支出豫算ヲ確定スルノ際、軍隊ノ法律上ノ組織ニ準據スル原則ヲ掲グ。若シ此原則ヲ擴張シテ法律上一切ノ組織ニ及ボストキハ、豫算議決權ヲ正當ニ施行スル爲有益ナル手段ヲ得タルモノナリ。予ハ固ヨリ此レニ依ルモ組織ノ區域内ニ於テ政府ト議院ノ間ノ一切ノ爭議ヲ除去スベシト謂フニ非ズ。何トナレバ現行ノ組織ヲ維持スル爲如何ナル費用ヲ要スルヤ否ニ關シテ、其說ヲ異ニシ得レバナリ。加之日本ニ於テハ從來法律ヲ以テ組織ヲ定メ

タルコト甚ダ少ナシ。予ハ軍隊及裁判所ノ編制ノ如キハ憲法施行前ニ必ず法律ヲ以テ制定セラレンコトヲ望ム。茲ニ國王ニ歸スル組織權ニ對シ豫算議決權ハ如何ナル地位ヲ占ムルヤノ問題アリ。予ノ所見ニ據レバ千八百六十九年二月三十日ニ「オイレンブルヒ」伯ヲ以テ普國政府ガ明言シタル主義ヲ正當ナリトス。其主義トハ即行政廳ノ組織ニシテ法律ニ基カザルモノハ勅令ヲ以テ制定スルヲ得ベシト雖、官廳ノ新設又ハ改革ノ爲ニ、政府ニ於テ全國ヨリ金額ヲ請求スルトキハ必ず國會ノ承諾ヲ要スト謂ヘル是レナリ。君主ハ所謂組織權ヲ有スルガ故ニ其組織ノ爲必要ナル金額ハ議院ニ於テ必ズ之ヲ承諾スベシ。又ハ一般ニ議院ノ承諾ヲ要セザルベシトノ推斷ニ至リテハ予ハ「サイデル」(巴威爾憲法論)及多數ノ獨逸國法學者ト共ニ議院ノ權利ト一致セザルモノト認ムルハ既ニ第二ニ於テ陳ベタルガ如シ。之ヲ要スルニ國王ハ承諾ヲ受ケタル金額内ニ於テハ其組織權ノ施行ヲ制限セラ、ルルコトナシト雖、此範圍外ニ於テハ議院ノ承諾ヲ求ムベシ。若シ此主義ヲ採用セラルハトキハ左ノ原則ニ基ク所ノ成文ヲ設クベシ。

豫算ヲ確定スルノ際ニハ法律又ハ法律上効力アル所ノ勅令ニ基ク陸海軍及官廳ノ組織ヲ以テ基址トスベシ。

然レドモ此原則モ亦統治權ノ牽制ニ對スル防障トナルニハ未ダ十分ナラズ。何トナレバ既ニ陳ベタル如ク國會ハ此原則上必要ナル支出ノ額ニ關シ、政府ト其意見ヲ異ニスルコトアルノミナラズ、

又政府ハ法律上ノ義務(呂ノ處ニ陳ベタルガ如シ)及上陳ノ組織ニ基ク支出ノ外尙莫大ノ費用ヲ要スルモノ數多アリ、此ガ爲ニ國會ノ自由ナル承諾ヲ受クルベケレバナリ。

(七) 李遜憲法第百三條、千八百五十一年五月五日李遜改定憲法第五條第五項ニ他ノ方法ヲ掲グ。此憲法ニ據レバ、兩院ノ一院ニ於テ少クモ三分ノ二以上否決シタルトキ、始メテ其承諾ヲ拒タルモノト見做ス。是レ政府ノ地位ニ於テ一層利益アルコト明カナリ。抑李遜憲法ハ凡テ他ノ法律案ニ關シテモ同一ノ規定ヲ掲グルガ故ニ(第九十二條)豫算承諾上ニ此主義ヲ及ボシタルハ理ニ背クモノニ非ズ。然レドモ日本憲法ニ於テハ此主義ヲ執ラズシテ多數決ノ原則ヲ採用シタルガ故ニ、豫算案ニ關シテノミ特ニ例外ヲ設クルトキハ、輿論ハ政府ヲ嫌忌シテ不服ヲ鳴ラスニ至ラン。

(保) 然レドモ上ニ陳ベタル考案ハ凡テ豫算ノ細別ニ伴隨スル流用(ウキルマン)ノ禁ヨリ生ズル困難ヲ避ケ得ルモノニ非ズ。此禁ハ二三ノ憲法ニ明言セル所ニシテ(白耳義第百十六條、普國會計検査院法第十九條)論理上議院ノ支出權ヲ受ルヲ要スル國ニ於テハ、流用ヲ以テ豫算超過ト見做シ、國會ノ承認ヲ受クベキハ固ヨリ論ヲ待タズ、豫算ノ過度ナル細別ニ伴隨スル此原則ヨリ生ズル弊害ニ關シテ「グナイスト」氏ハ其普通ニ行ハル、所ノ法律及豫算ト題スル著書第百七十四丁以下ニ於テ適切ニ證明シタリ。又予ニ示サレタル貴問ニ於テ既ニ簡明ニ陳ベラレタル所ナリ。此ニ重要ナル點ハ細目ノ程度ニ在リト雖、從來會テ之ヲ發見シタル者ナシ。他ノ一方ヨリ見レバ議院ト政府

ノ間ニ爭議ノ絶エザルハ即此問題ニ關スルモノニシテ、豫算爭議ノ此點ヲ離レズ、且立法ノ動搖已マザル佛國ヲ以テ適例トナスヲ得ベシ（「マウルスプロック」佛國行政字典中ノ豫算ト題スル簡明ナル章ヲ參看スルニハ第二百八十八丁第四號第五號第二十號第二十一號第二十三號ヲ繙クベシ）千八百二十七年九月一日ノ法律、其後又千八百五十二年乃至千八百六十一年ノ法律ヲ發スル前ノ佛國ニ於ケルガ如ク、各省部門ニ依テ豫算ヲ議決シ、其豫算内ニ於テ國王或ハ皇帝ノ允許ヲ得、或ハ其允許ヲ得ズシテ無限ノ流用ヲ許スハ固ヨリ簡單ナルガ如シ。然レドモ佛國ノ歴史ニ徴スルニ、此主義ハ勢必ズ敗政ノ弊夫ヲ招キ、且議院ニ與ヘタル支出承諾權ト調和スベカラザルノ矛盾ヲ生ズルガ故ニ、訴訟願訴及軋轢ノ已ム時ナキニ至ル。又他ノ一方ヨリ見レバ實用ニ適スル一定ノ分界ヲ發見シタルコト未ダ曾テ之アラズ。千八百三十一年一月廿九日及千八百七十一年九月十六日ノ佛國法、盧克山堡憲法第五條、荷蘭憲法第二百一十一條、普國會計檢查院法第十九條ニハ如此分界ヲ定ムルコトナク、又問題ヲ論究シタル著述家（「サイドレル」豫算及豫算議決權ト題スル著書第三十九丁以下ニ於テ此問題ノ編述ヲ參看スベシ）モ亦此分界ヲ發見スルコト能ハザルナリ。大體ヨリ論ズレバ中庸ヲ以テ正當ナルモノトスト謂フヲ得ベシト雖、此關係ニ於テハ專ラ議院ノ節度ニ一任スルノ外アルコトナシ。是レ殊ニ英國及奇異ニモ佛國ニ於テハ獨逸國ニ反シテ實際ニ行ハル、所ナリ。但支出承諾權ヲ與ヘラレタル幼穉ノ議院ニ向テ節度ヲ望ムベカラザル狀況ハ、予ヲシテ當分此權利ヲ與ヘ

ザルヲ可トスルノ說ヲ執ルニ至ラシメタリ。

若シ憲法ニ於テ如此權利ヲ與フルトキハ左ノ規程ヲ設クルヲ可ナリトスベシ。

豫算ハ款毎ニ議決ス。

款ハ國費ノ大ナル部類ヲ包括ス。

議院ノ承諾ヲ受ケズシテ流用ヲナスヲ得ルハ陸海軍ノ行政部内ニ限り、其他ノ行政部ニ於テハ

各款内ニ限ル。

其他ノ事ハ予ハ後來ノ進歩竝ニ特別ノ法律ニ一任スベシト認ム。

（邊）其他猶財政ニ關スルノ困難ニシテ兩院制ヨリ生ズル者アリ。何トナレバ英國ニ於ケル如ク

上院ノ議決ヲシテ純然ノ方式ニ與ラシムルヲ除ク外、兩院制ニ依テ豫算ヲ成立シ難カラシムベレバナリ。予ノ見ル所ハ兩院ノ意見互ニ異ナル場合ニ於テハ、其可否ノ數ヲ通算スル憲法ヲ贊成ス。（瓦敦堡第百八十一條、巴丁千八百十九年ノ第六十一條、瑞典第六十九條、同國々會組織法第六十五條）

（登）尤困難ナル問題ハ豫算ノ議一致セズ、或ハ一定ノ期限内ニ其議一致セザル場合はレナリ。數多ノ國ノ憲法ハ此場合ノ爲一モ規定スル所ナク、豫算ニ依テ收入支出ヲ確定スルハ國家機關ノ憲法上義務ナリトノ憲法上ノ規定ヲ以テ足レリトセリ。議院政治ヲ行フ國ニ於テハ通例實ニ此規定ヲ以テ足レリトスベシ。何トナレバ議員ノ多數ハ其黨中ヨリ出タル內閣ニ向テ必要ナル收入ヲ拒否ス

ルコトナク、或ハ議院ノ解散若クハ内閣員ノ辭表ヲ以テ双方ノ一致ヲ恢復スレバナリ。此要件ノ存セザル國、殊ニ普國ノ例ヲ以テ明カナルガ如ク、統治權ノ強大ナル國ニ於テハ豫算爭議ノ場合ニ於テ如何ナル手段ヲ施スベキヤノ問題アリ。

收入ニ關シテ意見ヲ陳ベンニ、第二ノ所ニ掲ゲタル普國制度ヲ行フ國ニ於テハ一モ困難アルコトナシ。即永遠ノ法律ニ基ク租稅ハ其他ノ收入ト共ニ縱令豫算成立セザルモ繼續シテ之ヲ徵收スベシ。其外ニ法律ニ基カズシテ豫算ノミニ基キ、或ハ臨時承諾シタル有動租稅ニ限リテハ豫算ニ依ラズシテ之ヲ徵收スルヲ得ズ。日本ニ於テハ現行ノ收入ヲ以テ當分政務ヲ繼續スルニ十分ナルガ故ニ豫算不成立ノ時ノ爲ニ豫防スルノ必要ナカルベシ。

此ニ反シ支出ニ關シ鄙見ヲ陳ベンニ、或ル黨派數多ノ法學者ノ說ニ於テハ、凡ソ政府ハ豫算ナクシテハ支出ヲナスノ權ナキガ故ニ、豫算ハ各種支出ノ法律上要件ナリト主張スレドモ、又或ル黨派及多數ノ有名ナル獨逸國法學者（「グナイスト」「ラーバント」「シユルチエー」「マイエツト」）ハ政府ハ豫算ナキト雖、政務ヲ繼續スル爲ニ必要ナル支出ヲナスノ權ヲ有シ、只其責任ニ變更ヲ生ズルノミト主張セリ。予ハ此國法學者ノ枝葉ニ渉ル異說ヲ茲ニ講究セズ。又其主義ニシテ憲法ノ成文ト一致スルヤ否ヲモ審查スルヲ欲セズ。世人ノ知ル如ク普國政府ハ憲法爭議ノ時代ニ於テ第二ノ主義ヲ執リタレドモ、豫算ナキ行政ハ憲法ニ合ハザルガ故ニ、遂ニ國會ニ向テ「インデムニテート」ヲ

請求シタル所ナリ。

今ヤ日本ニ於テハ獨逸ノ國法主義ヨリハ佛國主義却テ廣ク流傳シタルガ故ニ、既ニ國會ニ支出承諾權ヲ與フルトキハ上陳第一ノ主義、即佛國主義ニ恐ルベキ多數ノ同意者ヲ見ルハ必然ノ事ナリ。故ニ憲法ニ於テ此權ヲ議院ニ與ヘントスルトキハ、又豫算承諾ハ政務ヲ繼續スル爲國會ヨリ政府ニ與フル全權ノ意義ナリトスル所ノ偏僻ノ主義ニ對シ、憲法ヲ以テ之ヲ豫防セザルベカラズ。而シテ此豫防ハ豫算ニ關シテ政府ト國會ノ議一致セザル場合ニハ、支出ノ爲ニ如何ナル手段ヲ施スベキヤヲ憲法ニ於テ十分明瞭ニ掲グルノ外良策ナカルベシ。

南獨逸諸國ノ憲法（巴威爾第七章第七條、巴丁第六十二條、瓦敦堡第百十四條）ニハ此關係ニ於テ一モ實際ニ適スル模範ヲ見ズ。此等ノ國ノ憲法ハ只一定ノ時間ニ於テ租稅ノ繼續徵收ヲ許スノミ。今普國ノ制度ヲ採ルニ於テハ上ニ陳ベタル如キ豫防手段ヲ必要トセザルベシ。又索遜豫算議決權ニ關スル規定ノ如キハ政府ニ廣大ナル餘地ヲ與フルモノニシテ（憲法第百三條、千八百五十一年五月五日ノ改正憲法第五條、千八百六十年十一月廿七日ノ法律第一條及第二條）專收入ノ問題ニ着目シタルナリ。千八百六十六年ノ「ルメニー」憲法第百十三條、千八百六十九年ノ「セルビー」憲法第六十五條及千八百七十六年ノ西班牙憲法第八十五條ハ一定ノ期限内ニ豫算ノ成立セザル場合ノ爲、最後ニ協議シタル豫算ヲ繼續セシムルノ點ニ於テ採用スベキ前例タリ。然レドモ此等ノ憲法ハ前豫

算ハ通例經常支出ニ關シテノミ適用スルヲ得、其支出ノ増額ヲ必要トシ、又最後ノ豫算ニ於テ豫期セザリシ國家ノ利益ノ爲臨時ノ支出ヲ必要トスルノ場合ニ適セズ。故ニ予ハ「ラーバント」氏ノ説及于八百五十年十二月十六日ノ普國內閣決議（シユルチエー國法第二卷第四百四十五丁）ニ倣ヒ、左ノ規定ヲ提出セント欲ス。

一期ノ爲一定ノ期限内ニ豫算ノ叶議調ハザルトキハ、政府ハ以前ノ豫算ニ掲ゲタル經常行政ノ支出（オルジナリーウム）ヲナスノ權ヲ有ス。此支出ノ増額並臨時ノ需用ニ充ル支出（エキストラオルジナリーレン）ハ其支拂ニ關スル法律上義務ノ存スルカ、又ハ其支出ヲ猶豫スルニ於テハ行政ノ秩序ニ關シ、若クハ其他重要ナル國家ノ利益ニ關スル危險ヲ生ズルガ故ニ、勅令ヲ以テ之ヲ確定シタルニ非ザレバ之ヲナスコトヲ得ズ。

第五 以上論究シタル豫防手段ヲ施スニ於テハ議院ノ支出承諾權ニ伴隨スル危險ノ一分ヲ避クルヲ得ベシト雖、上陳ニ於テ既ニ明カナルガ如ク、國權ノ著大ナル制限及爭議ノ淵源ハ猶依然トシテ存在ス。故ニ予ハ後來ノ爲日本ニ於テ如此權利ヲ與フベカラズト信ズ。然ルトキハ政府ハ法律上現行ノ收入内ニ於テ全ク自由ニ支出ヲナスヲ得、又君主ノ組織權及豫算科目ノ經界ニ關スル問題並豫算不成立ノ爲必要ナル豫防手段ハ其必要ヲ失ヒ、政府ハ唯現行ノ收入ヲ増額スルヲ要スルトキニ於テノミ國會ノ承諾ニ檢束セラルベキナリ。予ガ第四ニ提出シタル考案ハ國會ニ支出承諾權ヲ與フ

ル場合ノ爲ニ設ケタルモノナリト知ルベシ。此主義ニ反對スル者アラバ之ニ對ヘテ言ハント欲ス、曰ク英國及獨逸國ハ立憲制ニ變遷スルノ際、國會ノ制限アル權利ヲ以テ満足シ、收入承諾權ハ後來ノ進歩ナル豫算議決權ノ起源ナリシト。

然レドモ日本ハ整頓シタル豫算ノ制度ヲ備ヘ、現今既ニ毎年豫算ヲ調製スルガ故ニ又其全體ニ於テ之ヲ國會ノ議ニ付シ、國會ヲシテ收入支出ノ一切ノ管理ニ關スル意見及希望ヲ皇帝ニ奏上スル權ヲ有セシメ、皇帝ハ國會ノ建議ヲ精密ニ審査スルノ明文ヲ憲法ニ掲グルヲ得ベシ。但シ予ノ考案ニ依レバ議決ノ權ハ政府ニ於テ現行ノ租稅ヲ増額シ或ハ新稅ヲ興サンコトヲ求ムルトキニ非ザレバ之ヲ國會ニ與フベカラザルナリ。

豫算ハ兩院ノ議ヲ經タル後勅令ヲ以テ確定シ、法律ノ爲定メタル方式ニ依テ之ヲ發布スベシ。是レハ政府ノ財政ニ必要ナル標準ヲ與ヘ、一ハ過日提出シタル意見ニ從ヒ、國會ニ廣大ナル參與權ヲ與フルニ於テ其財政監督ニ必要ナル標準ヲ與フル爲ナリ。若シ豫算ノ外ニ支出セントスルトキハ必ズヤ勅令ヲ以テ之ヲ許スベキナリ。

既ニ過日論究シタル普通ノ原則ニ從ヘバ、豫算ヲ確定シ其踰越ヲ許可スル勅令ハ法律ノ束縛ヲ受クベキガ故ニ、憲法上國會ノ承諾ヲ要スルモノニ對シ專斷ヲ以テ決定スルヲ得ザルハ固ヨリナリ。又此收入承諾權ノ成文ヲ設クルハ困難ナルニ非ズ。且此ヨリ生ズル所ノ制度ハ簡明ニシテ行ヒ易キ

モノナリ。而シテ此制度ノ日本現今ノ狀況ニ適スルコトハ予ノ信ジテ疑ハザル所ナリ。

千八百八十七年六月二十日

ア・モツセ拜

グラーフ、アルニムノ言ニ曰ク、政府ヲシテ國會ノ議決ニ服從セシメント欲スルノ目的ハ歲出拒否上ニ於テ充分之ヲ達スルヲ得ベシト。

グラーフ、リットベルグノ言ニ曰ク、歲計豫算ノ拒否ニ由ル政府ニ對スル國會ノ不信用議決ハ、政府ヲシテ國會ノ意見ニ從ハシムル乎、或ハ國會ヲ解散シテ之ヲ國民ニ控訴セザルベカラズト。

千八百六十二年以來斯ノ如キ駁論ノ續々提出アリシモ、皆唯各個人ノ思考ニ止マリ、而シテ比斯馬克氏ハ既ニ千八百四十九年以來、憲法ハ國會ニ理論上ノ各大權理ヲ與フベキモ、其意見ヲ強行シ得ベキ實際的ノ方便ヲ與フベカラズトノ主義ヲ鞏固ニ保持シタルガ爲メ、悉ク無効ニ屬シタリ。而シテ千八百六十二年ニ於テ大ニ抵抗論アリシニ拘ラズ、比斯馬克氏ハ右ノ主義ヲ實行シ、新豫算法律ノ一致制定ニ至ルマデ舊豫算法律ヲ實施シタリキ。是レヲ以テ之ヲ觀ルトキハ、政府ガ國會ノ豫算權ヲ虛權タラシメタルコト明瞭ナリトス。然レドモ國民ハ之ガ爲メ激發シテ極端論ヲ逞フシ且國

會ニ無限ノ租稅認許權ヲ與ヘント欲スルガ如キ舉動ニ出デザリヤ。

斯ノ如キ抗爭及之ニ隨伴スル所ノ危險ヲ避ケント欲スルニハ、宜シク繼續的政務ニ要スルノ費用ヲ總括スル通常歲出豫算ト臨時歲出豫算トヲ區別スベシ。

通常歲出豫算ヲ變更スル場合ニ於テハ無論政府及國會ノ一致ヲ要スベシト雖、其一致ニ至ルマデハ舊豫算ニ據ルコトヲ得ベシ。右ニ反シ臨時歲出豫算ハ國會ノ之ヲ否決スル場合ニ於テハ之ヲ實行スルヲ得ベカラズ。

皮相ノ觀察上ニ於テハ、此區別ハ英國ノ主義即チ「コンソリダーテット、フオンド」(準備財本)ト毎年國會ノ認許ヲ要スベキ費途トノ區別ニ於テ充分ナルガ如シト雖、是ハ唯淺薄ナル觀察ニ止マリ、未ダ其適實ヲ得タルモノト云フベカラズ。今其然ル所以ヲ論明スレバ、前ニモ既ニ論記セルガ如ク、英國ノ準備財本ハ専ラ國家債主ノ利益、國王ノ威德及一定高等官吏ノ獨立ヲ毎年ノ認許ヲ要セザル確定金額ヲ以テ鞏固ナラシメント欲スルノ目的上ニ成立シ、其他ノ各歲出例ヘバ軍隊及軍艦等ノ經費ハ右ニ反シ總テ國會ノ許否ニ委スル所ナルモ、余輩ノ所謂通常歲出及臨時歲出ノ區別ハ、元來國家ノ成規上ノ歲出ハ常ニ同一ナルベキモ、中ニ就キ二三ノ費目ハ右ノ例外トシテ變更ナキ能ハズ。故ニ此等ノ費目ハ毎年新規定ヲ要スベシト云フ普通ノ條理ニ從フ所ナリ。

繼續的ニアラザル一時ノ事項ニ對シ臨時歲出ヲ要スルノ件ハ是レ實ニ避クベカラザルノ件ニシ

テ、若シ之ヲ許サルニ於テハ決シテ充分ノ政ヲ施行シ得ベカラズ。

國家ノ合法上ノ需用ニ屬スル各歲出科目、例ヘバ兵官吏軍艦及其他ノ歲出科目ハ是レ定費タルコト無論ナリト雖、前以テ其年々ノ金額ヲ確定スル能ハズ。常ニ多少ノ増減アルヲ免ルベカラズ。故ニ是等ノ經費ニ對シテハ數年間ノ平均ニ歸スル定額ヲ設ケ、國會ヲシテ毎年之ニ干與セシムルコトナク、其要望或ハ訴願ノ取捨ハ一切政府ノ意見ニ從フモノト爲スニ如カズ。

然レドモ政府ガ國會ノ豫算權濫用ヲ防禦センガ爲メ、經費ノ性質ニ戻リ常ニ變更ヲ來スベキ不定費目ヲ機械的ニ確定費目ト爲サンコトヲ試ムルガ如キハ、是レ其本來ノ主義ヲ誤ルモノト云フベシ。抑モ政府ハ財政上ノ利益ニ向テハ可及的經費節減ヲ謀ルベキモノナルニ拘ラズ、其政務ヲ自由ナラシメンガ爲メ通常歲出豫算ヲ可及的増加シ、實際ノ需用ヲ顧ミズ其減少ヲ避ケンコトヲ謀ルノ弊害ヲ來タサンコト蓋シ之レナキヲ保スベカラズ。例ヘバ大臣中或ハ後ニ至リ臨時費ノ認許ヲ求メザルベカラザルガ如キコトナカラシメンガ爲メ、豫ジメ大藏大臣ニ向テ定額ヲ可及的増加センコトヲ求ムル者ナキヲ保スベカラズ。

然レドモ國家ノ歲入ハ決シテ毎年増加スルモノニアラザルヲ以テ、若シ政府ガ徒ニ定額ノ増加ヲ謀ルトキハ、其本然ノ目的ヲ害スルニ至ルベシ。故ニ專ラ適實ヲ旨トスルノ賢明行政官ニ於テハ斯ノ如キ弊害ヲ避ケンコトヲ勉ムルモノナリ。然ルニ國會ニ於テハ政府ニ生ズル右ノ弊害ニ反シ、可及的通常歲出額ヲ減少センコトヲ謀ルガ爲メ、往々緊要ナル歲出ヲ確定的通常費ト爲スヲ妨グルコトナシトセズ。

又他ノ一方ヨリ論ズルトキハ、單ニ通常歲出及臨時歲出ノ機械的區別ノミニ由テ其目的ヲ達スルヲ得ベカラズ。何トナレバ實際上臨時歲出ニシテ國家ノ存立上缺クベカラズ、若シ之ヲ却クルトキハ當ニ政府ヲシテ非常ノ困難ヲ感ゼシムルノミナラズ、直接ニ國家ノ安全幸福ヲ害スルモノアレバナリ。然レドモ國會ノ權理濫用ヲ豫防セント欲スルニハ此區別ヲ措テ他ニ良法アルベカラズ。

故ニ一定ノ歲出科目ヲ毎年ノ認許上ヨリ取除クノ件ハ甚ダ利益アル所ナルヲ以テ、恐ラク何人ト雖之ヲ非難スル者ナカルベシ。例ヘバ一政府ノ繼續間ニ於テ皇室費ヲ確定スルノ件ハ是レ國君ノ位及威德ヲ尊重スルノ理ニ適シ、又各種國債ノ整理及償却方法ヲ法律上確定シ、之ニ對スル歲出ニ向テハ毎年ノ認許ヲ要セザルコト、是レ債主ノ安全ヲ保護シ且公債ノ信用ヲ鞏固ナラシムルノ理ニ適スルモノナリ。然レドモ此等ハ唯一費目タルニ止マリ、未ダ以テ定額金ト認定スルヲ得ベカラズ。

豫算案議決權ノ件

第一期議會以來ノ慣例ニ依レバ、政府提出案ハ先キニ之ヲ受取リタル甲議院ニ於テ之ヲ修正議決シタルトキ、其議決案ノミヲ乙議院ニ送付シ、乙議院ハ甲議院ノ議決案ヲ印刷シテ之ヲ議員ニ配布セリ。故ニ政府提出案ハ甲議院ニ於テ之ヲ保管セリ。然ルニ乙議院ニ於テ單ニ甲議院ノ議決案ノミヲ所有スレバ、政府提出案ノ如何ヲ見ルノ便宜ヲ缺クガ爲ニ、甲議院事務局ヨリ乙議院事務局ニ轉送シテ之ヲ保管セシムルモノトス。

以上ハ凡テノ法律案及豫算案ニ適用セリ。而シテ豫算案ニ付テハ法律案ト異ナルモノナリト云フ說アレドモ決シテ然ラズ、現ニ第一期ノ貴族院ノ豫算會議ニ於テハ衆議院議決案ノミ受領シタリ。而シテ其旨趣ニ基キテ豫算案ヲ議決セリ。

又第一期豫算會議ニ於テ榎村男爵ヨリ行政裁判所經費ヲ政府提出ノ金額ニ復セントスルニ當リ、政府提出案ニ復活スルト云ハズ、同氏ノ修正案トシテ之ヲ議場ニ提出シ、議長モ亦修正案トシテ表決ニ付シタリ（速記録六八六葉）

又加藤氏ニ於テ帝國大學經費ヲ政府提出金ノ額ニ復セントスルニ當リ、之レモ亦政府提出案ニ復

活スルト云ハズ、同氏ノ修正案トシテ之ヲ議場ニ提出シタリ（速記録六九〇）

明治二十五年臨時總理大臣代理 ノ演說

總理大臣臨時代理 明治二十五年十二月二日

諸君、余等曩ニ至尊ノ大命ヲ恪ミ、國務大臣タルノ重任ヲ辱クシ、嗣後僅ニ數閱月、而シテ今ヤ本年議會ノ期ニ及ビ、政府將來ノ方針ヲ諸君ノ前ニ開陳スルコトヲ得ルハ余等ノ職務上ニ於テ光榮トスル所ナリ。

政府ノ大方針ハ内、憲法ノ條章ニ遵由シ、行政百般ノ機關ヲシテ憲法的ノ動作ヲ爲サシメ、以テ益々其改善ヲ圖リ、上ハ 宏謨ヲ遵奉シテ國家ノ基礎ヲ鞏固ナラシメ、下ハ人民ノ權利ヲ保全シテ其慶福ヲ増進シ、外列國ニ對シテ國光ヲ宣揚シ、以テ其終局ノ目的ヲ達センコトヲ欲スルニ外ナラザルナリ。

百般行政ノ改良ハ之ヲ言フヤ易シト雖モ其實行ヲ遂グルハ素ヨリ至難ノ業ナリ。然レドモ余等ノ庶幾スル所ハ其事業ノ至難ナルガ爲ニ因循苟且ニ付シテ止ムベキニアラズ。苟モ國家ノ進運ヲ妨害

スルノ虞アルモアラバ斷ジテ之ヲ排除シ以テ其整理ヲ企圖スルコトヲ躊躇セザルノ決心ナリ。

凡ソ整務ノ改良整理ハ遠ク將來ノ利害ニ察スル所ナカルベカラズ。故ニ其効果ヲ一朝ニ收ムルハ難シ。必ズ漸ヲ追テ以テ奏効ヲ期セザルヲ得ズ。而シテ一國ノ事業ヲ經營スルハ固ヨリ上下協同ノ力ニ倚賴セザルベカラザルナリ。諸君幸ニ政府誠意ノ存スル所ヲ諒察セラレンコトヲ希望ス。

今坤球ノ全圖ヲ觀レバ、寰宇國ヲ成スモノ星ノ如シ。而シテ其國力ヲ養成シ、内ハ百般ノ事業ヲ振作シ、外ハ貿易通商ノ利ヲ競ハザルナシ。輒近數十年ノ間各國多少ノ軋轢紛擾ナキニアラズト雖ドモ、其大勢ニ於テ互ニ泰平ヲ裝ヒ、務メテ修交ヲ敦フス。若シ眼光ヲ轉ジテ他ノ一方ヲ觀レバ、則チ國力ノ限リヲ盡クシテ兵備ヲ完實シ、以テ各々自衛ノ道ヲ講ゼザルナキヲ知了スベキナリ。蓋シ宇内歴史アリテ以降今日ノ如ク旺盛ナルハ前古未ダ其比ヲ見ザル所ナリ。

本邦ノ如キ殊ニ兵備ノ急要アリテ、而カモ海軍ノ擴張ハ其急中ノ急ナルモノナリ。抑々海軍擴張ノ事タル、之ヲ陸上ニ於ケル防備ニ比スルニ事實上及經濟上ニ於テ至難ノ業ナルヲ見ルト雖ドモ、亦國勢上實ニ一日ヲ緩フスベカラザルノ最急務ナルヲ信ズ。故ニ政府ハ本年ノ豫算ニ於テ海軍擴張ノタメ船艦製造費トシテ巨額ノ支出ヲ要求シ、以テ功ヲ數年ニ期セントス。政府ハ諸君ノ國家ノ大計ヲ念フテ之ニ協賛セラレンコトヲ希望セザルヲ得ズ。

外交ノ事ハ舊ニ依テ益々輯睦ヲ加フ。吾人ハ内ニ於テ百政ノ釐正ヲ努ムルト同時ニ於テ、外ニ對

シテ多年期望セル條約改正ノ大業ヲ決行セザルベカラザルハ更ニ多言ヲ要セズト雖ドモ、此問題タル殊ニ慎重ヲ要ス。故ニ維新以還ノ宿望ヲ達セント欲セバ、余等ハ先ヅ國民ノ意向ヲ歸一ニスルノ必要アルヲ知ル。而シテ之ヲ略言セバ條約改正ノ主要ハ凡ソ國トシテ有スベキノ權利ヲ得、凡ソ國トシテ盡クスベキノ義務ヲ完クスルニ在リ。

政府ハ國家ノ進運ヲ計リ、國民ノ負擔ニ付經濟上多少ノ變更ヲ施スノ要アルヲ察シ、此ニ農民ノ負擔スル田畑ノ地價ニ於テ偏重失衡ノ甚シキモノヲ低減セントス。抑々地價ノ均一ヲ缺ケルハ獨リ民間ニ於テ物議アルノミナラズ、政府ニ於テモ亦夙ニ其偏重アルヲ憂ヒ、常ニ其調査ヲ怠ラザリシ。而シテ今ヤ其結果トシテ將ニ之ヲ決行セントスルノ機運ニ逢着シタリ。蓋シ各地風土ノ同ジカラズ、運輸交通ノ便否、土壤ノ肥瘠、物價ノ高低、勞力ノ多少等皆異同アリ。其收穫スルノ所ノ多寡亦之ニ隨フヲ以テ到底完全ノ平衡ヲ得ルノ難キハ又衆論ノ趨歸ヲ一ニスル所タルニ拘ラズ、全國ヲ通ジテ殊ニ偏重失衡ノ甚シキ其負擔ニ堪フベカラザルモノハ早晚之ヲ救治セザルベカラズ。唯ダ之ヲ決行スルニ於テ國家ノ生存ニ必要ナル國費ヲ減削スル能ハザルヲ以テ、勢ヒ彼ニ減ズル所アレバ則チ此ニ増ス所ナルベカラズ。則チ歲計上不足スル所ハ他ノ歲入ヲ増加シテ以テ之ヲ補充セントス。是レ國計上復タ止ムヲ得ザル所ナルヲ信ズ。

其他全國巨川ノ河身改築堤防修築等ノタメニ現在國庫ヨリ支出スル金額ハ實際ノ需要ニ足ラズ、

隨テ修レバ隨テ壞レ、徒ニ目前ノ小工事ニ齟齬シテ奏効ヲ期年ノ後ニ成スノ大計畫ナシ。仍テ是等國家ノ急要ニ應ズル費額ノ支出モ豫メ規定セザルコトヲ得ズ。其詳細ノ説明ニ至テハ時機ヲ待ツテ主務大臣應ニ躬ヲ辯明スル所アルベシ。

諸君余ハ終ニ臨ミ特ニ諸君ノ清聽ヲ請ハントスル一事アリ。吾人日本國民ハ祖先以來忠孝ノ志厚ク、其國ヲ愛シ其公ニ奉ズルノ心ニ富ムハ光輝アル帝國ノ歴史ニ明徴スベキナリ。而シテ維新中興ノ後僅ニ二十餘年ニシテ、長足進歩セルコト夫レ此ノ如ク、又其成績ノ見ルベキモノ此ノ如ク顯著ナルハ宇内列國ノ與ニ歎稱措カザル所ニシテ、深ク其事歴ヲ探究スルトキハ吾人自ラ驚喜ニ堪ヘザルモノアリ。然リト雖ドモ國家ガ國民ニ望ム所ノモノ亦決シテ此ニ止マラズ、吾人ハ進ンデ國力ヲ發達シ、國威ヲ宣揚シ、以テ維新中興ノ宏謨ヲ成就セザルベカラザルコト即チ是ナリ。

諸君、試ニ地圖ヲ展ベテ萬國ノ形成ヲ看一看セヨ。人口四千萬ヲ有シ、而カモ其國民ハ忠實義勇僅ニ二十餘年間ニ於テ大ニ國威ヲ恢弘シ、宇内ノ強國ト相駢進スルコト本邦ノ如キモノ果シテ安クニ在ル乎。吾人ハ生レテ此盛時ニ逢フ、至幸何物ノ之ニ加ヘンヤ。宜ク國家ノ進運ヲ補ケ、國家ノ地位ヲ高クスルヲ以テ自任セザルベカラズ。而シテ之ヲ爲ス唯ダ上下協同ノ覺ラザルベカラザルハ既ニ叙述シタルガ如シト雖ドモ、今忠誠ナル諸君ニ告グルニ此事ヲ以テスルハ一片ノ微衷自ラ禁ズル能ハザルアレバナリ。

諸君、我帝國議會ハ、天皇陛下ノ立法上ノ詢謀府ナリ、而シテ諸君ハ國民ノ輿望ヲ荷フテ吾人ガ唯一ノ目的ナル國家ノ休戚ニ關スル各般ノ問題ヲ公議スルノ地位ニ居ル者ナリ。余ガ今更ニ之ヲ言フハ敢テ他意アルニアラズ、凡ソ立憲國家ニ於テ必要缺クニカラザル議會ハ實ニ宇内各國ノ瞻望スル所、其國威ノ消長國權ノ伸縮ヲ品評セラル、所ナルヲ以テナリ。余等、至尊ノ大命ヲ遵奉シテ帝國ノ議會ニ莅ミ、政府ノ方針ノ概要ヲ茲ニ開陳スルヲ得タルハ余等ノ最モ欣榮トスル所ナリ。

在廷臣僚及帝國議會各員ニ宣スル詔勅

明治二十六年二月十日

在廷ノ臣僚及帝國議會ノ各員ニ告グ。

古者皇祖國ヲ肇ムルノ初ニ當リ、六合ヲ兼ネ、八紘ヲ掩フノ詔アリ。朕既ニ大權ヲ總攬シ、藩邦ノ制ヲ廢シ、文武ノ政ヲ革メ、又宇内ノ大勢ヲ察シ、開國ノ國是ヲ定ム。爾來二十有餘年、百揆ノ施設一ニ皆祖宗ノ遠猷ニ卒由シテ以テ臣民ノ康福ヲ増シ、國家ノ隆昌ヲ圖ラムトスルニ外ナラズ。朕又議會ヲ開キ會議ヲ盡シ以テ大業ヲ翼贊セシムコトヲ期シタリ。而シテ憲法ノ施行方ニ初步ニ屬ス。始ヲ慎ミ終ヲ克クシ、端ヲ今日ニ正シ、大成ヲ將來ニ期セザルベカラズ。顧ルニ宇内列國ノ進勢ハ日一日ヨリ急ナリ。今ノ時ニ當リ紛争日ヲ曠クシ、遂ニ大計ヲ遺シ以テ國運進張ノ機ヲ誤ルガ如キコトアラバ、朕ガ祖宗ノ威靈ニ奉對スルノ志ニ非ズ。又立憲ノ美果ヲ收ムルノ道ニ非ザルナリ。朕ハ在廷ノ臣僚ニ信任シテ其ノ大事ヲ終始セシムコトヲ欲シ、又人民ノ選良ニ傍籍シテ朕が日

夕ノ憂虞ヲ分ツコトヲ疑ハザルナリ。憲法第六十七條ニ掲ゲタル費目ハ既ニ正文ノ保障スル所ニ屬シ、今ニ於テ紛議ノ因タルベカラズ。但シ朕ハ特ニ閣臣ニ命ジ、行政各般ノ整理ハ其ノ必要ニ從ヒ除ロニ審議熟計シテ遺算ナキヲ期シ、朕ガ裁定ヲ仰ガシム。

國家軍防ノ事ニ至テハ苟モ一日ヲモ緩クスルトキハ或ハ百年ノ悔ヲ遺サム。朕茲ニ内廷ノ費ヲ省キ、六年ノ間毎歲三十萬圓ヲ下附シ、又文武ノ官僚ニ命ジ、特別ノ情狀アル者ヲ除ク外、同年月日間其ノ俸給十分一ヲ納シ、以テ製艦費ノ補足ニ充テシム。

朕ハ内閣ト議會トニ傍リ立憲ノ機關トシ其各々權域ヲ慎ミ、和協ノ道ニ由リ、以テ朕ガ大事ヲ輔翼シ有終ノ美ヲ成サムコトヲ望ム。

內閣議會和衷協贊ヲ旨トスル閣臣ノ申合

附 詔 勅 草 案

勅書ヲ尊奉スルハ政府議會均シク其最大義務トセザル可ラズ。而シテ勅書中最モ重キ御主旨ハ和協ノ實ヲ舉グルニ存スルヲ以テ、政府議會共ニ前日ノ論議ヲ固執セズ、議會ハ多額ノ金額ヲ減削セントシタルコトヲ固執セズシテ、政府ノ同意スル限ニ於テ協贊ヲ表シ、政府ニ若干金額ニシテ現金ノ行政事務上ニ障碍ヲ與ヘザル區域ニ於テ之ニ同意スルトキハ茲ニ和協ノ實ヲ舉ルコトヲ得ン。

博 有 黑

文 朋 田

警 巖 象 宗 敏 景 國

二

郎 光 鎌 範 武

各大臣官舎存廢ノ事ニ付過日閣議ニ提出候得共、各大臣意見區々ニシテ未ダ歸一ノ決議ニ至ラズ候處、行政整理上及豫算費目上ニ於テ從前ノ如ク曖昧模糊ノ間ニ附シ去ル事能ハズ、譬ヘバ從前ニ於テハ官舎ニ於テ消費スル物品ノ代價及備品ノ補闕等ニモ各省廳費ヨリ之ヲ流用スルコトヲ得ルヲ以テ、其費額ノ多少モ一定セズ、甲乙ノ間之ヲ比較スルトキハ頗ル權衡ヲ得ザルモノアリテ、議會ノ論難ニ對シテ明瞭ノ答案ヲ闕キタルノ形迹ヲ免カレザルモノアルガ如シ。今行政各部ノ整理ニ着

手スルニ於テ、此等ノ事項ヲ不問ニ附去スルコト能ハズ。

朕貴族院及衆議院ノ各員ニ告グ。

朕茲ニ親臨シテ開院ノ式ヲ行フ。

朕ハ國務大臣ニ命ジテ明治二十六年度ノ豫算案ヲ議會ニ提出セシムルニ當リ、貿易ノ進張ヲ圖リ

内外ノ平和ヲ維持スル爲ニ、海軍ノ擴張ニ向テ巨費ヲ要スルノ已ムヲ得ザルコトニ留意シタリ。

朕ハ卿等ガ國ノ急務ニ對シテ和衷協贊ノ任ヲ竭サムコトヲ信ズ。

朕貴族院及衆議院ノ各員ニ告グ。

朕茲ニ親臨シテ開會ノ式ヲ行フ。

朕ハ國務大臣ニ命ジテ必要及緊急ナル追加豫算及法律案ヲ提出セシム。

我帝國ト縮盟各國トノ交際ハ、朕ガ即位以來執ル所ノ開國ノ國是ニ依リ、益々親厚ヲ加ヘ、條約

改正ノ事業モ亦必成ヲ期セザルベカラザルノ時機ニ臨メリ。

朕ハ卿等ガ中外ノ全局ニ顧ミ、我帝國ノ大計ヲシテ一篋ニ誤ラザル爲ニ、朕ガ志ヲ翼賛センコト

内閣議會和衷協贊ヲ旨トスル閣臣ノ申合

ヲ望ム。

勅令

- 一、親任以下ノ文武ノ官吏ハ自今
ヲ期シ總テ其ノ俸給十分一ヲ減ズ。
- 左ノ各項ハ削減ノ限ニ在ラズ。
- 一、巡查ノ俸給。
- 一、陸海兵及下士ノ給與。
- 一、外交官ニシテ外國ニ駐在スル者。

勅令案

- 第一條 親任官以下文武ノ官吏ハ自今
年ヲ期シ總テ其年俸十分一ヲ獻納スベシ。
前項文武官ノ獻納額ハ海軍費ノ補足ニ供シ、之ヲ其他ノ費途ニ充ルコトヲ許サズ。
- 第二條 前條文武官吏ノ俸給ハ毎月支拂ノ際其減額ヲ控除シテ之ヲ支給ス。

第三條 左ノ各項ハ削減ノ限ニ在ラズ。

- 一、外交官ニシテ外國ニ駐在スル者。
- 一、陸海兵及下士ノ給與。
- 一、國庫ヨリ俸給ヲ受ケザル官吏待遇ノ者。
- 一、巡查ノ俸給。

第四條 本令ハ明治二十六年 月ヨリ施行ス。

衆議院議長上奏二通

上 奏 案

衆議院議長臣楠本正隆本院ノ決議ヲ具シ謹ミ奏ス。伏シテ惟ミルニ

陛下

登極ノ初メ汎ク宇内ノ形勢ヲ察シ、大ニ國威ヲ四方ニ宣揚シ、天下ヲ富岳ノ安キニ置カムコトヲ誓ハセ賜フ。殊ニ曩日

陛下閣臣ニ賜フ所ノ

大詔ヲ拜讀スルニ、開國進取ノ國是ヲ終始スルノ 勅旨ヲ示サセラル。臣民タル者執レカ肯テ感泣報效ヲ圖ラザラムヤ。然ルニ臣等我軍艦千島英國商船ラヘンナト衝突ノ事ニ關スル政府ノ措置ヲ見ルニ、聖謨ニ背違シ、國權ヲ毀損スル實ニ甚シキモノ有リ、茲ニ左ノ五事ヲ敷奏ス。
第一 堂々タル帝國軍艦一外商船ノ爲メニ衝破セラル。其國辱ヤ既ニ明カナリ。政府ハ宜シク之ニ對シテ大ニ國耻ヲ雪ムルノ道ヲ講ズベキナリ。計是ニ出デズ。僅カニ一外商民ヲ對手トシテ

要償ノ訴訟ヲ提起シタリ。

第二 日英條約ヲ按ジ、當時締結ノ精神ヲ釋スルニ、英國人民ニ其自國ノ裁判ヲ受クルコトヲ許シタルハ條約ニ明記スル所ノ外、決シテ政府以上ニ對スルトキニ及ボスモノニ非ズ。然ルニ政府ハ此要償ノ訴ヲ在橫濱英國領事裁判所ニ提起シ、政府自カラ外國主權ノ下ニ屈シタリ。

第三 日英條約ヲ按ズレバ外民ガ我人民ヲ對手トスルハ總テ我法廷ニ出訴スベキナリ。然ルニ被告英商ノ反訴ヲ爲スニ當リ、政府ハ甘ジテ之レガ答辯ヲ爲シ、遂ニ裁判權ナキ領事裁判所ヲシテ裁判ヲ爲サシメタリ。

第四 我國法ニハ私權ノ行使上國ヲ代表スルモノノ規定アリ。然ルニ政府ハ訴訟ノ進行中畏レ多クモ

天皇ノ

尊稱ヲ濫用シ、終ニ英國判官ヲシテ

尊稱ヲ英國一商民ト伍シ奉リ、其判決ヲ爲スニ至ラシメタリ。

第五 日英條約ニ於テハ我臣民ト雖ドモ領事裁判所ノ判決ヲ受クルニ止マリ、其他ノ英國裁判所ノ召喚ニ應ズベキ義務ナシ。然ルニ政府ハ在清國上海英國裁判所ノ召喚ニ應ジタリ
以上敷

奏スル所國權ノ毀損ヲ顧ミズ、條約ノ權義ヲ確守セズ、正當ノ條理ニ基カズ、叨リニ帝國ヲ舉テ英國ノ主權ノ下ニ屈從セシメタルモノニシテ、實ニ千古ノ失體ナリ。

陛下中興ノ

大業ヲ空フシ各國ノ凌侮ヲ招ク、是ヨリ甚シキハナシ。而シテ內閣大臣等恪トシテ顧ミズ、其重責ニ負クコト大ナリ。臣等屢

宸襟ヲ煩ハシ奉ルニ忍ビズト雖ドモ、事全ク帝國ノ大體ニ關シ、臣等衷情止ム能ハズ。伏シテ

陛下ノ

聖鑑ヲ仰グ。臣楠本正隆誠恐誠惶謹ミ奏ス

衆議院議長臣某誠惶誠恐頓首頓首。茲ニ衆議院決議ヲ以テ上奏ス。今年二月衆議院議員總選舉ニ際シ、行政百司擅ニ職權ヲ私シ、各管内選舉人ヲ誘惑シ、若クハ之ヲ脅迫シ、其甚シキニ至テハ選舉競爭ノ間法律其效ヲ失ヒ、正邪其別ヲ淆ル。紛紜擾亂殆ド政府ナキニ類ス。是ヲ以テ兇暴ノ徒所在ニ横行シ、隊伍ヲ結び、兵器ヲ携へ、民屋ヲ毀壞シ、民人ヲ殺傷シ、慘禍劇毒至ラザル所ナシ。洵ニ典憲ノ神聖ヲ溷瀆シ、選權ノ自由ヲ蔑如スルコト焉レヨリ甚シキハナシ。嗚呼此亂虐非法誰カ其責ニ任ズル者ゾ。夫レ內閣大臣ハ行政百司ノ上ニ居リ、之ヲ指揮監督ス。然ルニ其亂虐ノ舉動ヲ

視テ之ヲ制スルコトヲ爲サズ。其非法ノ行爲ヲ措テ之ヲ問フコトヲ爲サズ。抑モ是レ內閣大臣ノ責メニ非ズシテ何ゾヤ。臣伏テ惟ルニ、選舉法ハ立憲政治ノ最重要ト爲ス所、苟モ行政百司其職權ヲ擅私シ、以テ民意ヲ枉屈スルコト此ノ如クンバ選舉法終ニ空文ニ屬シ、立憲ノ治終ニ徒爲ニ歸セシ。然ルニ私朋ヲ彘引シ、以テ公議ヲ粉飾シ、上ハ陛下立憲ノ聖旨ニ背戾シ、下ハ臣民翼賛ノ赤誠ヲ隔塞セントス。是レ內閣諸臣ノ舉措竟ニ國家昌運臣民ノ福利ト相容レザル所ナリ。臣某誠惶誠恐頓首、伏シテ願クハ陛下聖鑒ヲ垂レ、叡斷ヲ下シ、以テ其典憲ヲ溷瀆シ、選權ヲ蔑如シタル者ノ咎過ヲ匡正シタマヘ。謹テ上奏ス。

貴族院議員公爵二條基弘外三十 七名意見書

呈 內 閣 諸 公

某等謹テ内閣諸公閣下ニ白ス。夫レ外國條約ノ件タル實ニ國家興廢ノ係ル所、國民利害ノ關スル所、而シテ其改正ノ期ヲ過ギ、徒ラニ歳ヲ送ルコト二十有餘年、先ニハ井上伯ノ談判ニ其志ヲ達セズ、後ニハ大隈伯ノ談判ニ其ノ功ヲ奏セズ、是レ皆條約改正其物ノ難キニアラズシテ、全ク我カ國權ヲ愛護シ、以テ民福ヲ損傷セザランコトヲ期スレバナリ。今ヤ我國民ハ舊時ノ國民ニアラズ。學識ハ内外ニ通ジ、利害ヲ各國ノ得失ニ鑑ミ、以テ外交ノ是非ヲ講究スル者朝野ニ滿ツ。其國家自衛ノ念ニ促サレ、喙ヲ對外政策ニ容ルルニ至ルハ蓋シ國民ノ至情ノミ。深ク怪ムニ足ラザルナリ。其所論或ハ外交上圓滑ノ主旨ニ合セザルモノアルモ、是レ人文進運ノ一大徵候ニシテ、國家ノ依テ以テ立ツ所ノモノ亦茲ニ在リト謂ハザルヲ得ズ。

帝國議會ノ開設以來衆議院ノ傾向ハ毎々豫算上ニ於テ專ラ削減ノミ事トシ、殆ンド他ノ國務ヲ顧ミザルモノノ如シ。是レ國家財政ノ整理ニ急ナルモ、某等竊ニ恐ル、其傾向ノ延テ議政ノ本旨ヲ失センコトヲ。然ルニ今ヤ從來ノ慣行ヲ改メ、國權ノ退縮ヲ憂ヒ、官紀ノ弛廢ヲ悲ミ、或ハ上奏シ或ハ建議セントセリ。是大政翼賛ノ道ニ向ヒ國家利弊ノ根原ニ着眼シ、其塞々ノ誠ヲ致スモノ素ヨリ議員當然ノ職分ナリトス。

然ルニ諸公ハ議會行動ノ意旨ヲ誤認シ、開國進取ノ國是ヲ阻格スルモノナリト速斷スルガ如キハ某等ノ甚ダ疑惑スル所ナリ。夫レ天下ノ廣キ、或ハ一二ノ頑固者ナシト謂ヒ難シ。文明ヲ以テ自負スル歐米人亦異種人異邦民ヲ忌嫌シ、之ヲ虐待スルモノアルニアラズヤ。況ンヤ本邦開國以來日猶ホ淺シ、間々事理ニ通ゼザル頑迷ノ徒アルハ數ノ免レザル處ナリ。雖然衆議院議員ノ如キハ多クハ一地方ノ俊士ニシテ、決シテ彼レ頑迷事理ニ通ゼザルモノト同一視スベキニアラズ。然ルニ諸公ハ議會ノ多數ヲ擧ゲテ彼徒ト同一視スルガ如キハ某等ノ竊カニ諸公ノ爲メニ取ラザル處ナリ。且ツ其建議セント欲スル所ノ現條約勵行案ナルモノハ、要スルニ政府ニ對シ現條約規定ノ如ク之ヲ實踐履行センコトヲ希望スルニ過ギザルベシ。若シ夫レ我ガ國家ニシテ條約ヲ實踐履行セザレバ、縱令所謂對等條約ヲ訂結スルモ、是文言上ノ對等ニシテ決シテ國家ノ實權ヲ維持スベカラズ。何トナレバ條約アリテ其實行ヲ顧ミザレバ是レ條約ナキナリ。當ニ條約ナキノミナラズ遂ニハ國家自身ノ綱紀ヲモ弛廢スルニ至ラン。顧フニ衆議院議員多數ノ意見モ亦之ニ過ギザルベシ。若シ其所論事宜ニ合

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 男爵 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 子爵
楫 小 本 伊 谷 黑 青 山 仙 曾 岩 松 鳥
取 澤 多 達 干 田 山 內 石 我 下 平 尾
素 武 副 宗 城 清 幸 豐 政 祐 方 信 小
彥 雄 元 敦 城 綱 宜 誠 固 準 平 正 彌 太

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

同 男爵
關 原 富 宮 原 長 渡 安 松 青 渡
口 忠 田 本 田 谷 場 岡 山 邊
彌 順 鐵 小 一 川 保 康 貞 清
五 順 之 一 道 貞 雄 和 毅 貞 清

貴族院議員公爵近衛篤磨外十七名意見書

一、國會ニ兩院ヲ設ケ、甲ヲ二三種族ヨリ組織シ、以テ一般人民ヨリ組織スル所ノ乙ト別異スルハ是乙院ノ意思或ハ急激極端ニ奔リ、又ハ政府ノ行動若シ倚勢專權ニ傾キ、以テ國利民福ニ反スルコトアルトキハ、甲議院ヲシテ常度ヲ踐ミ、中正ヲ守リ、以テ國事ノ激動ヲ調和セシメンガ爲ナリ。何トナレバ乙院ト政府ト相攻難競争スルニ至リ易キハ自然免レ難キノ勢ニシテ、歐洲各國ノ既ニ實驗セシ所ナレバナリ。我衆議院ト政府ノ形狀モ亦明カニ此趨勢ヲ發露セリ。然ルニ貴族院其際ニ處シ果シテ能ク其本分ヲ致シ、上下ノ依信ヲ繼ギシ乎。遺憾ナガラ未ダ満足ナル答辭ヲ爲ス能ハズ。蓋シ是レ原由ノ在ルアリ、試ニ之ヲ言ハン。貴族院ノ組織ハ華族勅選及多額納稅者ノ三種ヨリ成ル。而テ華族ト多額納稅者ハ各共同種族中ノ互撰ヲ命ジ別ニ國家ノ功臣又ハ學識富贍ノ士ヲ特ニ勅選シ、以テ相參伍セシム。是實ニ制度ノ得タルモノナリ。制度ノ美如此、而モ未ダ上下ノ依信ヲ繋グニ至ラザルハ、蓋シ勅選議員ノ實效猶不十分ナルニ由ルコト無ラン乎。現ニ國家ニ功勞アリシ者ニシテ勅選ノ列ニ在ラザル名士其數少カラズ。即チ朝ニ在テハ內閣樞密院中ノ諸

公、野ニ在テハ大隈、板垣、品川諸公ノ如キ、皆天下ノ矚目仰視スル所ナリ。而シテ俱ニ未ダ貴族院ニ入ラズ、是現時上下ノ貴族院ヲ重視セズ、隨テ政府ト衆議院ハ年々相攻難紛争スルモ、絶テ貴族院ヲ顧慮スル所ナキ所以ニ非ズ乎。

更ニ將來ヲ察スルニ（幾十年ノ後ハ敢テ言ハザルモ）所謂元勳一派ノ諸公モ永遠現內閣ニ立ツベキニハ非ズ。何トナレバ政治ノ變更、人身ノ安否ニ因リ內閣ノ交迭アルハ決シテ免カレザル所ナレバナリ。而シテ其際一二外國ノ列ニ倣ヒ、徑チニ內閣ト衆議院ト全然相交迭スル如キハ現時ノ形狀及上下ノ情感ニ於テ許サザル所ナリ。故ニ今日功勞聲譽アルノ名士ヲ議院ノ中ニ入レテ、平生政事上ノ意見ヲ公然事實上ニ表示セシメ、以テ他日政官ノ幾分ノ候補トナスハ固ニ計ノ得タルモノナラン。因是余輩ハ熱心ニ 聖明ノ左ノ事ヲ斷行シ玉ハンコトヲ伏テ祈ル。

一、樞密院顧問官タルモ議員ヲ兼ルコトヲ得セシムルコト。

二、先ニ掲ゲタル功臣ノ多分ヲ勅選セラル、コト。

樞密顧問ハ至高謀詢ノ府ニシテ國中最時務ニ練達シ、學識ニ深遠ナル名士ヲ集ル所ナリ。而シテ其練達學識アル名士ヲシテ平生無事ニ苦マシメ、反テ重要ナル議政ニ參スルヲ得ザラシムルハ可惜ノ至ナリ。然レドモ物ノ利弊ハ時勢ニ隨テ一ナラズ。數年前議院制度初生ノ日ニ在テ、顧問官ハ議員ヲ兼ヌルコトヲ得セシメザリシコトハ必適當ナリシナラン。然レドモ數年ヲ經タル今日ニ

至テハ必シテ膠柱柱スベカラズ。又國家ノ功臣或ハ良臣ニシテ國務ニ參セシ名士ハ内閣ヲ退クト
キハ多ク樞密院ニ入ル乎否カハ、家居スルモ貴族院ニハ入ルヲ屑トセザル如キ觀アルハ實ニ衆心
ニ慊然タルコトナキ能ハズ。其國務大臣タル功臣ノ貴族院議員トナリ、又樞密顧問タル名士ノ議
員ヲ兼ヌルハ獨リ無弊ノミナラズ、却テ有益ノ效果ヲ收ムルニ至ラン。

是故ニ余輩ハ此二事ヲ以テ大ニ貴族院ノ威信ヲ増シ、政事上ノ激動ヲ鎮靜シ、國家ノ藩屏タル實
ヲ舉ルニ必要ナルモノト確信スルナリ。人或ハ疑懼セン。群雄ヲ一堂ニ集ムレバ政黨固結シ、以
テ政府ノ梗礙ヲナサント。是恐クハ過慮ノミ。余輩ノ意見ハ正ニ之ニ反セリ。夫レ英雄ハ終始無
爲ニ安ズルモノニ非ズ。古今衆民ヲ煽動シテ政治ニ妨害ヲ與フル者、心正當ニ胸臆ノ氣ヲ發泄ス
ル所ナキニ由ルナリ。今議院ハ公然政事上ニ意見ヲ吐露シテ餘蘊ナカラシムルノ所ナリ。加之材
力相似ノ群雄ハ其意向必ズ一ナラズ。而シテ輒ク降下セズ。甲者政治ヲ妨害セントスルモ乙者反
テ之ヲ排斥シ、其頑頑磨勵適マ以テ真正ノ良策正義ヲ產出スベシ。是故ニ政治ノ梗礙ヲナスハ英
雄ヲ各所ニ散在シ、以テ淺知ノ衆民ヲ籠絡セシムルニ在リ。之ヲ一堂ニ集ムルハ互ニ相制セシム
ルノミナラズ、公然國事ノ重ヲ分擔セシメ、以テ國家ノ洪益ヲ爲スヤ知ルベシ。

或ハ曰、議員ノ命アルモ今日第一流ノ人士ハ貴族院ニ出ヅルヲナサザルベシ。何トナレバ甲ハ議
員ヲ輕視シ、乙ハ其身已ニ老イ、政海ニ驅逐スルニ懶キニ依ルト。夫レ議員ヲ輕視スルノ嫌ハ之

レナキコト能ハズ。然レドモ諸公ノ國ニ忠ナル、豈勅命ヲ蔑ニセンヤ。唯今日迄第一流人士ニ勅
命ナキガ故ニ議員ヲ輕視スルノ傾キアルノミ。又老衰事ニ堪ヘズ之ニ鳩杖ヲ賜フベキノ類ハ之ヲ
勅選セラレザルニ止ルノミ。何ゾ必ズシモ功臣ハ一モ遺スコトナク議員ト爲スコトヲ要センヤ。
今數年ヲ出デザルニ國會ノ解散ヲ見ルニ已ニ二回、而シテ内外ノ時務積テ山ノ如シ。是レ宜ク人
心ヲ振作シ、歸嚮ヲ知ラシメ、以テ國家發達進步實務ヲ講窮スベク、決シテ區々感情ノ爲ニ末節
ヲ紛争シテ大計ヲ忽ニスベキノ時ニ非ズ。今貴族院ニ元老ヲ集メ、上下ノ倚信ヲ繋ギ、一面公事
ヲ議定シ、一面政府ト衆議院ト紛争衝突ヲ調和セシムルハ兩院立制ノ本旨ナルノミナラズ、最對
症ノ適劑ナルハ余輩ノ深ク信ジテ疑ハザル所ナリ。幸ニ總理伊藤伯ノ練達學識、殊ニ鞠躬盡序以
テ鹽梅ノ任ニ膺ルヲ以テ余輩ノ微衷ヲ諒照シ以テ啓沃ノ效ヲ奏セラレシコトヲ願フ所以ナリ。

近 衛 篤 麿
岡 部 長 職
谷 干 城
鳥 尾 小 彌 太
渡 邊 清

松	武	小	松	尾	富	關	青	山	青	安	小	千
平	井	原	岡	崎	田	博	山	內	山	場	澤	家
信	守	重	康	三	鐵		幸	豐		保	武	尊
正	正	哉	毅	良	之	直	宜	誠	貞	和	雄	福

貴族院議員公爵二條基弘外卅七名 ノ意見書ニ對スル伊藤首相ノ答書

公爵二條基弘君外三十七君貴下。諸君ガ衆議院解散ニ付テ博文及ビ同僚ニ忠告セラル、一書ヲ領ス。諸君情誼ノ殷ナル感銘何ゾ堪ヘン。博文不肖叨ニ重任ヲ受ケ、以テ大政統督ノ職ニ當ル、獻替ノ責實ニ一身ニ在リ。亦素ヨリ自ラ信ズル所ノモノナクンバアラズ。

來諭言フ所要スルニ政府ガ客臘解散ヲ奏請シタルノ非ナルヲ論ズルモノナリ。博文乃チ亦解散ヲ奏請シタルノ理由ニ付テ辯ゼズンバアラズ。博文謹ミテ惟ルニ、憲法ノ施用ハ國家各機關ノ和衷協同ニ存ス。是レ憲法發布ノ日ニ宣示セラレ、各期ノ議會ヲ開カル、ニ付テ亦毎々 親諭セラレ、而シテ客歲二月十日ノ 聖詔ニ至テ特ニ申明セラレタル所ニシテ、議院ト閣臣トノ俱ニ眷々服膺セザルベカラザル所ナリ。則チ互ニ各自ノ權域ヲ守リ、以テ國務ヲ審議スルニ於テハ、縱令常ニ扞格ナキヲ得ズトスルモ、政務ノ大局ニ於テ國運ノ進歩ヲ企畫スルモノ蓋シ亦難シトセズ。博文不肖就職以來夙夜戰兢、以テ重任ヲ虛クセザラント欲シ、敢テ安進ヲ貪ラズ。乃チ議院ノ議ノ如キハ實ニ不肖ガ敢テ以テ己ノ及バザル所ヲ補フノ餘師トナサンコトヲ樂ム所。顧フニ立憲ノ義亦茲ニ存スル

ヲ疑ハズ。奈何セン衆議院ノ爲ス所主トシテ政府ノ施設ト相抗議シ、國家事業ノ案件ニ就テ深ク是非利害ヲ究ムルコトヲナサズ。或ハ豫算ニ就テ實施シ難キノ削減ヲ加ヘントシ、或ハ國防ニ於テ最モ急要トスルノ事業ヲ廢止セントシ、羣囂嗷々閣臣ノ説明ノ如キ殆ド耳ニ入ル所ニ非ズ。幸ニ第四議會ハ聖明ノ盛德ニ依リ至仁ノ優詔ヲ垂レ玉フアリテ、協贊ノ任ヲ盡シ閉會ニ至ルヲ得タリト雖モ、第五議會モ亦第四議會開期ノ當初ニ於ケルガ如ク諸黨派ハ開會ノ前ヨリシテ已ニ互ニ相排擠スルノ端ヲ啓キ、其開會ニ至ルヤ國法ノ豫算審査期日ヲ特定シ、從テ常任委員ノ選舉必ズ開會ノ劈頭ニ於テスベキヲ明示セルニモ拘ラズ、忽チ議長進退ノ爭議トナリ、之ガタメニ上奏ノ特權ヲ濫用シテ宸問ヲ蒙ルノ後、纔ニ不明ヲ謝スルノ陳奏ヲナシタリ。是レ果シテ國務協贊ノ任ヲ致スモノト謂フヲ得ル乎。官紀ノ振肅素ヨリ政府ノ責任ニ屬ス。議院若シ質問スル所アリ、若クハ忠告スル所アラントセバ、其事實ヲ明ニシ、其肺肝ヲ披クニ於テ政府亦欣然之ヲ迎フベシ。顧テ衆議院ノ爲ス所ヲ視レバ曾テ議事日程ニ豫告セズ、突然提議シテ直ニ宸聞ニ奏ス。是レ議院或ハ現内閣ヲ以テ始メヨリ共ニ謀ルニ足ラズトナシ、以テ宸裁ヲ待ツニ至リタルナルベシ。然ルニ數月ニシテ宸裁ヲ得ザルヤ、翻テ政府ニ對シ處決ヲ望ムト稱シ、殆ド宸裁ヲ促スノ決議ヲナシタリ。是レ果シテ俱ニ和協ヲ望ムベキ者トスル乎。博文等客歲二月十日ノ聖詔ヲ奉ジ、行政諸般ノ整理ヲ遂テ制度ノ必要ヲ考ヘ、事業ノ進張ニ應ジ人民ノ利便ヲ通ジ、經濟ノ發達ニ資シ、今ノ國情民度

ト方ニ相適當スルノ組織ヲ立テ、由テ以テ前年度削減額ノ外更ニ巨額ノ節減ヲ經常ノ行政諸費ニ加ヘ得ル所ノ餘剩ハ、之ヲ以テ國家民人ノ急需ニ供セントシ、改正官制及ビ其他ノ勅令ニ基キテ明治二十七年ノ豫算ヲ調製シ、必要ナル事業計畫ヲ定メ勅允ヲ得テ之ヲ提出シタルニ拘ラズ、衆議院ノ豫算委員ハ政府提案ノ趣旨ノ在ル所ヲ推窮セズ、直ニ前期即チ行政未ダ整理ヲ加ヘザルノ時ニ提出シタル豫算ニ對シテ作りタル舊査定方針ナルモノヲ取り以テ、直ニ新豫算ヲ審査修正スルノ標準トナシタリ。然レドモ閣臣ハ猶苦心經營ノ存スル所ヲ貫徹セントシ、委員會ニ出席シテ十分辯明ヲ與ヘタルニ、委員等ハ始メ閣臣ノ出席辯明ヲ求メタルニ拘ラズ、多ク抗議スル所アラズシテ而モ頑然査定方針ナルモノヲ固執シ、自ラ改ムルコトヲ爲サズ。而シテ其査定シタル所ニ依レバ客歲二月十日ニ下サレタル詔勅ノ趣旨ニ違ヒ、官吏俸給十分一納付ノ制ヲ廢シ、更ニ憑據ナキノ削減ヲ加ヘントシ、又國防ノ急要事業トシテ提出シタル海峽砲臺造築ノ費額ヲ削リ、而モ其籍口スル所ハ政府ノ舉行シタル改革ノ其前會期ニ宣言シタル所ニ違フトスト雖モ、抑モ衆議院ガ政府ノ意向ヲ聞クタメ選舉シタル委員ニ對シ、博文ガ當時ニ宣言シタルハ官吏ノ俸給ヲ減ゼズ、組織ヲ簡ニシ、吏員ヲ汰スルト云フニ止マル。而シテ時宜ノ緩急ヲ計リ、行政ノ組織ヲ立ツルハ素ヨリ政府ノ責任ニ屬シ、一々局外者ノ言議ニ徇フ能ハズト雖モ、苟モ議會ノ審議ニ依テ知見ノ至ラザルヲ補フヲ得バ博文亦喜デ之ニ就クベシ。獨リ事實ヲ究メズ、理由ヲ尋ネズ、行政組織ノ觀念ナクシテ輕々臆斷

シ、概シテ政府ノ措畫輿論ニ反スト稱シテ排撃スルガ如キハ博文ガ和協ノ望ヲ絶タザルヲ得ザル所ナリ。然レドモ是レ豫算委員ノ言動ニ屬シ、院議ノ決ニ至テハ未ダ知ルベカラザルモノアリトスルモ、豫算委員ハ議院ノ屬望ヲ以テ選バレタルモノニシテ、其意見ハ即チ實際ニ院議ヲ代表スト認ムベキモノアルノミナラズ、現ニ各黨派ノ豫算ニ就テ論議スル所ヲ聞クニ、之ニ加フルコトアルモ決シテ之ニ減ゼザリシハ諸君モ亦其記憶ニ存セラル、ノミナラン、來諭乃チ衆議院ハ豫算削減ノ慣行ヲ改メ、大政翼賛ノ道ニ向ヒ、其蹇々ノ誠ヲ致スト云フ。是レ博文ガ事實ニ徴シテ諸君ト其見ル所ヲ同クスル能ハザル所ナリ。開國進取ノ國是ハ政府ノ萬難ヲ排シテ奉行セザルベカラザル所、而シテ條約ヲ勵行シテ國權ヲ擴ムベキハ素ヨリ之ヲ勵行スベキノミナラズ、苟モ國權ヲ主張スルノ必要アラン乎、亦之ヲ排除訂正スルニ務メザルベカラズ。然ルニ現在ノ條約ハ維新前後ノ締結ニ係リ、今日ノ事情ニ適セザルモノ多ク、其條文ヲ墨守スルハ却テ國家ニ不利益ナルモノ一ニシテ足ラズ。其得失ヲ推窮セズシテ一概ニ勵行セント云フガ如キハ不稽モ亦甚シ。政府ハ素ヨリ其利害ノ在ル所ヲ講窮シテ其宜ヲ制シ、以テ外政ノ衝ニ當ル。徒ニ事ヲ好ミ端ヲ發シ、以テ平和ヲ傷クル如キハ務メテ之ヲ避ケザルベカラズト雖モ、亦未ダ曾テ國權ノ汚辱侵蝕ヲ條約ノ外ニ受ケズ、而シテ議院ノ數黨派ハ聯合シテ政府ヲ以テ國權ヲ汚損ストスルノ建議案ヲ提出シ、又名ヲ條約ノ勵行ニ托シテ現ニ條約ノ本文ニ牴觸スルヲモ顧ミズ、外人ヲ畏怖シ之ヲ攔沮スルノ目的ヲ以テ種々ノ方案ヲ立テ、甚シキ

ハ外交ノ運用ガ如何ニ重大ノ干繫ヲ國家ニ及ボス乎ヲ熟議セザルモノアルヲ利トシ、其說ヲ誇張シテ以テ一時ノ感情ヲ動カシ、以テ黨勢擴張ノ資ト爲サントスルニ至ル。是レ實ニ國家ノ大計ヲ玩弄スルモノト謂ハザルヲ得ズ。政府ハ維新後半ノ事業トシテ條約ヲ改正シ、對等ノ國權ヲ收復スルニ汲々タルガ故ニ、從來屢着手シテ屢其成ルヲ見ザルニ拘ラズ、百折不撓以テ早晚國是ノ目的ヲ貫徹センコトヲ期ス。顧フニ此目的ノ一定不動ナルニ於テ、政府ガ機宜ニ應ズルハ復タ内外ニ對シテ其言ヲ二三ニスルノ要ヲ見ズ。亦實ニ曾テ之ヲ二三ニセザルナリ。是ヲ以テ政府ハ永久無限ニ現條約ニ服從シテ以テ我國家ノ權利ヲ犧牲ニスルコトヲ甘受スルノ義務ヲ負ハザルヲ確信スルト同時ニ、亦徒ニ遠來ノ外人ノ爲ニ不便不利ヲ蒙ラシメ、以テ自ラ勇トスルノ陋ヲ學ブヲ欲セズ。而シテ衆議院ニ於ケル聯合諸黨派ノ要望スル所ヲ視レバ、其主眼トスル所全ク彼ニ存セズシテ此ニ存シ、而モ一意之ヲ迷執シテ毫モ慎重ニ對外ノ要務ヲ審議スルノ誠意ヲ認ムベカラザリシハ、閣臣ガ外政ノ方針ヲ演說シタル時ノ狀況ニ就テモ觀ルヲ得ベシ。則チ條約勵行ニ關スル諸議案ハ固ヨリ國民多數ノ眞正ナル意思ト符合セザルモノタルヲ確信スト雖モ、衆議院ニ於テハ其勢ノ馳致スル所ハ明ニ推定スベキモノアリ。而シテ建議案ノ本文ニ政府國權ヲ汚損スト明言シ、其理由書亦多ク無稽ノ事實ヲ陳ネ、外人攔沮ノ意思班々見ルベキハ諸君モ亦其本書ニ就テ知ラル、所ナルベシ。博文素ヨリ議院ノ國權ヲ以テ念トスルヲ喜ブト雖モ、慎思熟計俱ニ開國進取ノ大計ヲ講ゼントスルノ誠ヲ存スルニ非

ズシテ、無責任ノ言葉ヲ弄スルモノニ與スル能ハズ。以上ノ數件ハ博文ヲシテ衆議院ハ到底共ニ大業ノ翼賛ニ和協スベキノ望ナシト認メシメタル所以ノモノニシテ、一件ハ一件ヨリ迫リ、層疊累積シテ政府ヲ排撃スルモ、一面ニ議院ノ法定要務ヲ緩漫ニシ、他ノ一面ニ國家民人ニ利スルノ計畫ヲ阻廢スルノ外成績見ルベキモノアラズ、而モ往々自ラ休會シテ其職任ヲ曠クセントスルニヨリ、政府ハ茲ニ斷ジテ解散ヲ奏請セントシ、之ガ準備ヲナスノ目的ヲ以テ先ヅ停會ヲ奏請シタリ。停會ノ期日ヲ豫定シタルハ國法ノ規程ニ遵ヒタルニ過ギズ。其翌日解散ヲ奏請シタルハ停會期日ノ經過ヲ待ツノ必要アラザルヲ見タルガ爲ニシテ、俄ニ廟議ヲ變ジテ解散シタルニ非ズ。其 詔勅ヲ重ネザルヲ得ザリシハ、憲法ノ定ムル所停會ハ解散準備タルト否トニ關セズ、必ず大權ノ示命ヲ待ツヲ以テノミ。抑解散ハ大權ノ發動ニシテ閣臣苟モ責任ヲ取り奏請奉行ス。素ヨリ必シモ一事一件ヲ以テ斷案トスルヲ要セズ。然レドモ強テ斷案ヲ求メバ今回ノ解散ハ博文衆議院ヲ以テ和協ニ由リ大業ヲ翼賛スルノ望ナシト認メタルニ出ヅト斷言スルニ憚ラズ。夫レ和衷ナルモノ固ヨリ此レヲ以テ彼レニ徇フノ謂ニ非ズ。博文素ヨリ衆議院ヲ以テ一ニ政府ノ提議ニ雷同スベシト望ムモノニ非ズ。俱ニ國務ニ就テ得失ヲ審議シ、互ニ憲法上ノ權域ヲ守リテ相踰越スルコトナクンバ立憲ノ美果亦之ヲ收ムルニ難カラザルベシ。顧フニ去年二月十日ノ 詔勅其趣旨亦此ニ外ナラズ。博文同僚ト共ニ服膺他ナシ。博文素ヨリ諸君ノ忠告ニ對シ徒ニ抗議ヲ試ルニ非ズ、唯諸君ノ功徳ノ厚キニ對シテ聊

カ心衷ヲ披陳スルノミ。博文 敬具

明治廿七年二月十日

內閣總理大臣伯爵 伊藤博文

伊藤首相ノ答書ニ關シ近衛公爵 谷子爵再提意見書

拜啓、陳者先般愚衷ヲ開陳シ諸公ノ審省ヲ希願致候處、何ゾ圖ラン辱クモ之ヲ奉被供 天覽候
趣、閣下ノ劣生等ノ言ヲ重ゼラル、ノ厚誠不堪感謝候。然ルニ尊書ヲ熟讀玩味仕候處、頗ル服シ難
キモノアリ、措テ而テ止ント欲スル事ハ小ナリト雖、事已ニ達

天聽默シテ言ハザレバ誣罔ノ責輕シトセズ。故ニ不得止貴論ニ難服ノ理由ヲ別紙ニ開陳シ、再ビ
奉煩貴聽候。

猶先般連名ヲ以テ差出候者モ、歸縣其他病氣等ノ爲責書拜讀之節モ缺席之者有之候得共、現場出
席人員ノ惣代トシ、劣生等兩名ヨリ別紙進呈致候間御一覽之上諸公ヘモ御披露可被下候。

勿々 頓首

二月十九日

子爵 谷 干 城

公爵 近 衛 篤 麿

內閣總理大臣伯爵 伊藤博文 殿

二	曾	安	渡	富	本	松	新	板	黑	日	谷	小	渡	關	伊	本	山	一	楫	長	竹
條	我	場	正	田	多	平	納	健	田	野	干	澤	邊	博	達	田	內	柳	取	谷	內
基	祐	保	元	鐵	正	信	直	勝	清	西	武	雄	清	宗	敦	副	豐	末	素	川	惟
弘	準	和	助	之	憲	正	陳	達	綱	光	城	雄	直	敦	元	誠	德	彦	貞	忠	忠
									善												

伊藤首相ノ答書ニ關シ近衛公爵谷子爵再提意見書

五七九

原	田	一	道	近	衛	篤	鷹
岩	下	方	平	佐	竹	義	理
宮	本	小	一				

拜啓前刻御來訪之節御尋ニ相成候人名ハ、鹿鳴館之方へ尋合候處、十七日之出席者ハ前刻申上候モノノミニ有之候趣。三十一名ハ小生之誤解ニ有之候。尤モ欠席者中、島津忠亮、小笠原壽長、青山貞、松平直哉、青山幸宜等ノ人々ハ此度之提案ニ同意致候事ト愚考仕候。其他ノ歸郷中之者又在京者之前述以外ノ人々ニハ別段尋合候暇モ無之ニ付、御確答ハ仕兼候得共、是又多分不同意ニハ有之間敷候得共右不取敢及御答候也。

草々

二月二十日

近衛生

鮫島様

復論ニ服スル能ハザルノ理由

一、憲法施用ノ國家各機關ノ和衷協同ニ存スル固ヨリ論ナシ。惟ダ其和協亦道アルヲ思ハザル可カラズ。夫レ行政府ト議院トハ各自特立ノ權能ヲ有ス、隨テ其權能ノ作用ハ時ニ衝突ナキ能ハズ。殊ニ我國ノ如キハ時運專制ヲ脱シテ始メテ憲政ニ移リタルノ際ニ屬ス。而シテ諸公ノ政局ニ當ルヤ茲ニ廿有餘年、其間績揚尠カラザルト與ニ失錯モ亦必ラズ多カラン。然レバ議院ト行政府ノ衝突時ニ激甚ヲ致スコトアル可キハ已ムヲ得ザルノ勢ナリ。此際又之ヲ調停シテ和協ニ歸シ、憲法ノ施用ヲ完カラシムルモノハ管ダ行政府議院相互ニ讓歩ノ一アルノミ。若シ其レ否ラズ、獨リ讓歩ヲ議院ニノミ之レ求メ、必ズ議院ノ政府ニ屈從スルヲ待チテ而シテ始メテ和協ノ道ヲ得タリトセバ、國家各機關ヲ建置スルノ要荒ム亦安ンゾ其議院タルニ在ランヤ。諸公謂フ所ノ和協全ク屈從ニ在ルガ如シ。余等ノ先ヅ服スル能ハザル所ナリ。

一、議院既ニ特立ノ權能ヲ有シ、國家立法ノ機關タリ。而シテ他ノ行政機關ト相ヒ對立ス、故ニ國家ノ立法并豫算ノ事業ハ議院ヲ擱キテ行政府擅ニ之ヲ定ムルヲ得ザルハ言ヲ待タズ。而シテ復論ニハ乃チ云フ、議院ノ議ノ如キハ實ニ不肖ガ取テ以テ已ノ及バザル所ヲ補フノ餘師トナサンコトヲ樂ム所、顧フニ立憲ノ義亦茲ニ存スルヲ疑ハズト。是レ議院ヲ以テ内閣ニ隸屬スル一參事院ノ

類ト思惟スルニ異ナラズ。何ゾ其議院ヲ藐視スルノ甚シキヤ。是レ復論ノ所謂各自ノ權域ヲ超越セント欲スルモノナリ。諸公既ニ議院ヲ視ルコト彼ガ如ク、其レ藐乎タリ。是ニ於テカ諸公ガ議院ニ求ムル所ノ和協ナルモノ其意一ニ行政府ニ屈從セシムルニ在ルヤ愈彰ナリ。是レ余等ノ益々服スル能ハザル所以ナリ。

一、復論ニ據レバ第五議會ニ於ケル衆議院ノ舉動ヲ難ズルニ因リテ、延キテ答メテ第四議會ノ同院ニ歸セリ。然レドモ第四議會ハ議院政府衝突ノ後ニ至リ 聖詔ノ煥發ニ會ヒ、行政府ハ自ラ局面一變ヲ唱ヘ、其固執セシ前論ヲ擲チ、以テ衆議院ノ議ニ同意セシニ非ズヤ。然レバ當時衝突ノ因ハ行政府自ラ招致シタルヲ承認シ、併セテ行政府ハ自カラ其局面一變前ノ過誤ヲモ首肯シタルモノナリ。當時ニ在リテハ自個ノ過誤タルヲ事實ノ上ニ承認シ、今日ニ追ヒテハ翻テ答テ衆議院ニ嫁セント欲スルモ誰カ其レ之ヲ信ゼンヤ。

一、復論ハ第五議會解散ノ正當ニシテ己ムカラザルヲ證セントシテ種々ノ事例ヲ舉示セラル。曰ク衆議院ハ常任委員ノ選舉ヲ開會ノ劈頭ニ於テセズ、曰ク忽チ議長進退ノ爭議トナリ之ガ爲メ

上奏ノ特權ヲ濫用スト。然レドモ之ヲ衆議院ノ慣行ニ徵スルニ、常任委員ノ選舉ヲ開會ノ劈頭ニ於テセズ、直チニ他ノ議事ニ從事セシハ第一期以來之ガ類例ニ乏シカラズ。而シテ先ヅ議長進退ノ議ヲ決セシモノハ蓋シ官紀振肅ノ 上奏ヲナスノ準備ナリ。即チ己ヲ正シテ而ル后千人ヲ

正サント欲スルガ爲メ、至當ノ順序ヲ蹈ミタルモノノミ。而シテ之ガ結果ヲ 上奏スル亦何ゾ

特權ヲ濫用スト謂ハンヤ。復論ハ又指斥シテ曰ク、 宸問ヲ蒙ルノ後纔ニ不明ヲ謝スルノ陳奏ヲナシタリト。是レ果シテ何等ノ言ゾ。當時衆議院ガ 宸問ニ奉對シ、其不明ヲ陳謝セシハ前ニ適任トシテ上奏セシ所ノ議長ハ后ニ瀆節敗行其不適任ヲ現ハス、是ヲ以テ前奏即議長ヲ適任ト認メタル當時ノ 上奏ニ對シ不明ヲ引キシナリ。是レ臣子ノ分トシテ當ニ然ルベキ所、而シテ

以上ノ數項ヲ以テ解散ノ一理由トナス、余等毫モ其理由ヲ認ムル能ハズ。

一、復論ニ曰ク、官紀ノ振肅素ヨリ政府ノ責任ニ屬ス、議院若シ質問スル所アリ、若クハ忠告スル所アラントセバ、其事實ヲ明カニシ、其肺肝ヲ披クニ於テ政府亦欣然之ヲ迎フベシ。顧テ衆議院ノ爲ス所ヲ視レバ曾テ議事日程ニ豫告セズ、突然提議シテ直ニ 宸闈ニ奏ス、是レ議院或ハ現内閣ヲ以テ始メヨリ共ニ謀ルニ足ラズトナシ、以テ 宸裁ヲ待ツニ至リタルナルベシト。乃チ是ヲ以テ議院自カラ和協ヲ破ルノ實トナス、甚イ哉諸公ノ強辯ヤ。抑々農商務省官紀ノ壞敗スル一日ニ非ズ。是レ裁判ノ口供ニマデ上リシ所、上下俱ニ之ヲ瞻ザルハ無シ。然レバ諸公獨リ之ヲ知ラザルノ理アラシヤ。諸公ニシテ寔ニ政府ノ責任ヲ重ンジ、官紀振肅ヲ致スニ急ナラバ必ズシモ議院ノ開會ヲ待チテ後チ理セン。衆議院ノ質問忠告ヲ待チテ后チ辨ゼン。諸公既ニ之ヲ知りテ而テ之ヲ悛ムルニ意ナシ。是時ニ當リテ 上奏ノ舉其ノ己ムヲ得ンヤ。而シテ諸公ハ後ヨリ言

ヲナシ、其肺肝ヲ披クニ於テ政府亦欣然之ヲ迎フベシトイフモ、常識アル者誰カ其レ之ヲ信ゼンヤ。諸公ハ又衆議院ノ此議ヲ提出シタルヲ以テ突然ナリトシテ之ヲ咎ム。然レドモ此議ノ出ヅル天下ノ豫期セシ所、諸公亦之ヲ側聞セザルノ理ナシ。何ゾ突然ナリト謂フヲ得ンヤ。假令又其提出ヲシテ突然ナラシムルモ、議院内閣ノ間ニハ急報ノ機器具備ス、之ヲ奈何ゾ其レ知ラシメズト謂フヲ以テスルヲ得ン。諸公ハ既ニ之ヲ知ルヲ得タルモノナリ。而シテ其議タル政府信否ノ關ル所、然レバ諸公ニシテ眞ニ和協ヲ求ムルノ心アリテ且ツ官紀壞敗ノ實ナシト篤信スルモノナラバ、宜シク議場ニ臨ミテ以テ其肺肝ヲ披瀝スベシ。而シテ諸公ノ執ル所ニシテ是ナランカ、議院ハ却テ欣然之ヲ迎フベシ。然ルニ諸公ハ隻影ヲダニ議場ニ現ハサズ、是レ怠慢ニ非ザレバ畏避、兩者必ズ其一ニ居ラン。即チ洪責ノ繫ル所ハ議院ニアラズシテ政府ニ在リ。復論ハ又議院ガ官紀振肅ニ關スル上奏ヲナスノ后チ、閣臣ノ處決ヲ求ムルノ議ヲ決シタルヲ以テ 宸裁ヲ促スノ決議トナス。是レ誣ニアラザレバ則チ妄ナリ。議院ノ此議ヲ決シタル是レ閣臣ヲシテ責ヲ全クセシメンガ爲メノミ。之ヲ奈何ゾ 聖明ヲ要シ奉ルモノナランヤ。

一、復論ハ又衆議院ノ豫算委員會ヲ以テ政府行政整理ノ苦心經營ヲモ顧ミズ、一意舊査定方針ヲ固執シ、諸公ガ反覆辯明ヲ與ヘタルニモ關ハラズ、輕々臆斷以テ政府案ヲ排撃シタリトナシ、以テ和協ノ望ミヲ絶チ、解散ノ已ムヲ得ザルニ至リタル理由トナス。而シテ余等ガ曩ニ衆議院ハ豫算

削減ノ慣行ヲ改メ、大政翼賛ノ道ニ向ヒ塞々ノ誠ヲ致スト披陳シタルヲ背實ノ言ト認メラレタルガ如シ。夫レ豫算ナルモノハ實ニ國家生命ノ係ル所、故ニ豫算議定ニシテ果シテ國家ノ生命ヲ害スルモノアラバ誠ニ議院解散ノ理由トスルニ足ル。然レドモ第五議會ニ於ケル衆議院ノ豫算委員タル院内一二ノ黨派ニ由リテ組織セラレ、其他ノ各派ハ幾ンド與カラズ、然ラバ其言動ヲ以テ未ダ俄ニ各黨派多數ノ意見ナリトスルヲ得ズ。且ツ其査定案ハ未ダ院議ニ上ラズ、隨テ未ダ院議ニ決シタルモノニアラズ。加之豫算議定ノ件ハ衆議院之ヲ獨有セズ、貴族院亦之ヲ均有スルハ是レ憲法ノ命ズル所。然ラバ衆議院ニシテ一旦否決スル所モ貴族院ニシテ之ヲ是正スルノ道アリ、彼軍艦費復活ノ先例ヲ以テ視ル可シ。故ニ委員會長良シ諸公ノ說ヲ容レザルアルモ、院議ニ於テ全院議員ニ對シ反覆周到諸公ノ衷誠ヲ瀝陳スルアラバ、和協ノ道豈望ミ難シトセンヤ。抑々又委員會ノ反抗彼ガ如キヲ致セシモノハ初期以來政府ニ確乎タル定見ナク、豫算ノ成立上屢々其議ヲ變更シ來リシニ因ラズンバアラズ。即チ政府ノ提案ノ提案ニ尙ホ多少ノ浮費アルヲ疑フニ因ラズンバアラズ。是レ寧ろ政府自カラ招クノ罪ナリ。故ニ諸公タル者ハ全院ニ向ヒテ一層其誠ヲ致サザル可カラズ。而シテ諸公ハ此ニ出デズ、僅カニ委員會ノ言動ニ視テ兩院和協ノ望ミヲ絶ツ、寧ろ大早計タルナカランヤ。

抑々衆議院ノ行爲タル、初期以來常ニ内政細目ノ末ニノミ拘々スルノ傾向アリ。而シテ第五議會